
九月文
Aya Kutsuki
佐和山物語
さわやま
結びの水と誓いの儀式

佐和山物語
結びの水と誓いの儀式

九月　文

BEANS BUNKO
15930
角川ビーンズ文庫

佐和山物語

結びの水と誓いの儀式

九月　文

15930

角川ビーンズ文庫

目次

序章　慶長十年三月十一日深更
鬼の棲まう処（すみか）……7

第一章　慶長十年三月十二日午
花も団子も……12

第二章　慶長十年三月十三日朝
鬼の萌芽（ほうが）……46

第三章　慶長十年三月十四日
愛宕屋敷御成（あたごやしきおなり）……81

第四章　慶長十年三月十四日夜
水合わせの儀……111

第五章　慶長十年三月十四日夜
縁の絆（えにしきずな）……144

第六章　慶長十年三月十四日深更
罠（わな）……189

終章　慶長十年三月十四日深更
鬼の傀儡師（くぐつし）……216

あとがき……222

佐和山物語

結びの水と誓いの儀式

登場人物紹介



井伊直継［いいなおつぐ］

あこの許婚。人とは思えぬ美貌の持ち主。強い「祓い」の力を持つ。



あこ

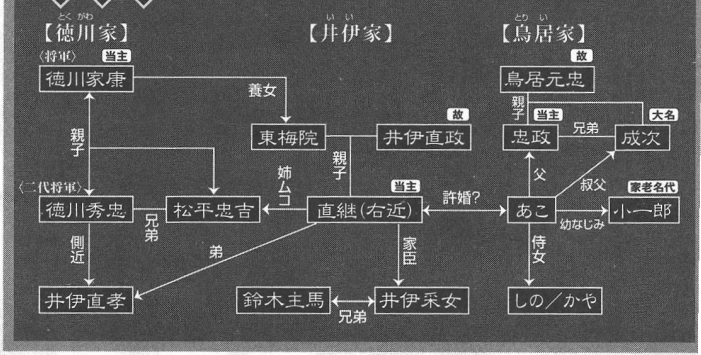
明るく気丈な、大名家のお姫様。特技は武術。まっすぐすぎる性格。

ものがたり

◆時は戦国明けてすぐ。嫁入りの旅の途中、3ヶ月も時を遡ってしまったあこ。「時迷い人」となったあこだけど、許婚の直継の、氷のような美貌に隠れた優しさに触れるうち、いつしか心惹かれるように。

◆しかし、あこが時空を歪めたことで、怨霊となった石田三成が力を盛り返す。あこが直継の弱点だと気付いた三成の次の手は……!?

家系図





小一郎[こいちろう]
あこの幼なじみで、もと許婚。
今でもあこを密かに想っている。



井伊采女[いいうねめ]
直継の守り役。穏やかで人当たりがいいが、仕事中毒気味。



たま
謎めいた童女。
実は、井伊家の守り神の水神様。



木俣守勝[きまたもりかつ]
直継の守り役その2。陽気で生命力に溢れ、モノノケも近づけない。



大谷吉継[おおたによしつぐ]
三成の盟友。三成の求めに応じ、怨霊となって甦る。知性派。

石田三成[いしだみつなり]
元佐和山城主。関ヶ原の戦いで破れ、京で斬首。怨霊となって甦る。

イラスト／久織ちまき

本文イラスト／久織ちまき

序章

慶長十年三月十一日深更　鬼の棲まう処

霊気の雄たけびが木々を揺らし、夜の山中にひびく。

闘の声がもたらす高揚感。思いだすのは五年前にこの地であった戦ではなく、さらに昔――

そう、二十年以上前、主君殺しの謀反人を討った勝ち戦だ。

あの日見上げた暁の空。それまで降りつづいていた雨がにわかに止んで、白んだ天に光が満ち、世界を照らしだした。それが確信の瞬間だった。――この方には天が味方している、と。

それからの十年あまり、ただひたすらに主に仕え、その片腕となって持てる力を尽くした。自分を認め、評価し、信頼をくれた。どれだけの庇護をもらっていたか、思い知ったのは光が失われてすぐのことだ。自分は光なくしては動けぬ者だった。

――自分はあの方とはちがう。みずから輝けぬ者だからこそ歩むべき道もある。

関ヶ原の山中はいまだ闇に包まれている。光なき道は、自分の道程にふさわしい。

三成は胸にやどる想いをたしかめ、足を踏み出す。と、そこにすかさず声がかかった。

「待て」

「……なんだ」

まさに出足をくじかれた形だ。三成は不機嫌さを隠さずふり返る。

場を読め、と己が言えた義理ではない。さんざん無視し、逆にそのような自分を諫めてきた

のが彼、大谷吉継だ。

「将たる者、やたら突っこむんじゃない。主はちと学べ。賢人たるもの万物から学ぶものだ」

その言に同意するように、幾多もの焔が彼の周囲を漂い、白の被衣をやわらかく揺らした。

「私は賢人になったつもりはないが」

即答した三成に、吉継は「そこが不遜だというのだ」と歎息をもらす。

「ではなんとするというのだ」

左近と兵庫、そして多くの同志の前で欠点をあげつらわれ、三成はいらだたしげに問うた。

無論、家臣ふたりは主君の会話に口を挟むことなく、無言で控えている。

「我々が出向くまでもなかろう。待てば獲物はやってくる」

「ただいたずらに時を待てと？」

「主が望むものはなんだ。殿下の遺志に反した徳川への報復か、豊臣の御代の安寧か」

白布の隙間からのぞく眼が、静かに問う。

吉継の言葉を吟味していた三成は、やがて「そういうことか」とつぶやいた。

「そういうことだ。秀頼君はまだ十三、事を急いては第二、第三の徳川を生む。十年かけても二十三、それでもまだ遅くない」

「とはいえ、いまの状況を放置はできまい？」

徳川は天下取りに周到な策をめぐらせ、残された烏合の衆の豊臣方はなすすべもなかった。

だがここで放置すれば、天下の情勢は徳川へとかたむく一方だ。十年後では、豊臣の名はすでにこの世から消し去られているかもしれない。

吉継は、足元にささる血錆の刀を両手にとると、一振りを清洲の方角に突きさした。

「まずは清洲にて秀忠を討ち、楔を打ちこむ」

穏やかな声音。それに反し、内容は容赦がない。

徳川秀忠が亡くなれば、順当にいけば次の世子は同母弟の松平忠吉だ。しかし秀忠が清洲城内で亡くなったとなれば忠吉は城主として責めを追及される。必然、世継ぎ争いの火種となる。

しかし三成は思案ののち、「いや、待て」と制した。

「あやつは甘い。あやつの娘千姫は豊臣の手のうち、長期戦に持ちこむなら討つよりほかに使い道がある」

「ならばそこは主に任せようか。だが討たぬとあらば、もう一石ほしいところだな……」

いま一振りの刀を吉継はもてあそぶ。三成はその刀の向かう先を正確に把握していた。

清洲城主松平忠吉、その正室は井伊直政の娘だ。吉継は、秀忠亡きあとの世継ぎ争いに井伊家を巻きこむつもりだったのだ。

「いまの佐和山は守りを固めている。仕掛けるのはむずかしいぞ」

「佐和山か――佐和山には鬼がいるな」

「佐和山に限るまい。人がいるところどこにでもいよう。人が己に飼う鬼が……ああそうか」

吉継の意図するところを汲んだ三成は、得心してうなずいた。
「鬼を統べろと、そういうことか」
ならば、と三成も血錆の刀を抜く。だが三成の行く手を阻むように、吉継はいま一振りの刀を投げ、その刃は鋭く地をつらぬいた。
「ではこちらを私にまかせてもらおう」
穏やかな声音とは対照的に、刀を飛ばした手に迷いはない。静かな戦意に圧倒される。
正直、つきあってくれるのがせいぜいかと思っていた。五年前の戦も自分が巻きこんだようなものだ。だがこの数年の徳川の行状に、彼なりに思うところがあるらしい。
「……そなたひとりで行く気か？　目覚めたばかりで事情にくわしくあるまい」
「生前付き合いがなかったわけではない。力のほどは、いまの主を見ればわかる」
吉継は三成の脇を抜けると、すれちがいざまに三成の肩に手を置いた。
「――主、かなり力が落ちているな。まだ傷が癒えていないのだろう？」
わずかに低い位置から、ささやくように吹き込まれる声。
図星をさされ、とっさに返す言葉が出なかった。
「封じたとはいえ兵部殿はあなどれん。主の古なじみの猪武者とは毛色がちがうぞ」
なにかほかに策を隠しているやもしれんしな。そうつぶやく声音はどこか楽しげでもある。
「そなたなら見抜けると？　見たところ、そなたも万全というわけでもなさそうだが」

「無論、真正面から当たるつもりはない。鬼をつつき出してくるだけだ。主は……そうだな、せっかく左近殿が自ら会いに来てくれたのだ。獲物を待ちがてら久闊を叙しているがいい」

「貴様……！」

とっさに言い返したものの、正面から吉継と視線がぶつかった。三成はいらだたしげに目を逸らす。その凪いだ湖面のような穏やかな瞳は、すべてを見通されているようで苦手だ。

「……他家の内情にいらぬ気をまわすでない。そなたは昔から――おい、待て」

言葉なかばにして吉継の手が肩からはなれ、三成はあわててふり返る――と、ふわりとなにかが夜風に舞った。被衣だと気づくまで瞬きひとつの時が必要だった。

白布で覆われた面が露わになり、三成は思わず息を飲む。

――彼を天女の末裔と言ったはだれだったか。

白い肌に流れる豊かな長髪――それは黄金とも銀色ともつかない色をしていた。

異国では黒髪でないこともめずらしくないと今でこそ知っている。だが郷里の伝説そのものの姿に、異国を知らぬ土地の者がそう噂したのも無理もない。のちに得た病も、人の世の瘴気に耐えられずに得たのだと噂された。

三成も知らぬわけではない。だが数十年ぶりにあらためて見せつけられれば驚きを隠せない。

「では、またな」

言葉をなくした三成に澄んだ笑みをのこし、吉継は夜闇のむこうへと姿を消した。

第一章　慶長十年三月十二日午

花も団子も

やわらかな陽射しの下、整えられた往来を人が行き交う。

道の脇には旅籠が軒をつらね、軒下からは焼き餅や団子の香りがただよい、道ゆく人にやわらかな食感を思いださせる。どこにでもある宿場町の光景だ。

ほかの宿場とちがうところといえば、立ちならぶ旅籠と街道の間を川が流れていることか。豊かな水をたたえる醒井宿では街道と旅籠は橋でむすばれ、橋脚にはとれたての野菜をつなぎ、清らかな流水にまかせている。

新緑の柳の下、小川は天から射す光をはね返しながらさらさらと流れ、冷えきっているだろうそれらがまた食欲をかきたてる。

「なにか食べていくか？」

「い、いえ！」

食べものに惹かれて、きょろきょろ見まわしていると思われたらしい。あながちまちがいでもないが、それよりも気にかかることがあった。

あこは声を落として、「……ねぇ」と傍らを歩く少年に問いかけた。

「なんか、さっきから見られてない……？」

すれちがう人、追いぬく人、道行く人々がことごとくこちらに視線をむけてゆく。

あこはごく普通の小花模様の小袖姿、少年――直継の藍の羽織も、特に目立つものではない。たしかに生地は良いものを使っているが、どこぞの兄のように見るからに華美というならまだしも、道行く人のみながみな、一目で布の質を見抜くような目利きばかりとは思えない。刀を佩くにはまだ早いと思われているのだろうか。だが早い者なら十五で元服だ。細身の直継は実年齢よりも若く見えるが、早すぎるという年でもない。

「女連れがめずらしいのやもな」

直継は気にした様子もなく、歩みを進める。

たしかに旅人は圧倒的に男のほうが多い。女もいるが、宿場で働く者ばかりで旅装ではない。あこも日よけの笠を手にしているが、武家の娘が城下から足をのばしただけという風情だ。

「けれど……」

こちらを見る旅人たちを逆に見つめかえす。すると、その者たちが気づくまでに間があった。あこの視線に気づくと、ばつが悪そうに目をそらし、なにも見なかったふりをしてそそくさと立ち去る。

（わたし、じゃないわよね？）

自分を見ているなら、こちらから向けた視線にすぐ気づくはずだ。では視線を浴びているのは自分ではなく――

「――ああっ！」

思わず声を上げたあこに、「どうした」と直継が顔を向ける。
そのはずみで、結いあげた黒髪が羽織の上で優雅に踊った。
（右近殿！　顔！　顔……！）
いくら装いが普通でも、直継の面立ちが変わるわけではない。優美さと鋭さを兼ねそなえる貴種然とした面には、俗世に染まりきらない気品がある。逆に、身をやつせばやつすほど浮いて見えたことだろう。
今ならばぎりぎり、上級武士の子弟のお忍びといったところだ。無論、その解釈だと、あこの役どころはお付きの侍女になる。
（侍女でもいいけどね……もう慣れたし……）
しかしなんとなく隣を歩いているのが不釣り合いな気がして、ちょっと距離を置こうかしらと歩みをゆるめると、直継も合わせて速度を落とした。
自身が衆目を浴びていることには気づかないくせに、こういうところは察しがいい。
「疲れたか」
（いえ、全然！）
醒井宿は佐和山から下ること数里、馬で半刻ほどだ。宿場の殿に馬をあずけて歩いているとはいえ、道は平坦で、佐和山の城内を行き来するよりよほど楽だ。
「わたしは大丈夫よ。気にしないで」

しかし直継はあこが遠慮していると思ったのか、ちかくの茶屋に目を留めると、「ここで休んでゆくか」と店先の縁台に腰を下ろした。

（一刻もはやくお屋敷にもどったほうがいいんじゃ……）

だが直継が座ってしまったからには、ひとり先に行くわけにはいかない。かといってすぐ隣に腰かけるのも気恥ずかしくて、あこはわずかに間をあけて腰を下ろした。

出された温かなお茶でのどをしめらせ、ほっと息をつく。実際はまだなにも解決していないのだから気分だけだ。

「それにしても、よくおぼえていたな」

「霊水のこと？」

「道中、宿場町を見てまわる余裕などなかっただろう」

あこが江戸からの旅で、最後に寄ったのがここ、醒井宿だ。

豊かな山水が宿場に溶けこむ醒井には、水にまつわる伝承が多い。古くは、伊吹山に赴いた日本武尊がこの地の清水で病を癒したというものもある。

「そうなんだけど、江戸からの道中ずーっと雨だったから、小一郎が……」

自然とその名がすべり出て、あこははっとして口をつぐんだ。

直継と小一郎の関係がよくないことは、今朝も確認したばかりだ。

今朝、あこがひとりで件の神社に行ったところ、小一郎に見つかった。幼なじみの小一郎は、

あこの性格からここに来るにちがいないと踏んでいたらしい。滝の水に手をのばしたところをすんでのところで止められ、代わりに汲んでくれた。

その帰りに愛宕屋敷まで送ってくれたのだが、そこで直継と出くわした。

ふたりが言葉を交わすことはなく、その場の空気が凍りついていたことはあこにもわかった。采女がいてくれて助かった。場が和んだとまではいかないが、采女が緩衝材となってくれるおかげで、一触即発のふたりが衝突せずに済んでいる。

（ほんと、なにを言ったの小一郎……）

小一郎の主として、自分が間に立って取りなさないと――そうわかってはいるが、直継が小一郎の無礼を不問としたことで、機会のないまま嫌な空気をずるずる引きずっている。

「――あの者が、どうした」

あこの言葉が途中で消えたためか、直継が不審げに訊ねた。声がわずかにいらだち混じりなのは、やはり小一郎への悪感情のせいだろうか。

「あ、ごめんなさい。せっかくこの宿場には水神さまがいるみたいだし、お屋敷に入る前に厄落としにお参りしておいたほうがいいっていうから、それで」

この水が使えるんじゃないかな、とか思って――と言いかけて、またもや言葉尻が消えた。

先日、あこが一時この世界から消えたことについては、若かりしころの直政と出会ったことは伏せたまま、いつかはわからないが社の古い時分にまぎれこみ、陶器の中の水を浴びたら帰

ることができたと話してある。

たまは水神、水の力に由来する。神力を宿す水があれば時を超えられるかもしれない。しかし滝の水では力が足りないことがわかり、水の名所として知られる醒井に汲みに来たのだ。

霊水はすでに汲み終えて、直継があずかっている。

（神社で会っているはずなのに、たまはわたしのことを知らなかった……）

飛んだ世界とこの世界で、たまの記憶はつながっていない。ならばこの世界と五月の世界もまたつながっていないのではないだろうか？　もしそうだとすれば、五月に帰る方法は直継との別れの方法でもある。

（……まだ、決まったわけじゃないもの）

あこは目をつぶって、不吉な予感を頭から追い出す。

望む未来はきびしいとわかっていても、それを口にはしたくない。言葉は言霊となって現実を連れてくる。

「食べないのか」

いつしかふたりの間に青磁釉の皿が置かれていた。串に刺さった焼き団子がのっている。あこの好きな醤油の甘みだれだ。

それはいかにもほくほくとやわらかそうで、午時の食欲を刺激され、あこは手をのばした。

「こういうところに入ることってあるの？」

「まあ、ときどきな」

意外だった。この宿場も領内ではあるが、そうそう城から出ないものだと思っていた。

しかし「必要に駆られてだが」と直継がつけ足したことで得心がいった。ものが出るのは佐和山に限らないということだろう。

「でも、よく采女殿がひとり歩きを許し――」

「おい、兄ちゃん」

背後から会話に割って入る声があった。

ふり返ると男がいた。兄ちゃんと言いながらも、相手は優に二十歳を超えている。派手な染めの衣を着くずした無頼漢だ。本人は洒落ているつもりかもしれないが、風雅とはほど遠い。

やっぱりあの人って趣味がよかったのね、とどこぞの兄を思い出していると、

「女連れとはいい身分じゃねぇか」と、男は団子の皿に手をのばした。

(ああっ！　わたしのお団子……!!)

男は歯で串から抜くと、品もなく音をたてて食べはじめる。あこは男をきっと睨みつけた。

「おうおう、気の強そうな顔もいいよなぁ。ちょっと向こうで酌でもしてくんねぇかな」

酒の入った息を向けられ、男の手が伸びてくる。むかっときたあこは、その手をひねりあげてやろうと身構える。だが、あこに触れる前に男の手を止めるものがあった。――白扇だ。

「――触れるな」

直継は、ふり返りもせずに閉じた扇で男の手をさえぎる。後ろに目でもついているのかと思えるほど、その扇は的確に手の動きを読んでいた。

直継はそのまま手首を返し、男の手を撥ねあげる。

「てめ……っ」

激昂した男は直継の肩を摑もうと手を伸ばす。しかしふり返った面に、一瞬にして男の意気が削がれた。男の目は直継の容姿に釘づけだ。

だがあこは、視界の端で、直継の細い指が次の動きにはいるところをとらえていた。

（扇術……？）

しかしその扇がひるがえる前に、なにかが男の頭上にふり下ろされた。

ばきっ、と大きな音をたてたのは、茶屋の女中が手にしていた盆だ。

「いっ……てぇ……」

男が頭を押さえてふりむくと、女中の背後にいた用心棒が男の腹に容赦なく拳を入れた。いまひとりの用心棒が、うめき声をあげる間もなく落ちた男を抱え、その場から消える。

すべてが一瞬の出来事だった。

あこが唖然としていると、女中はなにごともなかったかのように「とりかえてまいりますわね」とにこやかに笑い、ひびの入った丸盆に団子の皿をのせて下がってゆく。

（え……えっと……）

あこは目の前の現実にうろたえたが、とりあえず元の場に座ってみる。
そして考えてわかったことはひとつ——女中も用心棒も、素人ではないということだ。
まずは直継に助けてもらった礼を述べると、特に気にした様子もなく「ああいった手合いをまともに相手にするな」と扇を腰におさめた。処し方に手慣れた感がある。
「あの、なんとなくなんだけど……身の上、ばれてない？」
遠慮ぎみに問うたものの、直継はあっさりと肯定した。
「言ったろう。ときどき来ると」
江戸からの帰りに泊まることもあるしな、とつづける。
江戸からとなれば大名としての宿泊、泊まる場所は普通の旅籠ではない。大名専用の宿だ。たとえばこんな感じの——と隣の立派な構えの宿を見やって、直継がこの茶屋を選んだ理由に思い至った。
（目茶苦茶ばれてるじゃない！）
直継の身の上を知っている者なら、あえて見ないふりくらいするだろう。遠慮ぎみながらちらちらと顔を見ていたのは、直継の身分を知らない通りすがりの旅人だ。
（ああ、だから采女殿がひとり歩きを認めたわけね……）
行き交う旅人や売り子でにぎわう宿場町、ごくごく一般的な風景に見える。だがそのうち幾人かは忍びが紛れているのだろう。この茶屋などは完全にその類、直継が毒見もなしに茶に口

をつけたのもそのためだ。

湯気をたてた団子が運ばれてきて、女中は「ごゆっくり」とやわらかく微笑む。しかしあこはひきつった笑いを返すことしかできなかった。

（……そりゃ、目につかないようについてきているとは思ったけれど）

相手は本業、いくら感覚をとぎすましても誰が忍びかわからない。だが、誰かに見られていると思うとなんとなく居心地が悪い。やることなすことすべて報告されてしまう気がする。

（そういう立場だってわかっているけれど……右近殿は息が詰まらない？）

あこがおずおずと見上げると、視線に気づいた直継がこちらを向いた。

「食べないのか？　なんなら全部食べてもかまわないぞ」

（いえ！　そういう意味じゃなくて！）

そんなに団子を奪った男を恨みがましく見ていただろうか。

（こんなやりとりまで報告されちゃうのかしらねー……）

主馬殿が聞きつけたら絶対手土産にもってくるわね……とため息をつきながらも、腹の虫に負けて串に手をのばす。と、ふたたび声がかかった。

「兄上……？」

（また団子泥棒!?）

今度は奪われてなるものかと、あこは眼光するどく往来を見やる。

しかし、そこにいたのは無頼漢でも博徒でもなく。

（ええ!?）

思わぬ再会に呆然とするあこには目もくれず、青年は直継を凝視している。だが確信を持つやいなや、青年は往来で膝をつきかけ、すかさず直継が一言投げかけた。

「こっちに座れ」

「――は？」

「往来の邪魔だ」

「いえ、ですが」

「いいから座れ」

語調は乱さないものの、その口調は有無を言わせない。

青年は硬い表情で「失礼、いたします」と告げて、向かいの縁台に腰かけた。

「ひさしいな。そなたが来ようとは。勤めはどうだ」

「は。おかげさまをもちましてつつがなく」

そうか、と直継は淡々と告げ、特に驚いた様子もない。

（……直政さま、じゃなかったの？）

青年は直継とよく似た切れ長の眼、細めの面立ち、長い黒髪を組紐で結いあげている。

年は直継より上に見える。しかし、細身のせいもあるだろうが肩幅は小一郎ほどはないし、

首筋の肉づきもまだまだ幼い。先日、佐和山で見かけたときはもう少し年上かとも思ったが、直政と思いこんでいたためにそう見えたのかもしれない。

直継の口ぶりからしても、この青年はおそらく弁之介直孝――直継の弟だ。

「して、用件は」

「彼の方が、本日清洲にてもう一日ご逗留されますので、そのご連絡に。こちらへのご到着は明後日となります」

「わかった。あとは私から伝える。御苦労」

素っ気ないねぎらいの言葉に、直孝は岩のように表情を硬くしたまま頭を下げた。

（ほとんど会ったことがないって聞いているけど……）

なつかしの兄弟の再会のはずだが、親愛の情や温かさといったものがまったく感じられない。直孝も目を伏せたままで、まるで血縁関係のない家臣が報告しているかのようだ。

（恰好のせいかしら……？）

直孝の衣は小袖も黒、袴も黒、柄は入っているがまったく目立たない。

髪は光を受けてもなお黒く、目も直継のような色みはなく黒一色だ。ただひとつ、髪を結う組紐だけが赤、しかしそれすらも、なんらかの理由で不承不承使っているような印象だった。

待ちわびた春がきて、この時季はみな冬の気配を払拭するかのようにことさら明るい色を身にまとう。草木も人も春めくなかで、冬をひきずる黒は目立つ。布地は春用の薄地だが、浮か

れた気分を押しつぶすような重々しい空気が漂っている。
ここに来たのも務めのため、そうでもなければ好んで来るか——そんな胸中がにじんでいるようにも見える。だが直孝は報告を終えても立ち去らず、直継は弟をちらと見やった。
「なんだ。……そなたも食べるのか？」
直継はあいかわらずの無表情ながら、わずかに邪険にしている様子がうかがえる。
（……仲がよくないのかしら？）
直孝もそれを察したか、「いえ、団子は結構です」と辞退し、そのまま下がろうとした。
だがひとつ覚悟を決めたものか、直孝は居ずまいをただし、腿に拳を置いて硬い表情のまま兄を見据えた。
「——兄上、付き人は侍女おひとりですか」
（やっぱり侍女に見えるわけ!?）
黒ずくめの直孝にくらべれば、自分の小袖はずっと華やかだ。が、姫にふさわしいかと言われればうつむかざるをえない。宿場町までくり出している時点で大名家の姫失格だ。
しかし直継は事情を説明するのも面倒と思ったか、無言で返答に代えた。
「ご領内とはいえ不用心がすぎましょう。御身いかなる立場と心得て——」
直継はその言を「また次の機会にな」とさえぎった。
話は終わっていなかったが、おない年の兄弟とはいえ相手は当主、その命は絶対だ。

直孝は唇を引き結び、口端にくやしさをにじませながら引きさがった。
「……では今しばらくで次の隊が通りかかりますれば、お早く屋敷へおもどりください」
ではこれにて、と直孝は兄に一礼して立ちあがると、あこにちらりと視線を向けた。
その瞳には、先ほどまでとはまたちがう鋭さがある。
（なんか睨まれてる……？）
まるで仇敵を見るかのような視線だ。
直孝は硬い面持ちのまま、あこの隣をすり抜ける。その瞬間に一言、落としていった。
「――他言無用」
（えっ!?）
あわててあこはふり返る。だが直孝がふり向くことはなく、黒い背中はそのまま往来の人の波へと消えていった。
すれちがいざまのほんの一言。だが、その低く硬質な声音はまちがいなく。
（あの人やっぱり……！）
その言葉、そしてあの声音は、数日前に佐和山であこが猿に襲われているところを救ってくれた青年のものだ。
当初采女は、あれは直孝ではないかと言っていた。それを直政だと思いなおしたのはなにが原因だったか――たしか直継が、弟が来ることを聞いていないと言っていなかったか。

（兄上に……いえ当主に内緒で、あの人、いったいなにをしていたの？）

「一日遅れる、か」

しかし直継には先ほどの一言は聞こえていなかったらしい。

秀忠の到着が一日遅れるなら、一日準備に余裕ができるというわけでもない。明日の到着にむけて調整していたのだから日持ちしないもの、たとえば活ける花や食材などは調達しなおす必要がある。ものによっては膳の中身まで変わるだろう。必然的に裏方の仕事は増える。

「はやく報せにもどったほうがよさそうね」

直継はしかたないとばかりにうなずく。だが、「団子を食べてからでも十分間に合うが」との言に、あこは顔を赤く染めながらも素直にいただくことにした。

そんなふたりの様子を、往来の向かいの茶屋からにこやかに眺めている者がいた。

まだ若い行商人だ。

頭には手巾を巻いて髪を覆い、深い山道を越えて一息ついたとばかりに茶碗を手にくつろいでいる。山深い中山道も、醒井までくればしばらくは平坦な道、琵琶湖に出れば大津、坂本まで水路もある。そこまでゆけば京の都まであと一日だ。

行商人はにこやかな面をくずさないまま茶をすすり、だが注意深く周囲をさぐっていた。

自分のほかに彼らに意識を向けているふたり――偶然とはいえ、役者がそろっている。しかし舞台に関係のない者も多い。関係がないどころか、舞台に上がられては困る輩だ。中でも邪魔なのは――

行商人はなんの前触れもなく、近くに掛けていた旅人の首に腕をまわした。

傍目にはごく親しい知人に耳打ちするように見えたことだろう。しかしふたりは顔見知りどころか、たがいの顔すら見ていなかった。わかっていたのは、いるという気配だけだ。

「――人の獲物を横取りしないでもらえるかな」

旅人は驚愕に目を見ひらいた。

「あれは大切な生き餌だ。せっかく泳がせているものを、勝手に仕留められては困るんだ」

そう告げると、行商人はとらえた旅人の首筋に、旅人が口のなかに潜ませているのとおなじもの――毒針を打ちこんだ。

即効性はない。だが確実に死に至らしめるものだ。

旅人に扮していた刺客も、なにをされたかを察したのだろう。すぐさまその腕から抜けだすと、山奥へと姿を消した。

助けを求めにいったのではない。死体を世にさらさないためだ。忍びはそうして人目のない場所で果てる。運がよければ、山を渡っている仲間に自分の死を伝えることができる。

刺客はふたりのうちの一方を狙おうとしていた。広い目で見れば、彼もまたおなじ目的のた

めに動いているのかもしれない。だがたとえ味方でも、計画を邪魔する駒は排すべきだ。

不確定要素の排除――なにもかも定まらぬ未来から、望む道を切り開くために必要なことだ。

行商人はなにごともなかったかのように笑みを浮かべ、「さて、いまひとりに仕込みにゆくとしようかな」と行李を背負う。銭を置いて立ちあがると、店から出てきた店主が声をかけた。

「ずいぶん上機嫌だね。いい品でも入ったかい」

「予想外に仕込みの目途がたってね」

ちょっと仕込みに立ち寄って、あとは上客がついてくれれば上々かな。

他愛ないやりとりのあと、旅路の安全を寿いでくれた店主ににこやかに別れを告げ、行商人は流れる人ごみに姿を消した。

あこたちが茶屋を出て、廏に馬を取りにゆくと、遠くから行列の先触れの声がきこえた。

廏の格子窓からのぞき見ると、旅人たちはみな道の脇に寄り、膝をついている。

直孝に報せてもらって助かった。身分を隠している以上、これに出くわしていたなら直継も膝をつかねばならないところだった。

ちらとその姿を想像してみる。――似合わないにもほどがある。

直継ならば、どのような恰好をしていても、従者とまちがわれることはないだろうに。

（そんなに侍女姿が似合ってるのかしら？　わたしだって、姫らしく気品と威厳を、って思わなくもないんだけど……）

努力することはやぶさかではないが、容姿もさることながら、根本的なところで似合わない気がする。これが育ちのちがいかしらね、とあこは深くため息をついた。

「この隊列も通りすぎてゆくみたいね」

「醒井に泊まれる人数などしれているからな。この時間なら、武佐あたりまで行くだろう」

二代将軍となる秀忠の上洛に従う兵は十万とも言われている。いくつもの隊に分かれ、すべての隊が通りすぎるには数日かかる。宿所に泊まりきれず、寺社などを借りることも多い。

その兵力は秀忠の護衛の意味もあるが、一番の目的は、将軍の位が徳川家代々に受け継がれること、徳川家が多くの大名に支持されていることを、街道筋の人々と豊臣方に知らしめることだ。

（そんな方が愛宕屋敷にいらっしゃるなんて……）

あこの生家も今でこそ有数の大大名だが、天下人の御成などとても考えられない。

しかし御成を受ける当人の直継は、大行列を見てもとくに感慨もない様子で、馬を引くと「では行くか」とうながした。廊からは裏街道に抜けられ、行列に妨げられることなく宿場を出てゆける。

直継は先にあこを横乗りに乗せると、慣れた手つきで真鹿毛の馬にまたがった。

（ち、近……っ！）

あこの身体をかこむように手綱を取られると、どうしても寄り添うかたちになる。来るときにもふたり乗りだったとはいえ、一朝一夕に慣れるものでもない。

醒井行きが決まったとき、「わたしも馬に乗れるから！」と主張したが、佐和山を離れれば迷い人の自分になにが起こるかわからないことを懸念して却下された。

しかし自分を守るためとはいえ、接していては直継の身体に障る。あこができるかぎり身を離そうと馬のたてがみをつかむと、うるさそうに馬首を振って拒絶されてしまった。

（い……痛かったのかしら、ごめんなさい……）

馬がゆっくりと歩みはじめる。身を離しているのも不自然なので、あこはきつく目を閉じて寄りかかった。

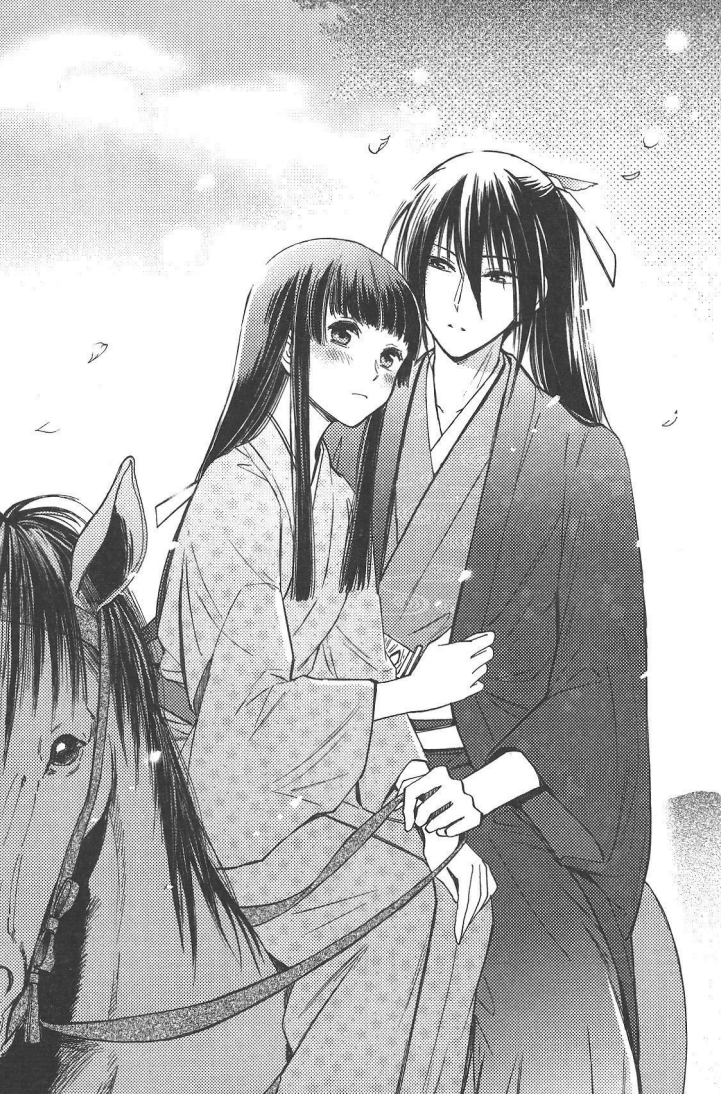
（悪鬼成敗煩悩退散、諸行無常南無阿弥陀仏！）

意識しないように思いつくままに脳内を埋めてみる。だが目を閉じた分、ほかの感覚が余分にはたらき、ほのかな白檀の香りが意識内に忍びこんできた。

（右近殿の衣から？　右近殿の香り……っ!?）

心臓がおおきく跳ね、あこは平衡をくずし、とっさに左手で抱えられた。

「大丈夫か？」



「え、ええ……」

落馬はまぬがれたものの、抱き寄せられてさきほどより状況はまずくなった。ますます鼓動が高まり、首筋が脈うっていることすら自分で感じとれるほどだ。

（ちゃんと髪は洗ったし、香油だってつけてるし、小袖だって綺麗だし汗もかいてないし！）

言い訳をならべたてても気安めにならない。落ちついて落ちついてとくりかえし暗示をかけ、あこは呼吸をととのえた。流れこんでくる白檀の香りは意識的に無視だ。その一方で、甘さをおさえた涼やかな香りが直継によく似合うとも思う。

自分の鼓動が落ちついてくると、触れた耳から直継の鼓動が聞こえるような気がした。こちらは馬の足とおなじく規則的に音を刻み、いっさい乱れる様子がない。

（わたし、だけ……？）

あわてふためいているのは自分ひとりだけだった。直継が平然としていることに胸をしめつけられる。

あこは寂しさをおぼえて、ほんのすこし、直継の小袖をつかむ指に力をこめる。すると、すぐさま「どうした」と顔を覗きこまれた。

「ご、ごめんなさい！　なんでもないの！」

どうしてわかるのだろう。時折とんでもない勘ちがいをしてくれるのに、つらいときにはすぐに察してくれる。言葉はすくなく、態度もすごく素っ気ないけれど、とても優しい人だとい

うことを知っている。

直継といるとすごく暖かな気持ちになれるとともに、ちょっとしたことで寂しさをおぼえる。こんな想いは初めてで、はっきりとはわからない。——けれど、多分。

（右近殿が、好き……だから？）

胸の奥から想いが次から次へとあふれてくる。言葉にして吐きだせば楽になれるのだろうか。伝えたいと思う。けれど。

（言われても、困るわよね……？）

直継が優しいのは彼の性分からくるもので、おそらく自分だけに向けられたものではない。それに想いを伝えたところで自分にはなにもできない。できるのは、いま一緒にいられるこのときを抱きしめて、心の奥で大切な想い出にして、元の時間に持って帰ることだけだ。

（右近殿は知っているの？）

この世界と迷い人の住まう世界は同じではないということを。それをわかった上で、こうして一緒に帰る方法を探してくれているのだろうか。

以前直継は、迷い人はめずらしくないと言っていた。ならば迷い人のこともよく知っているのかもしれない。

あこの世界での迷い人は、元の世界にもどってから、海の底に宮殿があっただの山の奥に桃源郷があっただのと夢幻のように語るときく。

もしあこがこの世界で見たことを元の世界で語ったなら、それらとおなじ存在のような目で見られるのだろう。嫁ぎ先の白猫が水神さまで、山には悪霊が跋扈して――などと言ったところでだれも信じまい。キツネに化かされたと思われるのがせいぜいだ。

そうして夢の世界で見た幻と割りきって、今までの日常にもどり、本当の許婚に嫁ぐ――

（あ、この山道……）

見覚えがある。井伊家に嫁ぐために半月前に来た道だった。醒井から佐和山へ向かう道なのだからおなじなのはあたり前だが、直継と一緒に通ることになるとは思わなかった。

そのときは許婚を支えたいという一心で、こんな想いを抱くなんて思わなかった。

（あ、また……やだ……）

帰ると決めたのに、想いがこみあげてくる。思わず泣きそうになって、袖で顔を覆った。

「――あこ？」

やさしく気遣う声音が、胸に刺さる。

「ご、ごめんなさい。日陰のせいかしらね、ちょっと寒いかなーって」

嘘のくしゃみでその場をごまかすと、強く抱き寄せられた。

（う、右近殿の唇が……！　か、髪に触れてない!?）

また心音が高鳴りはじめたが、その吐息を感じたいと思っている自分もいる。

あこは馬の上でじっと固まりながら、あの日とちがう空の色を見つめていた。

ふたりが愛宕屋敷に着いたのは日暮れ前、直継が着替えて表座敷にゆくと采女が控えていた。
「無事でお戻りいただき、よろしゅうございました。若様のご到着は明後日とか」
直孝からの伝言は城に帰るなり家人に伝えてある。すでに采女の耳にも届いていたらしい。
「大丈夫か」
「ええ、もちろん。数日の遅延は想定しております。万事滞りなく」
采女は十日ばかりの休養から明けてまだ二日め、だというのに仕事でとまどっている様子はない。自邸療養中にどれだけ仕事をさばいていたか、それだけで知れようというものだ。
「留守中、なにもなかったか」
「右近さまのお耳に入れるようなことは特に。それと、醒井の水の件ですが……」
声を落とした采女の言を最後まで聞かず、直継は「だろうな」と返した。
水に触れたときに予想はしていた。醒井の水も神力は宿しているが、時を渡るほどの力はない。たまの力の一助になる程度だ。
「たまはどうした」
「たまさまならば、早々に湖にお戻りになりました」

三成の一件から半月が経つが、たまの疲労はまだ癒えていない。秀忠の御成にそなえて一日のほとんどを琵琶湖で過ごしている。

たまの本質は竜神、本気で眠るとなれば十年、百年の単位で眠りにつく。毎日短時間でも顔を見せるだけ良いほうだ。

「とりあえずたまの回復待ちだな。すべてはあの方を見送ってからだ。準備はまかせた」

つづけて直継は、無理するなと言いかけて、やめた。采女が聞き入れるはずもない。

「――あいつにも仕事を振れ」

その言葉に采女はやわらかく微笑み、相談させていただきますと告げて部屋を下がった。

表座敷にひとり残され、直継は腰元の扇を手に取った。

白扇――午時、醒井で用いたものだ。

今朝、主馬に彼女との醒井行きを打診したとき、すんなり許されるとは思っていなかった。

『まさか、人の恋路を邪魔するような真似はしませんよ。馬に蹴られたら名折れですから』

主馬の仮名は主馬寮、宮中の馬を預かる部署に由来するものだ。たしかに馬に蹴られていい名ではない。

彼女に関して調査済みであることはあきらかだった。意に染まぬ相手なら容赦なく、馬を斬り捨ててでも阻んできただろう。彼女になにを仕掛けたのかはしらないが、どうやら主馬の眼鏡にかなったらしい。

『あのですね、殿はもっとわがままになっていいんですよ。身分がどうの、世継ぎがどうのと考えるのは、どちらかといえば俺たちの役目です。いざとなれば身分でも肩書きでもなんとかしますよ。殿は考えるより先に、思うままに動いたらどうですか』

『頭の中でどれだけ考えたって無理ですよ。どれほど聡い子だって、さわって、口に入れて、はじめてどういうものか理解するんです。まずは触れてみて、お心に聞いてみるのがいいんじゃないですかね？』

たしかに主馬の言うとおり、他人に触れることを恐れていた。

欲しいと望んで伸ばした指の先――思いだすのは緋扇と、焼けつく痛みと、寒椿の花。

――触れないで！

雪の日だったと記憶している。

母は恐怖に駆られるままに己が子の手を扇で払いのけ、母にわたそうとした緋色の寒椿は積雪の上に落ちた。

そのときの自分は、母の恐怖も、そのあとの呆然とした顔も、なにも理解できなかった。ただ、払いのけられた指先に、自分は厭われたのだと――厭われている自分は母に、侍女に、他人に、触れてはならなかったのだと、そう思った。

時を経ずして年があけて養育係がつき、勉学や武芸に打ちこむうちに、その記憶ひとつを抱えたまま奥の生活から離れていった。

――こ、怖くないから！

そういって逆に自分の手をとった彼女。強がりながらも精一杯受けとめようとしてくれた。

自分はずっとあの日から立ち止まったままで、なにも成長できていない。

母に自分の手を払いのけられたとき、当たったのは扇の先だけ。雪遊びで冷え切っていたとはいえ、さほどの痛みではなかったはずだ。あのときはただ驚くばかりだったはずなのに、思い出すたびにその傷は深くなっていった。

彼女と一緒なら、歩きはじめることができる気がする。主馬の言うように素直に手をのばしてもいいのか。欲しいものは欲しいと言えばいいのだろうか。

しかし、と思考をふさぐ声がする。

自分が当主であればこそ――彼女も大名家の姫であればこそ、捨てられないものがある。それは生まれながらに与えられた、家という名の血の刻印だ。

自らを救い、支え、そして縛るもの。

もう子どもでいられる時期は過ぎ、泣き叫んだとて手に入らないものはあると知ってしまった。彼女もそれは知っている。自分勝手な都合で振りまわすことはできない。

大切なにかが伸ばした指のその先にある。そうわかっているのに、指先は緋扇の記憶から抜け出せない。

『――ちゃんと子どもを終えておかないと、大人になれませんよ？』

直継はうつむき、かすかにふるえる指で扇を強く握りしめた。

御前を辞した采女は、廊下の角を折れたところで立ち止まり、表座敷をふり返った。

主に体調の悪い様子はなかったが、なにか思いつめた表情をしていたことが気にかかった。

自分が不在の間に、ずいぶん心労をかけた。気分転換にと外出を勧めたのだが、なにか別の問題を抱えさせてしまったのだろうか――

そう想いを馳せていると、背後から両肩にしなだれかかってくる腕があった。

「あーあ、やっぱり帰ってきちゃったんだ、殿」

「――兄上」

声を聞く前から予想はついていた。これほど親しげに触れてくる相手は兄の主馬しかいない。

「外泊はダメですよ、とは言ったけど、ちゃんと日暮れ前に帰ってくるなんていい子だねぇ。ここはひとつ、猫神さまに頼んで大雨でも降らせてもらうべきだったかな」

不可抗力なら一晩一緒にすごしてきただろうにねと、兄は采女の背中におぶさるようにしたまま不遜なことをのたまう。

「予定外の雨を降らせればすぐに意図が知れますよ。それにあの方がおふたりの仲を後押しするような真似をするはずないでしょう」

「まあ、そりゃそうか。猫神さまは小姑気分満々だもんね」

どちらかといえば姑だろうにねー猫神さまは若づくりだから、と兄はうそぶく。

その『猫神さま』ことたまは、醒井の水を判じたあと、明後日の御成にそなえて神力を蓄えるため、ふたたび琵琶湖にもどっている。その神力を野暮用に使っているときではない。

采女は兄の手をどけ、正面に向きなおると、己と似た顔が興味深そうに見上げていた。

もう江戸帰り気分はやめたのか、今日の兄の小袖は普通の柄だ。それどころか、渋い色みの檜皮色――どちらかといえば年かさの者が好むような色合いだ。

「兄上、右近さまになにをおっしゃったんですか」

「え？　大したことじゃないよ。思うがままにしてみればって言っただけ。本当の許嫁なら何十年でもかけて気持ちを育んでもらえばいいけど、彼女の場合、そうもいかなそうだし」

またそのような真似を、と、采女は歎息を漏らす。

「……いつ姫とお会いになったのですか」

兄は、事情を知ればあのふたりの関係を否定すると思っていた。それが予想外に後押ししたとなれば、絶対に彼女を見ているはずだ。人も見ずに動く兄ではない。

「うん？　それは内緒」

「――兄上」

「冗談だって。そんな怖い顔しないの。――宴のあとにさ、殿に大切な姫がいるらしいって聞

いて、どんな子かと思ったらあの子でね。桜をね、一枝もらってよろこんでたんだよね」

誰からもらったかは言わずともわかった。部屋に生けるには小ぶりの枝が、彼女の部屋にあったことを思い出す。おそらくあの神社からの帰りにもらったのだろう。

「ああ、なんかかわいいなぁって思ってさ、ふたりとも。あの子もあの感じじゃ地位とか財産とか機密とか攪乱とかそういうのが目当てでもなさそうだし、半端な想いで殿を傷つけることもなさそうだと思ったから、あとは本人たちにまかせようかなって」

若いっていいよねぇ、と兄はいくつも変わらない身で嘆息する。

主君の心に立ち入る以上、我が身かわいさで勝手に身を引かれるような相手では困る。それなりの覚悟があるのかを見にいったのだろう。

ふたりの関係がつづくにしろ終わるにしろ、納得のいく形に収めなければいたずらに心を傷つける。

無論、兄が気にしているのは主君である直継の心だけだ。必要とあれば、兄は彼女の心はおろか、身を断つことも辞さないはずだ。その一方、彼女が守るべき対象となれば、地位も力も持てるものすべてを駆使して守り抜く。

敵にまわしたくない相手が味方であるのは心強い。しかし。

「右近さまが難しいお立場におられること、兄上もわかっておいでしょうに」

想いのままに共にいることはたやすい。だが、おたがいに身分とそれに付随する責務がある

以上、気持ちだけでは片付かない問題もある。

「そうかな？　べつに難しいお立場を変えることは難しくないだろう。とりあえずこの世界に姫がふたりいる状況がまずいっていうなら、今から江戸にいる姫を佐和山に呼びつけてさ、姫ごと一行を殺して埋めれば、残った彼女たちが本物になる」

迷い人の歪みなんて時とともに薄れてゆくものだし、山に多少ものが増えるかもしれないけど、いまさら怨霊や人魂が十や二十増えたところでねー。

声色ひとつ変えずに告げられた言葉に、采女は息をのんだ。

「彼女の家人だけ元の世界に返すっていうなら、彼女に内緒で江戸の姫と一行に来てもらってさ。一行には姫を置いて帰ってもらって、姫はあとでこっそり片付ければいい。彼女と家人たちは顔を合わすことなんてないんだし、真実は永遠に闇の中ってね」

どちらかといえば土の中なんだろうけど、と主馬は飄々と述べる。

そこには嫌悪感の欠片もない。兄は目的を達成するためにこの方策が必要となれば、自らその役割を引き受けるつもりなのだ。

「荒事にしたくないっていうなら今から江戸に使いをやってさ、姫の顔を確認してきてこう言おうか。『江戸の姫は別の顔の別人だから君はここに残っていいよ』って。おなじ顔だったら、『江戸には君とおなじ顔をした姫がいるから君はもういいよ、元の世界に帰ってくれないかな』って。おなじ顔だからって姫と彼女が同一人物とはかぎらないけど、まぁ双子だと思って殿も

いつかまた気に入ってくれるかもねーって、完全に当家都合のひどい話だけどね」

　でもこれをやっちゃったら、来るのが同一人物だったときの関係修復は難しそうだねぇ、と笑う兄を、采女は色を失ったまま凝視する。

「馬鹿正直に話したら尾を引きそうだから、『また会えるからだいじょーぶだいじょーぶ』ってだまくらかしてさ、ほーら行ってらっしゃーいって無理やり追い返すほうがまだましかな。それでだまされるようなバカな子は、逆に当家に来てほしくないんだけど」

　――兄は本来、葡萄色や橡色といった深い色合いを好む。しかし求められるがままになんでも着こなしてしまうのは、己の本心を覆い隠す性分そのままだ。

　面に笑みを浮かべていても、思惟の奥は暗く、その闇はあまりにも深い。

「……とまぁ、ほかにもあれこれ状況を考えてみたけどね。いまの時点でいくら考えたところで、将来なんてだれにも、それこそ猫神さまにもわからないんだ。大事なのは、いま殿がなにを選ぶか、それだけだ。御家の都合とはいえ、俺たちが無理に元服させて、年不相応に我慢することを覚えさせたんだ。ここで形ばかり大人ぶってわきまえて、後悔してもらいたくない」

　もちろん将来的にこちらが迷惑しないように、だけどね？　と主馬は冗談めかしてつけくわえる。――初恋は尾を引くっていうからさ。

　年不相応なのは兄もおなじだ。兄もまた、関ヶ原の後の長宗我部攻めを機に、必要にかられて子供でいられなくなった。その過去が主君を想う気持ちに反映しているのだろう。

兄が顔をのぞきこんでくる。わずかに色の薄い——本来持っていた色を喪った瞳だ。

「——おまえもだよ」

「私はなにも……」と采女は言い逃れようとしたが、言葉をつむぐ前に「無茶するなって」と頭をぽんぽんとたたかれた。昔とおなじように。

「あっ、おまえやっぱり背が伸びただろ!?」

え？　と問い返す間もなく、兄は「背比べしよう！」と背後にまわりこむ。

「ってあー、これまたずいぶん伸びたなぁ……」

もたれかかる兄と、あきらかに肩の位置がちがう。しばらく離れているうちにいつしか兄の背丈を追い抜いてしまったらしい。

「こりゃまだまだ伸びるな。いつかは抜かれるような気はしてたけどさー」

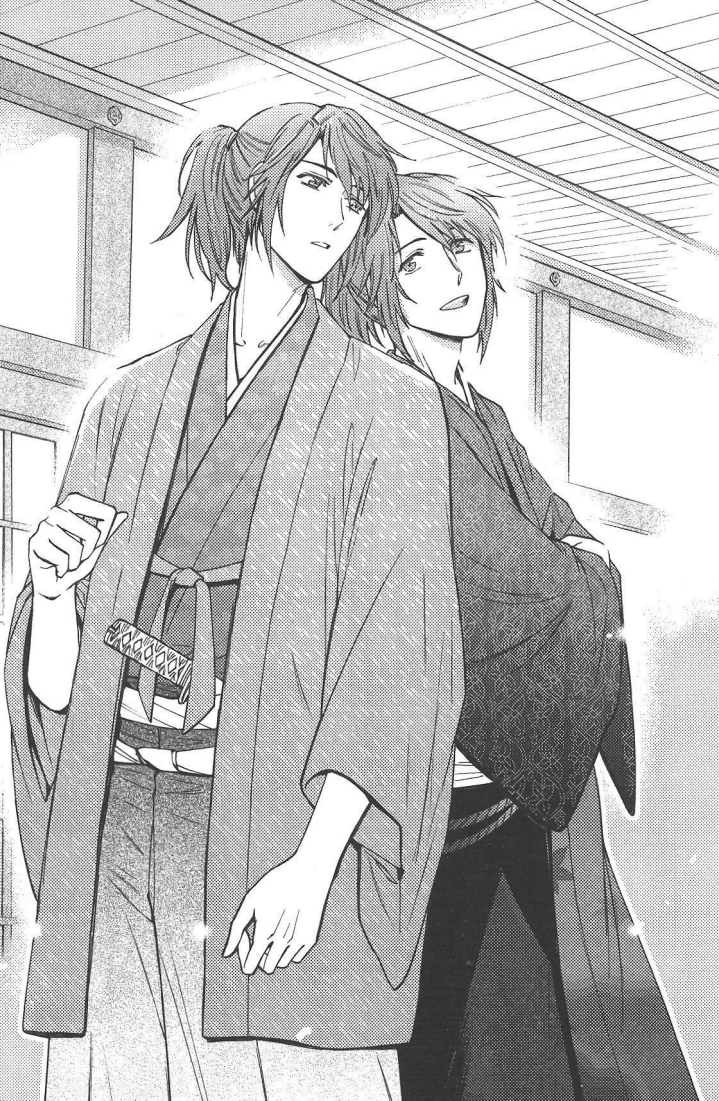
そのうち殿にも抜かれるのかなぁ、これから育ちざかりだし……と兄は背中に体重を乗せてくる。

——背丈だけ伸びても。

兄にはずっと敵わない。いままでも、そしてこれからも。

触れあった背、そこから伝わる熱。

采女は背丈の差に離れてしまった年月を思いながら、兄に背中をあずけた。



第二章　慶長十年三月十三日朝

鬼の萌芽

夜の街道を駆る。

満ちた月が周囲を朧に照らしだすが、見えるのは立ちならぶ木影ばかり。

暗き道の先は見えず、ただ闇にむけて馬首を向けるだけだ。降りつづいた雨で道はぬかるみ、疾駆する馬の脚は重い。

――はやく、はやく……

はやく行かねば、戦がはじまってしまう。

気持ちばかりが先走る。その脚は砂地を進むようにずしりと重かったが、さらに重みを増した。まるで水の中を駆けているかのようだ。重く、息苦しい。

しかし本当に馬の脚が動かなくなった。思わぬところにはまりこんだのやもしれない。大雨の増水で、川はもはや本来の形をなしていない。

手綱を引いて馬首を引き上げる。だが馬はいななき、口から泡をふくばかりだ。

馬がもがいてあばれるごとに、馬体ごと闇へと沈んでゆく。

「若様！」

式部の声だ。だが父の片腕のそなたまで巻き添えにするわけにはいかない。

来るな。そう叫びたかった。しかし闇の沼に引きずりこまれ、ろくに言葉にならなかった。

――かようなところで……
戦場にたどりつくことすらできず、己は果てるのか……！

はっと目覚めるとそこは寝所だった。
襖にとざされた室内。水墨画の衝立のむこうで、灯火が揺らめいている。
「夢、か……？」
息が乱れ、寝汗をかいている。足は冷えきっていたが、敷布の感触に安堵した。
いまは上洛の道中で、連日のように宿所が変わり、寝苦しかった夜もある。しかしここは清洲、弟の城だ。この部屋で寝起きするのも二日め、なにも不安に思うことなどないはずだ。
まだ朝は遠い。喉をうるおしてもう一眠りしようと、秀忠は身を起こす。――と。
「――まことに夢と思うてか？」
すぐ耳元、背後からささやく声がした。若い男の声だ。――気配が、なかった。
何奴。誰何しようとするが、身体はおろか、喉まで凍りついて動かない。
「そなたの足元にあるものはなんだ？」
先ほどまであったはずの敷布の感覚が消える。あるのは泥だ。
ひやりと冷たく、重いそれに腕を摑まれ、身体ごとひきずりこまれてゆく――
「……う……あぁぁぁ……っ!!」

夜闇に、男の叫び声が響きわたる。

夜間の巡回をしていた直孝は、その声を聞きつけると、すぐさま主の寝所につながる部屋の障子を開け放った。

隣室にひかえていた宿直の小姓はすでに寝所に飛びこんで、「殿！　殿!?　いかがなさいました!?」と声をかけている。主の息はひどく荒れていた。

直孝は寝所に立ち入り、四隅、天井、掛け軸とすばやく目を走らせる。だが気配はない。感覚を研ぎすましたまま、瞳を閉じる。――なにも、いない。

直孝は主君の傍らにひざまずくと、低く、静かに問いかけた。

「――殿、いかがなされました」

「直孝、か……」

二十代半ばの若き主君――徳川秀忠は、直孝の姿に安堵すると、小姓を下がらせた。

直孝は秀忠の側近のひとりにすぎないが、秀忠の弟忠吉に姉が嫁いでいる縁がある。忠吉は秀忠のただひとりの同母弟、その義弟である直孝に寄せる信頼は厚い。

秀忠はやや落ちついたのか、いつもの温和な笑みを見せた。気遣わせまいと無理をしているのだろう。だが髷を結いあげた首筋には汗がにじんでいる。

――自分の前でまで偽らずとも。

しかしそれを口にはできず、直孝は床の傍らにあった手巾をさしだした。
「また、夢にございますか」
「いや……」
手巾で顔をふきながら、秀忠はなにかを思い出すように面を伏せ、左の手首をつかんだ。失礼と声をかけ、直孝は主の床の左側にまわりこむ。許しを得て主の手をとるが、特に目立った痕はない。しかしその手は冷たく、ふるえていた。
直孝は懐に手を入れ、取りだしたものを秀忠の手に収めた。
「これは？」
「先日、江州に行った際にもらってきたものです」
薄藍色の錦の御守りを見てとって、秀忠は安堵の息をついた。
「そうか。そなたの家は、祓いの力があるのだったな」
「残念ながら私にその力はございませんが、これが代わって殿をお守りいたしましょう。まだ朝には早うございます。この先の旅もございますれば、いま一度お休みくださいませ」
私も隣室に控えておりますれば、と言葉を継ぐと、秀忠は首を横にふった。
「いや、宿直はまかせてそなたも休め」
「ですが……」
「私は大丈夫だ。明後日には江州に着く。そなたも故郷に疲れた顔は見せられまい」

私も右近にきびしい顔をされてはかなわんからな、と秀忠は笑みをこぼす。
その笑みにも疲れがにじんでいたが、主の命にそれ以上反論するわけにもいかず、直孝は一礼して御前を退いた。
寝所の隣室にひかえる小姓に、くれぐれもと言い置いて部屋を出る。廊下に控える小姓によって部屋の障子が閉ざされると、直孝はひとつ息をついて空を見上げた。
朝焼けにはまだ早い。だが夜空というには星の光は弱く、朝の気配は確実に近づいている。
ここ数日、主がうなされているのは知っていた。京が近づくにつれ、だんだん症状が重くなっている。重責を思わずにはいられないのだろう。
二代将軍の座――二十七歳で負うには重すぎる地位だ。
大坂の豊臣秀頼は十を超えたばかりで内大臣の位にあるが、子どものままごとにすぎない。
大人になってはじめて位にともなう重責を知ることだろう。
直孝自身もこの上洛で任官との内示を受けている。
藤原直孝、従五位下掃部介。
藤原というのは井伊家の本姓だ。以後の名乗りは井伊掃部介直孝となる。
井伊掃部介直孝――その名を口に乗せてみたとき、湧いてくるのは嘲笑だ。
井伊の名も、掃部の名も、直孝の名も、なにひとつ父が知るものではない。
――父に認められなかった自分が。

庶子として認められたのを最後に、市井に埋もれて人知れず消えゆくはずだった自分が、その名を名乗り、表の世界でなにをしようというのか。

――否、埋もれるはずだったこの命、表舞台に引き上げられたのは天の運命だ。

その名に殉じよと天が告げた。ならば、己のなすべきことは――

湧き上がる感情。それを飲み込んで直孝がたたずんでいると、ふと気配を察した。

目を走らせると、煌々と照らされた中庭、その茂みの奥に光るものを見た。

気づいていないふりをして抜刀の機をうかがう。すると音を立てて茂みから姿を現したのは山犬だった。忍びでなかったことに安堵はできない。山犬も十分に脅威だ。

警戒を解かずにいると、次いで現れたのは三十代半ばの精悍な顔――見知った男だった。

「土佐守さまでしたか……」

直孝は息をつき、手を下ろす。

「こやつが騒ぐのでな」

細身の割に低い声でそう告げると、土佐守――鳥居土佐守成次は足元の山犬を見下ろした。

薄灰色の山犬は、いまは落ち着いた様子でおだやかに主を見上げている。

「若様のご様子はどうだった」

「大事ございません。いま一度休まれるとのおおせにございますれば」

「そうか。ではこの場を離れるとしよう」

成次は縁側にあがると、直孝とともに秀忠の寝所から離れた。山犬は屋敷にはあがらず、しかし距離を開けることなく主についてくる。

この山犬は、子犬のころに先代の元忠が拾ってきたもので、世話したところなついたのだときいている。だがもはや胴だけでも片腕を伸ばしたほどの大きさ、もうおとなの山犬――立派な狼だ。側に置くには危険すぎる。

だが山犬は人よりよほど鼻がきく。成次は鳥居家の別家を立てていまや大名家の当主だが、側役であった頃の習いもあるのだろう、率先して夜の番を引き受けていた。

成次本人も、陽に灼けた褐色の肌に余分な肉を削ぎ落としたしなやかな身体つき、しかも山犬まで連れているので、大名というよりまるで狩人だ。

「ここ数日、うなされておいでのようだが」

「これから重責を担われる身なれば、御心にかかる物事も多いのかと」

「間者か？」

「それらしき者はおりませんでした」

素っ気ない返答だ。だが成次は気分を害した様子もなく、「そうか」と安堵の息をついた。

両者の間になごやかな空気はない。警戒しあっているわけでもないが、親密さもない。

直孝は外見こそ優美だった父に似ていると言われるが、藤原の名から想像される雅さにはほど遠い。どちらかといえば遠慮ない物言いで人の気を害することが多く、気安い人づきあいと

は無縁だった。

だが成次とはいまだ衝突したことがない。直孝の出生や生い立ちを口さがなく噂する者たちの中には、こう言う者もいる。

――山犬だけにようなついておるわ。

無論なついているわけもない。成次が余計なことを口にしない性質なので、衝突の余地もないだけだ。

しかし、この日ばかりはちがった。

「――なにか、視えたか」

成次はしずかに問いかける。黒の深い瞳に捕らわれ、直孝は息をつめた。

家康の傍らにあった成次は、父――直政の力を知っている。しかし直孝自身は、その力を目にしたことがない。それどころか父と顔を合わせたことすら片手で数えるほどだ。

直孝は瞳から逃れるようにわずかに目を伏せ、言葉を返した。

「私にはそのような力はございません」

「だが」

「私は兄とはちがいます。私は父には認められなかった身ゆえ」

これもまた成次が知らぬはずのない事実だ。自分は父に認められてここにいるわけではない。それをみずから持ち出すことで、直孝は成次の言葉を封じた。

嘲笑の種を逆に利用する——うまくないやり方だとわかっている。相手が成次でなければ、だからかわいげがないのだとまた噂を立てられるところだ。しかし、笑って言い逃れるほどの器用さもない。

直孝は成次の言葉を奪うと、「これにて失礼つかまつります」と一礼し、あたえられた部屋へと足を向けた。

成次は、黒をまとった直孝の背中を見送る。

その後ろ姿に気負いはない。だが気が張っていることはわかる。侵入者が忍びではなかったと知っても直孝が警戒を解くことはない。

直孝が警戒しているのは敵ではない。味方であるはずの幕臣だ。

(まるで野生の仔だな)

警戒心が強く、人の世にあっても常に距離を置き、気を許すことがない。

父元忠は、見捨てられなかったありとあらゆるもの、山犬でも猪でもついには人までも拾ってきたが、直孝の背中は家に連れてこられた当初のそれらを思い出させた。

(放っておけないのは父の血か)

廊下のむこうをじっと見つめたままの成次を、山犬が見上げる。

成次はその視線に気づいてその場にしゃがみこむと、「なんでもない」とやさしく愛犬の頭

に手をのせた。

午、愛宕屋敷の自室で書を読んでいたあこは休憩に首を回すと、床の間に目が留まった。床の間と柱はこれでもかといわんばかりに磨きあげられ、木目がつやつやと輝いている。へたに触れれば指の跡がつきそうだ。畳も昨日醍井に行っている間に替えられていた。

いつも掃除は行きとどいているが、今日はまるで別の部屋のように見える。

無論これらはすべて、次代将軍――徳川秀忠の御成のためだ。

（さすがに奥まではいらっしゃらないと思うけれど……）

不測の事態もありうる。采女が差配しているだけあって、さすがに抜かりがない。

「姫さま、今日はおとなしいですね？」

朝餉以来、手伝いで席をはずしていたしのとかやが部屋に入ってきた。休憩時らしい。

「さすがに今日はお邪魔になるわけにはいかないもの」

この上洛が秀忠の二代将軍宣下のためだとは誰しもが知っている。慶事のための道中に不祥事をおこしては一大事、その準備の最終確認のために、屋敷中がぴりぴりしている。

「さすがに御成ともなると、奥まで気迫がちがうものね」

「ああ、そのことでしたら御成じゃなくて――」
かやが口を開きかけ、しのがとっさに妹を制する。
「え、どうしたの？」
かやは姉と目を合わせると、無言で立ち上がり、縁側へとつながる障子をぴしっと閉ざした。
天気が良いので、障子越しにやわらかな光が入ってくる。障子を閉ざしていても視界に問題はない。だがいつもより身を寄せてきた侍女ふたりに、ただならぬものを感じる。
「え、なになに？　どうかしたの？」
しのは口元に袖をあててあこの耳元に寄せ、声を低くして問うた。
「姫さまは、殿に弟御がおいでなのはご存じでしょうか」
「え？　ええ、まあ……」
知っているどころか、昨日、醒井で本人に会っている。しかしなぜか軽々しく言い出せる雰囲気ではなかった。
「おない年の異母兄弟とお聞きしているけれど、上さま――じゃなかった、若さまにお仕えしていて、今回も一緒にいらっしゃるんでしょう？」
「その御方が、その……なにかと家中を乱すことが多いらしくて。今回のお泊まりにもなにかあるのではないかと、奥の者は気を張っているようですわ」
「なにかって？」

「なにかと気の短い方で、数年前に出仕の際は、御家からつけられた養育役を無礼討ちにされたとか」

「ええ⁉」

思わず声を上げたあこに、しーっとかやが口元に指を当てる。

養育役は、将来の後見役となることを期待され、重臣がつけられることが多い。嫡子でない直孝にどれほどの者がつけられていたかは知らないが、直継に置きかえてみれば木俣守勝を斬ったようなものだ。

「他にも、幾人も家人を斬っているとか、いまの境遇に不満をもって養子の口を探しているとか、しかしそれも殿がお認めにならないために、中にはその……殿の跡目を狙っているのではないかとの噂も」

「さすがにそれは……」

言いすぎだ。跡目を――主君の命を狙うは大逆、忠義を重んじる幕府がそのような者を認めるはずがない。

だが直継はなにかと伏せりがちだ。事情を知らない者なら、病弱のために先は短いと思うかもしれない。直継に子のないいま、跡を継ぐのは弟の直孝だ。

（あ……じゃあ、御子ができれば家を継ぐ可能性が低くなるってこと？）

当主が亡くなったとき、跡目は弟ではなく、幼少であろうとも子が継ぐものとされている。

家の跡目争いが絶えないため幕府がそう定めた。

直孝に関する噂が本当ならば、子を産む可能性のある女人――特に屋敷の奥の者は、邪魔者ということになる。

「姫さまのことが知れれば、どのような暴挙に出られるやもしれません。明日はくれぐれもおとなしく、目につかぬようにしていてくださいませね」

それだけ告げると、ふたりはまた仕事にもどっていった。

（ええっと……）

いま聞き知ったこと、昨日の出来事、そして数日前に佐和山で見かけた直孝の姿に混乱する。

昨日醒井で会ったのは、直継の様子からして直孝であることはまちがいない。そして昨日言い置かれた一言からして、佐和山で会ったのも直孝だ。しかし佐和山で会ったときは、守勝も采女も直継も来るとは聞いていないと言っていた。

（木俣殿はたしかに策士だけど、嘘をついているようには見えなかったし……）

その後に会ったということだろうか。しかし清洲との往復時間を考えても、佐和山に長居していたとも思えない。それに城に入ったなら、当主に挨拶してゆくのが筋だろうに――いや、城に入る際に名乗れば、直継の耳に入っているのが普通だろう。

（正規の門から入ったのではないということ……？）

あの他言無用の一言。会ったことを知られるとまずいということか。

（――あの人、いったいなにをしにきたの？）

侍女ふたりの言葉を鵜呑みにするわけにはいかない。ふたりが知っているのは、あくまで侍女の間での噂話。正室腹の当主がいる屋敷内で、庶子が目の敵にされるのもしかたがない。

しかし、直孝の行動に不審な点があるのもたしかだ。それにくわえて直継への他人行儀な態度、そしてあこを射抜いた瞳の光。穏やかならぬものがあるように感じる。

（実際に本人を見ているのに……わたし、いったい何を見ていたの？）

しかも二回もだ。なまじ直政に似ているので、その印象にひっぱられて本人を見ている余裕がなかった。小一郎ならばしっかり見ていただろうにと思うと、自分の不甲斐なさに落ちこむ。

あこは脇息にもたれて、おおきなため息を漏らす。――と、遠くから女の悲鳴が聞こえた。

「えっ、なに!?」

屋敷の奥のほうからだ。あこが声のするほうに駆けると、その先にあるのは仏堂だった。

恐怖のままに叫ぶ女の声は、もはや言葉になっていない。しかしその声音に確信があった。

（東梅院さま――）

そのまま駆けつけるべきだとわかっている。しかし、足が動かなかった。

思い出したのは、突きつけられた懐刀。初めて愛宕屋敷に来た日のことだ。

（わたしの、せい……？）

おなじように声を聞きつけて侍女が集まってくる。そして彼女たちは背後の存在に気づくと、

すぐさま道を譲った。直継と采女だ。
「そなたは下がっていろ。——あとで行く」
直継は厳しい表情のままそれだけ言い置いて、采女とともに母の元へとむかった。
あこが部屋にもどってほどなく、直継が訪ねてきた。直継は上座につくなりため息をつき、考えこんでいる。その面には疲労の色が濃い。
(待ったほうがいいのかしら……)
すると直継はそこにあこがいたことを思い出したように、ふと視線を上げた。
「ああ……すまない。母上は落ちつかれた。いまは采女がついている」
「あの、こういうことってよくあるの?」
「なかったとはいわないが、ここしばらく落ちついておられたのでな」
あこも懐刀を向けられて以来、おなじ屋敷に住まっていてもこのようなことはなかった。
「やっぱりわたしの……」とあこが言いかけたところ、直継が言葉をさえぎった。
「いや、——呪符だ」
「呪符?」
「仏堂から見つかった。悪しきものか幻でも見られたのだろう。身を害するものではない」
だがそれが問題だ、と直継は言を継いだ。
「先日、采女の邸にもおなじからくりで仕掛けられた。それの残りかとも考えられるが……こ

ういうやり方は、正直きつい」

屋敷内に迷い人がいることを逆手にとった方法だ。

力を持つ直継本人にはしかけず、周囲の人間を攻めて、精神的に追い詰める。不安が不安を呼び、恐れの感情が死気を呼ぶ。

（これもあの人が？）

石田三成――半月前あこが話したかぎり、搦め手より正攻法を好む性格だと感じた。しかし先日の文箱の男、あれも三成の手の者のようだった。采女の邸に仕掛けたのはあの者だろう。

（あの人に、誰かが意見した、とか……？）

当人の性質とはちがう方法でも、献策があれば容れることもあるだろう。それが信頼のおける者ならなおさらだ。

石田三成の家臣と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、三成に過ぎたるものとして、佐和山の城と並び称される腹心だ。佐和山城での宴席にそれらしき人物はいなかった。だがあれから半月ばかり、三成がなりをひそめていることも不安をかきたてる。

「御成を前に、屋敷中の気が立っている。ささいなことでも大きな不安材料になるからな」

「あの、それって、秀忠さまだけじゃなくて弁之介殿のこともあるんじゃないかしら……？」

おそるおそるその名を出してみると、直継はため息を落とした。

「……そなたの耳にまで入っているのか」

「あの、その弁之介殿のことなんだけど――」
「その名はあまり口にするな。中には気の細い者もいるからな」
その言葉にあこはとっさに口をふさぎ、ごめんなさいと謝った。しのとかやも、その名を出すのに障子を閉ざすほどの警戒ぶりだったことを思い出す。
（やっぱりあの話はただの噂ではないってこと？）
家督に関してはどこの家でもかかえている問題だ。本人にその気がなくとも、家臣の対立に担ぎ出されることもすくなくない。表向きの政と距離を置く奥ですらこうなのだ。表ではもっと過敏になっていてもおかしくない。へたに触れないほうがよさそうだ。
直継の様子を探ると、なんとなく気だるげな感じだった。
「……ねぇ、疲れてない？」
御成に直接関係のない奥ですら空気がちがうのだ。表にいる直継は、表情に出さないだけで、緊張や気疲れもあるのかもしれない。
「熱とかあるんじゃないの？」
あこは直継の額に手を伸ばしかけたが、ふとなにかが脳裏をよぎり、その手が止まった。
（これもわたしのせい……？）
先ほど東梅院の不調についてあこが言いかけた言葉。それを直継がさえぎったのは、つづく言葉が事実だったからではないだろうか。それを言ってしまえば、言霊に縛られる直継は否定

することができなくなる。

たしかに呪符も一因ではあるだろう。しかしそれに翻弄される下地を作っているのは自分なのではないか。

（右近殿の不調も、醒井の行き帰りに近くにいすぎたから……？）

気づかないうちに直継に負担をかけたのかもしれない。一緒の外出に自分ひとり浮かれて、気持ちを整理するのに手いっぱいで。

――右近殿はちょっとしたことでも気づいてくれたのに。自分は全然やさしくなかった。

ふと直継が視線をあげ、不自然に宙に浮いたままのあこの手を見やる。

あわててひっこめようとすると、逆に直継がその手を取った。直継はそのまま引きよせて、ちかづいたあこの頬に触れた。

熱があると思ったのに、その指先は思いのほか冷たい。

（じゃなくて……っ！）

「さ、触っても大丈夫なの!?　た、たた、体調とか悪くなったりしない!?」

「以前ほどではない。まったく気にならないわけでもないが」

「じゃ、じゃあ……」

やっぱり離れたほうが。そう思い身を起こそうとするが、動揺のあまり力が入らない。畳に手をついて身を起こそうとしたあこに、追い討ちがかかった。

「でもこのまま触れていたい」

（――――はい!?）

いやか？　と、いつもより近い位置にある瞳が問うてくる。

「い……いい、けど……」

あこの了承を得て、頬に触れた細い指がかすかに動く。

直継の指の冷たさに反してあこの頬は熱くなる一方だ。しかし直継の表情はいつもと変わらず、真面目な顔で見つめられると、まるで薬師に診察されている気分だ。

（わたしは地蔵！　いまは地蔵！　お地蔵さまは風雪に耐えるのよ！）

あこは全身を硬直させて冷たい指先をやり過ごしていると、直継がぽつりとつぶやいた。

「……やわらかいな」

（うそ!?）

地蔵に徹して身体も顔も硬直しているのに、まだやわらかいなんて。

（――お団子食べすぎた!?）

忍びお手製の団子はとても美味で、直継が手をつけないのをいいことに全部いただいてしまった。それがこんなときに祟ろうとは。

（忍びの食べものは腹もちがいいっていうし、最近、剣の稽古も休みがちだし……って、そうじゃなくて！）



「あ、あの、右近殿、どういう心境の変化……!?」

先日までの直継からは、予想外の事態だ。

だが「心境？」と、意外な言葉を聞いたかのように、直継はかすかに眉をひそめる。

「だってこんな、急に……ねぇ!?」

訊く相手に同意を求めてどうすると思ったが、雑念が多すぎて思考がうまくつながらない。

「ああ、主馬に言われた。あまり考えるなと。頭で考えても大人にはなれないそうだ」

（あの人、いったいなに吹き込んでるわけ!?）

「それで、か、考えるのはやめたの!?」

「いや、そういうわけでもないが」

そのまま言葉を待つが、つづきはない。

（考えたの!?　考えてないの!?　どっち!?）

考えぬいた結果として触れたくなったのか、なんとなく触れてみたくなったのか。どちらであってもなにひとつ状況は変わらないのだが、あこにとっては重要なことだ。というか、そもそも直継はなにについて考えていたのだろう。

悩む直継に主馬が、『ほっぺたでも触ってみたらきっとおもしろいものが見られますよ』とかなんとか吹き込んで、人をおもちゃにして遊んでいるのではなかろうか。

（いじめるにしたって、右近殿を使うのは卑怯じゃない!?）

次にいびりにきたらきっちりお返しさせてもらうから！　と、気恥ずかしさから湧きあがる熱を主馬への敵意にすり替えていると、心の動きを察したか、直継の指が止まった。
「……嫌ならいいが」
「い、いえ、いくらでも貸してあげるけど！　ほっぺたくらいいつでも！」
ただし地蔵になるための心の準備時間をもらえないかしら!?　と思っていると、「そうなのか」と直継は神妙な面持ちで納得し、それからわずかに表情をゆるめると、あこの頬を手のひらで包みこんでからその手を離した。
（なにに納得したわけ――――!?）
言葉がすくないのはあいかわらずだ。こちらが理解できるように、頭の中身をすべてはきだしてほしい。
しかし、言われたところで、理解できるほど余裕がないのもたしかだ。自分の熱が伝わったせいか、最後に触れた手のひらは表情とおなじですこしだけ温かさがあって、その感触がぐるぐると頭の中でめぐっている。
「今日明日は表にかかりきりだ。くれぐれも」
「あ、うん。右近殿も無理しないでね」
直継は上座を立ちかけて、ふと思いだしたように「先日の水だが」と言葉を継いだ。
「やはり、道を開くほどの力はないそうだ」

「そう……」

期待していなかったわけではない。しかし醒井に行ったとき、すでに、違うという思いがあった。

あこは霊感の類はからきしだ。それどころかみずからなにかを引き寄せる厄災体質らしい。しかし先日の神社の滝の水は、ものに襲われそうになったときは、とっさに使えると感じた。

(その滝の水も、昨日のはダメだったし……)

「やっぱりあの日が特別だっただけなのかしら」

采女が言うには、あの日は四年前に直政が祈りを捧げたまさにその日、社を換えたこともあって、神社にとっても大切な日だ。そのため御神体の滝に特別な力が宿っていたのではないかとのことだった。

「そのことも踏まえて考えたのだがな。帰るために必要なのは、霊水に宿る力そのものではなく、その時の中に存在した水なのではないか?」

「その時の……?」

「迷い人には元の時間と縁がある。その縁がこの世界の安定を乱すわけだが、逆にいえば、その縁が引きあう力を使うことができる。迷い人が元の世界に帰れるのもそのためだ」

過去のたまは、あこの懐に入っていた水をかけてあの世界から閉めだした。あこが元の五月ではなく三月に帰ってきたのは、あの水が三月に汲んだものだったからだ。そう考えると、先

日の一件とつじつまが合う。
「じゃあ、元の時間の……五月の水があればいいってこと？」
「ひとつの可能性にすぎない。その説を取るなら必ずしも水でなくてもよさそうだが、たまの力は水気に由来するからな。水が最良だろう」
元の時間にあった水――帰る手がかりが、見つかった。
（水が見つかったら、わたし……）
「あこ？」
呼びかけられて、思惟の底から連れもどされる。
「どうかしたか」
「あ、ううん。荷物のことならわたしのほうがくわしいから、水はこちらで探しておくわね」
愛宕のお屋敷にはなさそうだから、あるとしたら采女殿のお邸かしら。荷物はほとんどむこうに置いてあるはずだし、向こうにいるみんなに聞けばなにかわかるかも――と矢継ぎ早に言葉を継ぐと、直継は低くつぶやいた。
「――そう急ぐことはない」
「え？」
「いや……どのみち、たまの手が空くのは御成が済んでからだ」
無理に明るくとりつくろったのを見抜かれたのだろうか。気分を害したのか、直継はあこか

ら視線を逸らし気味にそう言って立ち上がる。そして、
「また借りにくる」
そう言い残して、部屋をあとにした。
（え、借りるってわたし、右近殿になにか貸して……）
「ええっ!?」
あこが言葉の意味を理解したのは、直継の足音が遠ざかってからのことだった。
あこはまた火照りだした両頬を手のひらでおおう。頬は両方とも熱くなっているが、左頬だけ先ほどの感触が脳裏をめぐって妙にこそばゆい。
頬に指先で触れられただけでこうなのだから、ほかの箇所に触れられたりなでられたりした日には――
（～～～～～～～～～～～～!?）
脳内が暴走して、あこはとっさに頭を抱えこんだ。押さえておかないと、いろんな想像がこぼれ落ちそうだ。
（今日のは主馬殿の陰謀だから！　それ以上なんてないから絶対！　考えちゃダメ!!）
「さ、さあ！　ちゃんと水を探さないとね！」
頭から手を離して顔をあげる。しかしわざとらしい声音は、誰もいなくなった部屋にむなしく響いた。掃除の行きとどいた部屋は、やけに風とおりがいい。ちかくに人はいないらしく、

その静けさが、あこの浮かれた気分をさらってゆく。
（あ……なんか、やだ、な……）
直継がいない。ただそれだけで、周りの景色がちがって見える。
一緒にいてくれること、気づかってくれること、優しくされることがすごくうれしい。けれどもうれしければうれしいほど、直継のいない世界は色を失ったように感じる。——そして、この色のない世界が本来の景色だ。
会ったことのない本当の許婚。幼くして家の名を負い、そしてこれから自分と一緒に負ってゆく人。その人の支えになりたいと思っていた。それが自分の望みだと思っていた。
けれど、その先にある本当に欲しかったものに、気づいてしまったから。
——きっと本当の許婚と会っても、こんな気持ちにはなれない。
（……だから、急がなくていいなんて言わないで）
自分だって急ぎたくて急いでいるわけじゃない。
帰る方法なんて探したくない。見つかってほしくない。そう思っている自分がたしかにいる。
けれど、前を向いて歩きだすと決めたのも自分だ。
（だから、はじめないと、ね）
ふりかえると、床の間で桜の枝がそよいでいる。——歩きだすための力はもうもらったから。
まずは自分のできることから、一歩ずつ。

（立ち上がって、着替えて、采女殿のお邸に行って……水を、探すの）
采女の邸には小一郎も、鳥居家のみんなもいる。なにも怖いことではない。
（半月前となにも変わらないじゃない。ただ、元の場所にもどるだけだもの）
自分にそう言い聞かせて、あこは立ち上がろうとしたが、できなかった。
――なにも変わってなくなんてない。
あこはあふれてくる涙にうつむいた。

少年が斧をふりおろすと、刃先は丸太の中心を捕らえた。
刃を噛ませたまま二、三度叩きつけて食いこませると、丸太はかこんと綺麗に真二つに割れた。斧を手にしていた少年――弥介は、よしっ、と拳をにぎりしめる。
傍らにいた宗二が切り株の上に次の丸太をたてると、袖口から己の手首が見えた。
江州に着いて御一門の邸に滞在をはじめてからというもの、もっぱら外仕事を任されるせいで、弥介の肌は健康的に焼けている。それにひきかえ、おなじ陽の下にいても赤くしか焼けない己の腕、おなじように鍛錬しても肉のつきにくい己の身体――
宗二は思考を断つように手から目を離し、弥介が割った薪を拾った。それらをまとめて結び、

薪の山に積みあげてくるのが宗二の役目だ。元気のありあまっている弥介と、几帳面な自分。ふたりの性格を考慮したら、この分担になっていた。

まだ十六歳、これからが成長の盛りだ。成長の早さだって個人差はある。そうわかっている——わかってはいるのだが、おない年だけについ意識してしまう。

今のところ背丈はおなじくらいだ。だが弥介の細身ながらも力強い肉付きが、成長したがっていると告げている。おなじ目の高さでいられるのももうしばらくの間だろう。年長者に見下ろされてもなんとも思わないが、弥介に見下ろされることを想像すると無性に腹が立つ。

その一方で、勘定方に立派な体格は必要ない——そう考える自分もいる。

侍組の弥介とはちがい、勘定方に必要なのは、山と積まれた書類を正確に処理する能力だ。冷静に、そして確実にといつも心掛けている。

薪はこれだけあれば半月はいけるかな、といつもの癖で目算しながら宗二が薪小屋からもどると、次の丸太は割られていなかった。

弥介はひと休みとばかりに斧を切り株に突きさし、器用に柄の上で頬杖をついている。

「あのさー、さっきの話だけど本当か？」

何度聞きかえす気だこいつと思いつつ、宗二は幾度めかのおなじ言葉を返した。

「この目で見た。まちがいない」

「いくらなんでも、供連れなしっていうのはありえないだろ」

「いや、二人きりだった」
「じゃあそいつが供だったってことか？　けれど供と馬に相乗りってのはさすがに――」
「――弥介、なに手を休めてるんだ」
割って入った青年の声に、弥介はあわてて身を起こして膝をついた。宗二もそれに倣う。
それまでまじめに薪割りをしていたのに、ちょっと休んでいたところを上役に見られるなんて、ついていない奴だと思う。
上役といっても、青年の年は自分たちとふたつしかちがわない。それでも言葉の重みがちがうのは、家老名代の肩書きのためだけではない。
――あと二年たてば。自分もあのような大人になれるだろうか。
「たかが薪割りと思うかもしれんが、これも鍛錬のうちだ。怠らずしっかりやれ」
それだけ告げて踵を返しかけた青年に、「いえね、源十郎殿」と弥介が声をかけた。
「宗二が昨日、姫がえっらい美人と一緒に外出しているのを見たって言うものですから」
「美人？」と青年は問い返す。だが気にしているのは美人の容姿ではなく、姫の同伴者がだれかということのようだ。
「しの殿じゃないのか？」
「しの殿はそれはお綺麗ですけれど、女人ではなく、若い男だったとか言うんですよ。仲よさそうに相乗りで一緒に出かけていたとかで――」

それまで滔々と語っていた弥介だが、青年のしずかな怒りを感じとったのか、「や、すぐに帰ってこられたらしいんですけどね？」と言い訳に転じた。

青年が姫に複雑な想いを抱えていることは、付き従ってきた者すべてが知っていることだ。そんな彼の前で弥介は先日、姫の別居を勘ぐってしまい、あやうく切腹を申しつけられるところだった。

先日につづいて二度めの失言。好奇心旺盛なところや物怖じしないところは弥介の長所だが、迂闊すぎるにもほどがある。それみたことかと、宗二は冷ややかな視線を送りつけた。

青年が一歩踏みだし、弥介は胸倉をつかまれるとでも思ったのか、「ひっ」と身を引く。

「――ひきつづき、なにか耳にしたことがあれば報告しろ」

だが青年は低く言い置いただけで、その場をあとにした。

上役をやりすごした弥介は、命拾いしたとばかりに息を吐き、そのまま庭土に尻をつく。

「なにかって言われてもさあ……」

「報告しないのか」

「言えるわけないだろ。いまが――だなんて」

弥介は後ろ手をついて、空を見上げた。ついで宗二も見上げると、たしかに五月の空というには霞が濃い。しかしそのようなものは土地柄による。昼間といえども涼しく感じるのも、山国ならではと思っていた。

だが昨日、宗二が馬で外出する姫を見かけて、訝しんで跡をつけてみると、城下も宿場もどうもあわただしい。行商人に話を聞くと、将軍宣下のご上洛のため——いまは三月だという。

邸にもどって弥介に話してみると、正気を疑いながらも信じてくれた。家人の中で知っているのはまだ自分と弥介だけだ。

「……なぁ、やっぱり今回もあの姫のせいなのか？」

——この道行きはただの旅ではない。なにがあっても動じることのないように。

江州に出立する前に告げられた言葉だ。徳川の本拠地である江戸を出て、西へ——豊臣の勢力へと近づくのだから、もちろん危険は承知の上だった。

だが危険の中身を聞いて耳を疑った。地震雷火事山嵐、それに津波や噴火にいたるありとあらゆる天変地異、しかも物の怪や鬼までが仮想敵だった。

「姫さまのまわりでなにかが起きるのって、これで何度めだっけか。さすがに俺たちまで神隠しに巻きこまれると思わなかったけど」

羽柴の縁をもつがゆえに、生家でつまはじきにされていた姫。神がその境遇を憐れんだのか、はたまた恨みが祟りと化したのか、彼女のまわりでは不思議なことが起きることが多い。ふたりがすんなり時渡りを受け入れたのも、これらの前例があったからだ。

「どうでもいい。俺はただ務めを果たすだけだ」

へたりこんだ弥介に代わり、宗二が立ち上がって斧に手を伸ばす。

「果たすだけって――元の時間にもどれなかったら柚にも会えなくなるんだぞ!?」
「人の許嫁を引き合いに出すな。単におまえが里に会いたいだけだろう」
妹ならわきまえていると宗二は淡々と告げる。仲を勘ぐられたと思ったのか、かっとなった弥介は「てめぇ！」とつかみかかってきた――が。
「ねぇ、どうしたの？」
不意に割って入った声に、弥介は飛びのいた。
「ひ、姫さま!?」
「なによ、幽霊でも見たみたいな顔をして」
話題の当人が湧いて出たのだ。驚かないはずがない。呼ばれて出てきたような頃合いに宗二も内心驚いていたが、表情を変えることなくいつもどおりに問うた。
「姫、なぜこちらに？」
「ん、ちょっと探しものにね。江戸からの荷物はほとんどこちらでしょう？」
「なにをお探しですか」
「えっと、水、なんだけど――ほら、先日醒井に泊まったときに水神さまがいたでしょう。そこでみんな、ご利益あるかもって霊水を水筒に汲んでたじゃない？　それが残っていないかしらと思って」
「霊水ですか……たしかに汲みましたが、もう半月も前の話ですから。一応調べてはみますが、

あまり期待はできないかと」

「んー、それはそうよね。ありがとう。わかったらまた教えて」

そう告げると、姫は勝手知ったる様子で邸内へと入ってゆく。

その後ろ姿を呆然と見送りながら、「霊水なんて探してどうする気だよ……まさかあやしげな呪術でも……？」とつぶやく弥介に、宗二は「馬鹿か」と冷ややかに返した。

（うーん、荷はどこかしら……）

あこは采女の邸にあがりこんだものの、そのまま廊下で途方にくれた。

江戸から半月あまりの旅だ。婚礼道具はあとから運ぶ予定だったので、最低限の身のまわりの物しか持ってきていない。各自が己の所持品を部屋に置けば、もうほかに荷はない気もする。

（宗二の言うとおり水がなかったなら……右近殿の口ぶりからしたら水そのものでなくてもいいみたいだったけれど、やっぱり水っぽいものがいいわよねぇ……お酒とか？）

「なんで、おまえ……」

その声にふり返ると、小袖姿の小一郎が呆然とたたずんでいた。

「またおまえひとりか？　ひとり歩きは気をつけろってあれほど――」

そう言いかけて、気づいたことがあったらしい。歩み寄ってきて、あこを見下ろした。

「――また泣いたのか」

「えっ、どうして!?」

泣いたといってもそんな何時もぐずぐずしていたわけではないし、跡がわからないように化粧も直してきた。見た目ではそう簡単にわからないはずだ。

しかし小一郎は「やっぱり泣いたのか」と溜め息をつき、その態度であこは理解した。

「……まただましたのね」

ひっかかった自分も自分だが、頭ひとつぶん高い小一郎の顔を恨めしげに見あげる。

「だましていない。訊いただけだ」

「そんな確信的に訊いてきたら知っているものだと思うじゃない！」

「予想がついただけだ。――ったく」

最後の一言はだれにむけた怒りか、小一郎はいらだたしげに前髪を掻きあげた。

「で、今日は采女殿の邸になんの用なんだ。采女殿は愛宕だぞ」

「うん、それはわかってる。えっと、お水をね、探しに」

小一郎は先日、代わりに滝の水を汲んでくれた経緯がある。その一言で事情を察したらしい。

「あの滝の水では駄目だったのか」

「ええ……それで昨日は醒井まで汲みに行ったんだけどそれもダメで。じゃあ江戸から――その道中でもいいんだけど、五月から持ってきた水があればなんとかなるかもって言うから」

その説明で得心がいったらしい。「ああ、それでか」と小一郎はひとり納得している。

「けれど水はなぁ。もう飲んでるだろうし、古いものは捨ててるだろうし」
「お酒とかそういう水物でいいと思うんだけど」
「こっちにきてもう半月だぞ？　手持ち無沙汰のあいつらが酒を残してると思うか？　邸の手伝いをさせてなんとか目を逸らさせているが、そろそろ京から返事がないのも怪しまれている」
小一郎たち一行は、あこを江州に送りとどけたのちは上洛して、京にいる鳥居家当主の一行と合流するはずだった。初めての上洛という者も多く、京見物を楽しみにしていることだろう。
「うん……けれど明日は」
「さすがに御成だからな。井伊家もこちらに人手を割く余裕はないだろうな」
「みんなに伏せておける？」
「御成は愛宕屋敷だろう。ここは山の裏手だから邸から出なければ気づくことはないはずだ。こちらは俺が押さえておく。水も探しておくから、おまえもおとなしくしてるんだぞ？」
そう言って、小一郎はあこの頭をなでる。
小一郎のことだ。きっちり探してくれるだろう。そうして見つかれば――
（見つかれば……？）
あこは、うん、とうなずいて視線を落とす。しかし心にのしかかるものが重く、そのまま顔を上げることができなかった。

第三章　慶長十年三月十四日　愛宕屋敷御成

霞立つ空の下、前をゆく馬の脚がとまった。
それを見てとるや、主のすぐ後ろについていた直孝は、馬の腹を蹴って横にならんだ。
「殿、いかがなされました」
馬上の秀忠は茫として、視点は一点を――遠いなにかを見つめていた。しかしその呼びかけに「……ああ、直孝か」と我に返る。
「やはり輿になさいますか」
「いや。こうして馬上で風に当たっているのが心地いいんだ」
――ずっと輿だったのがよくなかったのかもしれないね。
そう言って秀忠が騎馬を選んだのは今朝のことだ。山間の道は刺客がひそむおそれがあるので輿に乗ってもらったが、ここしばらくは平原が広がっている。
周囲は稜線ゆるやかな丘で、その先の山まではかなりの距離がある。鉄砲の射程内には隠れる場所もない。秀忠の周囲は小姓がかためているし、当然斥候も放ってある。
「しかし……」
「大丈夫だよ。――この地をね、一度ゆっくりと見ておきたかったんだ」
関ヶ原。五年前、天下の趨勢を決する一戦が行われた地だ。そして――

「直孝の父君が負傷された場所だ」
直孝は目を伏せて、覚悟していた言葉を聞いた。
直孝の父直政は、この地で銃弾を浴び、その傷が癒えきらずに亡くなった。
市井にあった直孝は、その報せを遠く上州で聞かされるばかりで、死に目に会うどころか葬儀に参列することもかなわなかった。
「私が間にあっていれば、兵力はくつがえっていたはずだ」
「なれど、兵力互角であればこそ一日で雌雄を決したとも聞きおよんでおります。御家の今日の繁栄があるのも、いたずらに戦を長引かせることのなかったゆえかと」
陣を展開した時点で不利とみれば、はやめに退いて籠城戦に持ち込まれていたかもしれない。
徳川方が秀忠の隊を欠いていたように、西軍にも別動隊がいた。両者拮抗、もしくは西軍有利ではじまった戦だからこそ、敵も退き際を読みあやまり、結果として戦は一日で終結した。
父が銃弾に斃れたのはしかたのないことだ。そう、戦――だったのだから。
直孝は目を伏せたまま、秀忠の言葉を待つ。やがて「そうかもしれない。だが……」というつぶやきが聞こえ、次いで秀忠の身が傾いだ。
「殿!?」
とっさに直孝は手をのばす。
「すまない。大丈夫だ」

秀忠は直孝の手をわずかに借りただけで身を起こした。だがあきらかに顔色がよくない。普段の秀忠は、なにか事があっても、困ったね、と穏やかな表情のまま眉をひそめるばかりだ。それは周囲を信じ、口を挟まず、重臣や側近が動きやすいようにしているからだ。

その気遣いの人が人前で不調を見せるとは、よほどのことだろう。

「長旅のお疲れが出ているのでしょう。夜もあまり眠っておられないのでは」

「いや、昨夜はよく眠れたよ。きっとあの御守りが効いたんだろう」

秀忠はやや青白い面のまま、しかし柔和な笑みを浮かべる。

秀忠の性を柔弱と評する者もいる。しかし秀忠は天下人の後継者として常に人に見られる立場にあり、その柔和な顔は、悪意ある者、狡猾な者、彼らの目をやりすごすための面だ。柔弱と侮られようとも、けして敵は作らない――それが、戦国の世を生き抜き、我こそはと息巻く大名たちの上に立つための資質だ。

上に立つ者が下々とおなじように覇気で争っていてはならない。武で治めようとすれば、武力を増した者にいつか敗れる。それでは天下は治まらない。

秀忠は能役者のように面を持ち、百戦錬磨の武将たちにその面が偽りと悟られぬよう、自分の性をも染めていったのだ。

「今晩は佐和山だしね。直孝も実家でゆっくりくつろぐがいい。先日は右近と会ったのだろう？　ひさびさに兄弟で会ってどうだった」

「兄は最近体調が良いとのこと、私も安堵いたしました」
「そうか。御守りを渡すくらいだ。右近も弟のことを案じていたのだろう。この御守りはやはり直孝が持っているべきなんじゃないかな」
（――きた）
直孝は喉がこわばるのを感じながら、あらかじめ用意しておいた言葉を口にする。
「殿は兄の義兄君にございます。その御守りも殿がお持ちとあれば兄も喜びましょう」
すると秀忠はさらに相好をくずし、「そうか。やはり家族はいいものだろう」と、先日の清洲滞在中のことを話しはじめた。実弟忠吉との再会はよほどうれしいものだったらしく、秀忠の面に赤みがもどる。
――これで良かったのだ。
そう確信をいだき、直孝は主君の話に相槌をうつ。
秀忠が馬の歩をすすめると、また隊列はゆるゆると動きはじめた。
――その数騎ばかり後ろで、成次はふたりのやりとりを無言で見つめていた。

愛宕屋敷内は、廊下をわたる足音までぱたぱたと気忙しい。次代将軍を迎える栄誉と緊張がないまぜになって、侍女たちも地に足がつかない、まさにそんな感じだ。

一行は、前日は赤坂に宿泊と聞いている。赤坂は一昨日足をのばした醒井のすこし先、さほどの距離でもない。はやければ午時、おそくとも日が傾くまでに到着するだろう。

（将軍家のお迎えとなれば、右近殿も当然正装よね？）

侍烏帽子に直垂だろうか、冠直衣だろうか。どちらにしても身につけるには若すぎる気もするが、年若くとも譜代筆頭井伊家の当主だ。

二代将軍となる秀忠はどのような人物なのだろう。年は二十七と聞いているが――

今日はしのもかやも手伝いに奔走している。陽光に照らされた庭をながめつつ、あこは部屋でひとり、慣れない香合わせなどしていた。だが昼餉のあと、表からざわめきが聞こえてくると、いそいそと小袖を着替え、中庭に下りた。

屋敷中が磨きあげられているのとおなじように、中庭の木々も無駄な枝葉はすべて切りおとされている。それでも緑の多い庭、茂みをわたっていけば表に抜けられなくはない。

（ちょっとくらい見えないかしら……？）

ときおり通りすぎる侍女を茂みに隠れてやりすごしながら、あこは大勢の人の気配のする表門のほうへと足を進める。

しかし奥を過ぎて、ここから表という中廊下から、声をかけられた。

「――なにをしてるんだ」
「小一郎!?」
思わぬ人物にあこは目を丸くした。小一郎ならば采女の邸にいるはずだ。
「どうしてここに？　っていうかどうしたの、その恰好」
小一郎は、長袴でこそないがそのまま接待に出られそうな素襖姿だった。春らしい柳色だ。
「ちょっと采女殿に頼まれてな。……おまえこそなんだよ、その恰好」
あこの装いは桜の小花模様の小袖、侍女たちとおなじ淡い桜色の染めだ。一見、侍女と見まちがえそうな色を選んだのもわざとだ。これなら見ず知らずの客人とすれちがっても一侍女としてやりすごせる。
「えっと……花を隠すなら花の中ってね？」
苦しまぎれの言い訳をすると、「花なんて咲いてないだろうが」と冷静につっこまれた。たしかにこのあたりには桜も咲いていないし、おそらく自分も花扱いされていない。
「まさかおまえ、また――」
「いえ、べつにお屋敷を抜けだそうっていうんじゃないのよ？　ただ、表の様子はどんな感じかしらって気になって……」
見つかれば自分ひとりの問題で済まないとわかっているし、秀忠到着のその瞬間を見られるとも思っていない。しかし、たとえばどこかで祭りが開かれていると、参加するつもりはなく

とも様子を覗きたくなるのが人情というものだ。
「すぐにもどってくるから」
そう言いつつも本心では、ダメかしらねと思っていたあこだが、小一郎はわずかに思案ののち、意外な言葉をかえした。
「――俺も行く」
「えっ!?　……どういう風の吹き回し？」
「口で言うより行ったほうが早いだろ」
小一郎は手近の沓脱石にあった草履に足をとおすと、ほら行けよ、とうながした。
（え、どうしちゃったの小一郎？）
小一郎の態度がいつもとちがう。おさまりの悪さを感じながら庭伝いに表にむかうと、すぐに小一郎の言葉の意味を理解した。
表門のあたりでは、百名を超す男たちが立ち話をしていた。秀忠一行の先発隊と思しき相手と打ち合わせをしていたり、ひさびさに顔を合わせた相手と挨拶を交わしていたりと、なごやかながら騒然とした感じだ。なかには正装の木俣守勝の姿も見てとれたが、直継の姿はない。
（やっぱり右近殿は屋敷の中かしらね……）
「こんなに人がいたら、垣間見ることもむずかしそうね」
表門からあこの位置まで相当な距離がある。男たちがみな平伏しても、茂みの中からでは秀

忠の姿は見えないだろう。

「先日までは、もうちょっとちかくまで庭木があったはずなんだけど……」

「見えるってことは狙えるってことだからな。采女殿にそんな抜かりはないだろう」

昨日のうちに取り掃われてしまったらしい。だから小一郎はすんなりと許したのだ。

ぜんぶお見通しってわけね、とあこはむくれ、用は終わりとばかりに屋敷の陰に一歩引いた。

「あーあ、残念。こんな機会、一生のうちにもう一度あるかどうかわからないのに」

「そんなに見たいものか？」

「そりゃ小一郎はお目見えしているもの。めずらしいことでもないんでしょうけれど、わたしには一生一度の機会だもの」

小一郎は鳥居家筆頭家老の嫡子として、元服の際に家康にも秀忠にも引見されている。正式に家老職を継げば、今後いくらでも拝謁する機会もあるだろう。だが登城できないあこは、いまを逃せばおそらく二度と秀忠を目にすることはない。

「垣間見たところで、お目見えにならないのもわかっているけれど……」

武士にとって、将軍にお目見えできるかどうかというのは大きな問題だ。それが武士の格の差ともなっているし、大名ともなればお目見えしていなければ家を継ぐことも許されない。直継とて元服時にお目見えしているだろうし、家康の外孫という出自を考えれば元服前に済ませているかもしれない。

男たちは、元服すれば外の世界が開けてゆく。なのに自分の世界は狭くなっていく一方だ。

（そして、わたしがいるべき場所は……）

――あの狭い場所。人の悪意が渦巻くところ。

全身が萎縮する感覚。視界が狭くなり、息が細くなってゆく。

「……おい？」

身体が重くなり、知らず、小一郎の襟元をつかんでいた。

「ご、ごめんなさい」

あわてて手を放すが、その指先は冷えきっていた。

自分に向けられた悪意は、徳川家への忠誠ゆえだとわかっている。けれども忠義の名を盾に取り、高みに立ちたかっただけだともわかっている。身分が低い者、仕事が遅い者、悪口に迎合しない者――理由などなんでもいい。自分たちの気に食わない者を選んで、鬱屈した感情の捌け口にしていただけだ。

悪しき感情はめぐりつづける。自分がいなくなったいま、だれにその矛先が向いているのだろう。それを思うと息が苦しくなる。

けれどもいまの自分は、その恐怖を解く方法を知っている。

もらった大切な言葉を思いだし、大丈夫、大丈夫とくり返す。すると呼吸が楽になり、視界が開けていった。

目を上げると、小一郎が心配そうに見つめていた。その瞳の深い色に、考えていることすべてを吸い込まれそうだ。

小一郎は、自分の不調の原因をわかっている。鳥居家の内情などもう知り尽くされているし、いまさら隠すことでもない。だが同情されるのは嫌だ。

あこは気まずさを感じて顔をそむける——と、視界に薄灰色の影が映った。

(え、あれって……)

ふり返ると、それは人ごみをぬけてゆっくりと近づいてくる。人ではない——山犬だ。

(えええええ!?)

あこはそれに気づくや、あわてて小一郎の手を取って元来た方向へと走り出した。

小一郎は事情がわからないながらも、共に駆け、あこを追い抜いて手をひっぱる。

「部屋でいいのか!?」

あこは言葉にならない声で肯定して、履き物を脱ぎすてて自室へと逃げこんだ。そしてぴしっと音を立てて障子を閉ざす。

「おい、どうしたってんだよ一体」

「あの子がいたの!」

「……あの子って?」

「陸よ、陸!!」

陸？　と聞きかえし、ややあってから「あぁ」と小一郎はうなずいた。
「土佐様がご同行されているなら、一緒にいるだろう。よほど立派な護衛だ」
「なんでおじさまがここに!?」
「殿も土佐様も、若様のご上洛に付いてご一緒に江戸を発たれただろうが」
土佐様――鳥居土佐守成次はあこの叔父、陸というのは成次の飼っている山犬の名だ。
成次は山犬の他にもあれこれ飼っている。父元忠が際限なく拾ってきたものを、父亡きあとに引き取ったのだ。かつて伏見屋敷が山同然に手入れされずにいたのも、これらの拾いものが放し飼いにされていたためだ。
「おじさまがいらっしゃるなら、まさか父上も!?」
「いや、殿は別の隊のはずだ。どこかの宿場町にお泊まりだろう。だが……」
小一郎は指一本分ほど障子をあけて、庭をみやる。外に陸の姿はない。
「……小一郎？」
小一郎はなにやら思案している様子だったが、問いかけると、なんでもないと首を振った。
「陸がいるなら表に近づかないほうがいいな」
もう大丈夫だろ、と小一郎は障子を開ける。
表は先ほどとはうって変わって静まりかえり、張り詰めた空気が漂っていた。秀忠一行が到着したのかもしれない。

「……あの、小一郎は用事があって愛宕にきたんでしょう？　行かなくていいの？」
表の世界は動きはじめている。しかし小一郎はあこのなな前に腰を下ろした。
「用はここで足る」
「え？　えっと、もしかして……わたしの見張り番……とか？」
陸のほうがよかったか？　と横目を向けられ、あこは確信した。
さすがに今日ばかりは手落ちは許されない。危険要素はなるべく排除したいのはわかる。だが侍女たちに融通をつけるのではなく小一郎に頼むとは、采女にしては容赦のない人選だ。
（主馬殿が入れ知恵でもしたのかしら？）
あの人ならはっきりと言いかねないし……と勘ぐっていると、小一郎が言を継いだ。
「井伊家はもてなす立場だからな。おまえに対してどんな無礼をはたらかれても、家の者では強く出られない」
（え、わたしのため……？）
一瞬疑ってしまったことを心の中で主馬に謝ろうとしたが、「ま、主馬殿にも言われたんだけどな」とつけくわえられて、即刻やめた。
（主～馬～ど～のぉぉ～～!!）
――あの子、なにやらかすかわからないからさぁ。ちゃんと見ててくれる？
そんな幻聴まで聞こえてきそうだ。怒りがふつふつと沸いてくる。

（あああもうっ！　わたしが気に食わないのはわかっているけど！）

気に食わないといえばたまもそうだが、たまは正面きっていびってくる分、まだ言い返しようがある。しかし主馬の場合、自分の手は汚さずに人を使ってくるから性質が悪い。

（あの飄々とした態度、一度でいいからくずしてやれないものかしらね!?）

怒りに駆られて謀略をめぐらせていると、小一郎がぽつりと言葉を継いだ。

「……なんか、元気そうだな」

「え？」

「おまえさ、江戸では部屋にひとりでいるのは嫌いだったろう。またひとりが嫌で、部屋を抜けだそうとしていたのかと思ったけど、なんか、元気そうだからさ」

江戸では侍女の気配、そして彼女たちの悪意のある噂話を息をつめてやりすごし、隙を見つけては外に出ていた。しかし言われて気づいた。

この部屋は、江戸屋敷の自室と広さは変わらないのに、息がしやすい。

（けれど、どうしてそんなことを言うの？）

小一郎の表情はおだやかで、しかし『よかったな』といつも言ってくれていたようなさっぱりした顔ではない。もう十年以上一緒にいるはずなのに、こんな表情は知らない。

（どうしたの？　小一郎……）

「ここは居心地がいいか？」

「え？」

「――ここが、いいか？」

「それってどういう……」

しかし、その言葉のつづきは、廊下を蹴る音にさえぎられた。

踵を叩きつけるような足音は男のものだ。かといって、直継でも采女の足音でもない。

（どうして奥に殿方が……？）

あこは立ち上がり、部屋から顔をのぞかせる。

小一郎はあこを制しようとしたが、あこの目がその姿を捉えるほうが早かった。

「弁之介殿……？」

それは肩衣姿の直孝だった。あいかわらず上から下まで黒ずくめだ。あこの部屋からはとおいため、むこうが気づいた様子はない。

ただ前だけを見据え、お付きの侍女をふりきるかのような早足でむかっていく先は――

あこは思わず部屋から駆けだしていた。だが呼びとめる前に、直孝は障子の前で膝をついて一礼して、部屋の中へと入ってしまった。

（あの人、東梅院さまにいったいなんの用？）

幸い、室内から悲鳴があがることはなかった。それどころか、まるで誰もいないかのような静まりようだ。

直孝はほどなく仏堂から出てきた。時間からして、ほんの二言三言交わしただけだろう。ふたたび仏堂の前で一礼して、こちらに歩み寄ってくる。

あこは廊下の真ん中に、つ、と一歩足を進め、直孝の歩みを遮った。

廊下の幅は、人がすれ違える程度のものだ。真ん中に人がいれば、足を止めざるをえない。うす暗い仏堂から出てきたばかりで、目が慣れていなかったのだろう。直孝は、なんだこの女はと目を眇めたが、やがてあこの顔を認識するや目を見ひらいた。

「おひさしぶりね、弁之介殿。本日は東梅院さまにどのようなご用向きで？」

「……養母に、挨拶しにきただけだが」

直継と直孝の生母は別の女性だ。しかし一族に迎えられた以上は正室が母、屋敷に寄ったからは挨拶に伺うのが当然だ。

「それと名は、此度の上洛で掃部介にあらためる」

「じゃあ掃部殿。ご当主への挨拶はいかがなされたの？」

今日はすでに挨拶を済ませたかもしれない。しかし、いつのことを問うているのかは、あきらかに伝わっていた。

直孝の目が鋭さを増す。醒井でにらみつけられたときの比ではない。このまま抜いて斬り捨ててやろうか、そんな意図すら感じた。黒の衣がさらに威圧感を増している。

養育係を無礼討ちにした、家の跡目を狙っている——そんな噂が脳裏をよぎる。だがそうい

った先入観が目を曇らせるのだ。あこは目をそらさず、まっすぐに直孝を見上げた。
背丈は直継より高い。主馬と采女ではないが、初めて見れば兄弟を見まちがえるところだ。髪は直継とおなじで結いあげているが、髪質がちがうのか、切りそろえた後ろ髪が風にさらさらと揺れている。瞳は黒。混じりもののない色が、ただまっすぐにあこを射抜く。
じっと見つめて威圧感があるのは直継とおなじだが、直孝のほうが警戒心が強い。ただ見るだけの直継とはちがって、敵とみなせば刀を抜く意思を感じる。
「あなたが知る必要はないことだ。退かれよ」
知る必要はない――いつぞや聞いた言葉だ。
山を下りろと一方的に告げた直継に、理由を問うたときの返答。愛宕屋敷にきた最初の日のことだ。
声質はちがうのに、言っていることはおなじだ。ふたりの態度にはおなじもの――自分の事情に他人を関わらせない厚い壁を感じる。
(この兄弟はまったく……!)
「知る必要はないってねぇ、話をしてくれなきゃこっちも判断できないでしょ!?」
いままで積もり積もったものが重なって、あこは声を張り上げた。
「あなたとほかの人は頭の中身がちがうの。他言無用とか言い置かれても、こっちはなんのことだかわからないでしょうが。自分がなにか命じたら、命じられるままに人は動くとでも思っ



ているわけ？　ご一門だからって命じて終わりと思ったら大間違いよ。それにそうやって勝手に話を切りあげちゃうから、周りの人はあなたを誤解したままなのよ。面倒くさがらずに話をすればいいじゃない」

その言葉の八分以上は目の前の人物ではなく、その兄に向けたものだ。

直継は家族とすごした時間がすくなく、周囲には配下しかいなかったせいか、命じれば終わりだと思っていた。しかし傲慢なのではなく、直継はそれ以上の会話を知らなかったのだ。

直孝に関する噂も、侍女たちの口さがない憶測が大半だろう。しかし彼もまた、その誤解をとくことをしてこなかった。

話をしようにも聞く耳をもたない相手もいるし、人は自分の思いたいように思って勝手に判ずるものだ。けれどもそういうものだとあきらめて、話を聞こうとしている相手まで拒絶していては、ずっと誤解されたままだ。

直孝は言い返されると思っていなかったのか、呆然としてあこの言葉を聞いていたが、我をとりもどすと低く告げた。

「いかに兄上の侍女とはいえ、あなたに話すことではない。退かれよ」

（侍女って……あ～～～！）

あこは自分が小袖姿であることを思い出した。しかも侍女にまぎれられるように選んだ質素なものだ。

打掛を羽織ってくればよかった!?　とも思ったが、ここで身分を明かすわけにはいかない。
あこが反論しないながらも退く様子がないのを見てとると、直孝は口を真一文字に結んで歩みを進め、とおりぬけようとした。
（強行突破するつもり!?）
あこは両手を開いて止めようとした。しかしその手は強くふり払われ、身体がよろめいた。
（え……や、落ち……）
廊下の横は歩幅一足分の縁側、そこから先はもう庭だ。庭と縁側は、あこの腰丈くらいの高低差がある。
直孝の驚愕の表情。一拍遅れて、手を伸ばそうとするのが見えたが、間に合わない。
（受け身をとれば――）
骨折は避けられるかもしれない。だが相当の痛みを覚悟したとき、あこの身体を引きよせる手があった。
「小一、郎……?」
傾いたあこの身体は、引き寄せられるままに小一郎の胸の中に転がりこんだ。縁側に控えていた小一郎が、倒れこむあこを抱き寄せたのだ。
直孝はあこの無事を見てとると、ふたたび唇を引き結び、そのまま無言で立ち去ろうとした。
「――お待ちいただこう」

小一郎が呼びとめる。胸に当たった耳から衣越しに聞く声音は、いつにもまして低く響いた。

「……そなたは？」

「鳥居家筆頭家老、高須源兵衛が嫡子、高須源十郎」

直孝は表情をくずさない。だがその名に驚きをおぼえているのはたしかだ。かすかにまつ毛が振れたのを、あこは見のがさなかった。

「鳥居家の？　土佐守さまにご同行されていたのか」

「いえ。御家ご当主と当家の姫の縁談はご存じか」

小一郎は直孝の問いには最低限しか答えず、そんなことも知らないのかと喧嘩を売った形だ。

（こんな感じで右近殿に喧嘩をふっかけたわけ!?）

江戸からの道中、家人たちの争いの仲裁ばかりしていた小一郎が、みずから喧嘩を売るなんて思いもしなかった。

「……知らぬではないが」

売られた喧嘩を直孝が買い、両者の間に緊迫した空気が流れる。

なんらかのきっかけ――たとえば鳥が飛び立つ音でもすれば、おたがい刀を抜きかねない雰囲気だ。期せずしてふたりの間にいるあこは、自分がその契機にならないよう、息を詰めて成り行きを見守っていた。

が、小一郎はその渦中のど真ん中にあこを投げこんだ。

「この御方がその姫だ」

（えええええ――――っ!?）

なんで言っちゃうわけ小一郎!?　とあこはあわてたが、直孝の驚愕はその比ではない。

直孝は目を見開いて現状を把握しようと努めていたが、納得するより先に片膝をついた。

「――鳥居家の姫とは知らず、ご無礼を」

あこ自身を姫として認めたというより、小一郎の気迫と、万が一それが本当であった場合の家の体面を優先させたのだろう。

いまさら、嘘です違います人違いですと主張するわけにもいかず、引っこみのつかないままあこは小一郎の手を借りて立ちあがる。

裾を引く打掛がないのでさまにならないが、姿勢を正して口をひらいた。

「今回の責めは問わないわ。けれど、先日の件は時間をみて説明してもらえるかしら」

秀忠付きの直孝に時間があるとも思えない。そのため、暇ができたらとの条件つきだ。

直孝は逡巡していたのか、顔を伏せたまま間があったが、やがて「――は」と答えた。

「では私はこれにて」

直孝は表情を硬くしたまま、あこの前を辞する。内心は怒り心頭だろうに、感情を表情に出さないのは兄弟そっくりだ。

あこは直孝の背中が見えなくなると「はあ……」と声に出してため息をつき、立ち上がった

小一郎に向きなおった。

「助けてくれてありがとう小一郎。でもなんであの場で素性を言っちゃったわけ？」

相手が当主の弟とはいえこちらも大名家の家老名代、出すのは小一郎の名だけで十分だったはずだ。しかし小一郎は、筆頭家老である父の名を使った。

三月のいまの時点では、小一郎はまだ家老名代ではない。それを考えたうえでの配慮だとはわかるが、だとすれば鳥居家の姫の身分も明かさないほうがよかったはずだ。

「あのまま無礼を見過ごせというのか」

「だって、あの方が侍女だと思いこんでたのはわたしが訂正しなかったせいもあるし」

「なぜその場で訂正しなかった」

「え、だって……」

一度めに会ったのは采女の邸に文を届けた帰り道、二度めは直継と醒井の茶屋にいるときだ。どちらも姫と名乗るにふさわしい場所だったとはいえない。

（って、いつ会ってもダメっぽいけれど……）

今までの自分の行動をかえりみると、たまたま会った時機が悪かったとは言えない気がする。

「理由はさておき、わたしたちが屋敷にいることは内緒なんだから、言わないに越したことないでしょ。この世界じゃ、わたしは姫じゃないわけだし」

「……そういうつもりで暮らしていたのか」

不意に小一郎の声が深くなる。
（え、なにかわたし怒らせるようなこと言った？）
「そ、そういうわけじゃないけど、実際そうでしょう？　鳥居家の姫はちゃんと江戸に……」
すると小一郎は、あこの前で片膝をついた。
「こ、小一郎!?」
急に改まられてあわてふためくあこを、小一郎はまっすぐに見上げる。
「おまえは鳥居家の姫だ」
その声音には揺るがぬものがあった。つられるように、揺れていたあこの心が固まる。
「おまえは鳥居家の姫で、俺が仕えるべき相手だ。ここがいつであっても、どこであっても」
小一郎は告げる。言い聞かせるようにゆっくりと。
「それだけは忘れないでくれ。絶対に」
その一言に委ねられたもの――それがなんであるのか、はっきりとはわからない。
しかしその重さに、あこは呆然と小一郎を見つめることしかできなかった。

山の日暮れは早い。

白塀より高い木立に囲まれ、そこに陽がかかればもう光は届かなくなる。陽が陰りはじめれば、ほどなく灯りなしでは視界がきかなくなることを、宗二は知っている。

——ああ、はやく荷の整理を終えないと。

陽の落ちた中では、小物を見落とすかもしれない。ひろげた荷を葛籠に詰めなおそうとしたが、それを手に取ったところで宗二の動きは止まった。

小指ほどの大きさの紙包み——薬売りの行商人がくれたものだ。

先日、庭掃除の最中に馬上のあこの姿を見かけ、まさかと思って付けていくと、着いた先は醒井だった。

姫と男は水を汲んだ後に茶屋に寄り、宗二は遠くからふたりの様子を探っていた。

やがてふたりは茶屋を発ち、宗二もそのあとを追おうとしたものの、運悪く大名行列と出くわした。しかたなく往来からすこし離れたところから行列を眺めていると、おなじように道をさえぎられたらしい行商人が声をかけてきた。

——お侍さんもこのご一行の方ですか。いやぁ、見事なご権勢ですねぇ。

——え？　ちがう？　どなたのご一行と言われましても……秀忠公ご上洛のご一行ですよ。

——なんのため？　将軍職を継がれるとか聞いていますが。

——四月にもう継がれた？　なに言ってるんですか。いまはまだ三月ですよ。

そのときの自分はどれほど血の気をなくしていたのだろう。

――どうしました？　お顔の色がすぐれないみたいですが……。

呆然とたたずむ宗二の手を取ると、行商人は紙包みをにぎらせていた。

――気付け薬です。なに、御代はいりません。薬売りと会ったのもなにかの縁でしょうから。

そのときはじめて宗二は真正面から男を見やった。

さすが行商人らしく、人の好い笑みを浮かべていた。髪は手巾でまとめて覆い、瞳の色はごく薄い茶色――垂れた稲穂のような色だったように思う。今が三月だと知った驚きのためか、そこからの記憶が曖昧だ。

――また御縁がありましたら、そのときはご贔屓に。

そう言って、行商人は行列の去ったあとの往来を流れていった。宗二はそのあと数人を捕まえて事情を聞いたが、みな口をそろえて行商人とおなじこと――つまり、今は三月だと語った。さすがに見ず知らずの者からのもらいものを口にすることはない。しかし、あのとき握られた手の温かさ。その好意を思うと無下にもできず、捨てられないまま持ち帰ってしまった。

右手がうずき、紙包みを顔へ寄せる。ほのかに桂皮の香りがした。桂皮は舶来の薬で、鎮静の効果がある。馴染みはないはずなのに、なぜか懐かしい香りだと思った。

「――宗？　一緒に飲まないのか？」

不意に声をかけられ、我に返る。手燭を片手に、部屋に顔を見せたのは弥介だった。

みなは広間で酒宴に興じている。六人用の寝所としてあてがわれた部屋にいたのは、宗二ひ

とりだけだった。

「どうしたよ。薬なんて出して。どこか体調でも悪いのか？」

なにかと目ざとい弥介は薬を目にとめ、顔をのぞきこんできた。宗二は鬱陶しいとばかりに顔を背け、紙包みを懐にしまう。

弥介がやたら自分にかまうのは、この一行での最年少同士ということもある。だが、本音は将を射んとすればといったところだろう。

弥介はどうやら宗二の妹を好いているらしい。この年になればどこにでも転がっている話だ。両家の仲は悪くないし、家格もつり合いが取れている。父の耳に入れば、今日明日にでもまとまりそうな話だった。婚姻を結ぶには主家から許しをもらう必要があるが、よほど家格に差がないかぎり許しが下りなかったためしもない。

縁談は親の定めるもの――宗二はその習いに漏れず、親の決めた相手と婚約したが、好いた相手がいれば親に話をつけてもらって、好きあった者同士で婚礼をあげることも少なくない。

――しかし、上に立つ者はそうは言っていられない。

「……源十郎殿は、ご存じなのだろうな」

「へ？　なにを？」

答えない宗二に、弥介も察したらしい。話が長くなると思ったか、敷布に腰をおろした。

この旅の責任者である高須源十郎はいま、愛宕屋敷に赴いている。行商人のいうことが本当

ならば今日は三月十四日、ここ数日の間に井伊家に秀忠公の御成があるはずだ。何度か愛宕屋敷に足を運んでいる彼が、時に迷いこんだことに気づいていないはずがない。

しかし自分たちにはいまだなんらの説明もなく、ただこの邸で待機を命じているだけだ。

「あの人はなまじ器用な分、たいてい自分で段取りして片づけるからなぁ。今回も内々に収めるつもりなんだろ。あの人のことだ。なんとかしてくれるさ」

そう言って、弥介は後ろ手をついて足をのばした。

この旅の一行は、姫の性質をある程度理解できる——つまり、幽霊やあやかしの類に適応できる者だ。結果として、考えのこりかたまった年長者ではなく、若い者ばかりとなった。

宗二もいまの状況に恐怖がないわけではない。あるべき日常から切り離され、知らぬ世界に迷い込み、帰れる保証もない。しかし、なんとかなるだろうという気持ちが先に立つ。——ずっと姫の側にいたあの方なら大丈夫、なんとかしてくれるにちがいない、そう思う。

しかし。

「——帰らないとしたら？」

「……は？」

「源十郎殿は、元の世界に帰らないつもりかもしれないとしたら？」

「はあ!?」

弥介は身を起こし、足を組んで覗きこむようにして、宗二の額に手のひらをあてた。

「んー、熱はないな。悪いものでも食ったか？」
宗二はむっとして、言い返した。
「俺はいたって健康だ」
「だってさ、なにをどう考えたら源十郎殿が帰らないことになるんだ？　なんであの人が務めを投げだすんだよ。そりゃ、意中の姫が嫁ぐのはつらいだろうけど、それもわかった上でちゃんと務めを果たしてるだろ。まぁ仮に、あくまで仮にだ、三月に留まったってあの人の想いが報われるわけじゃないんだろうし――って、ほんとご家老さまも容赦ないよなぁ」
この名代役は源十郎の初の大役だ。他に適任者もいただろうに、想いを寄せる姫をみずから嫁ぎ先に送らせることで、家臣としての覚悟を問うているのだ。
太閤存命中は姫の婿にとも考えられていたと聞いている。それが天下がくつがえった瞬間に姫に別の縁談だ。上の者にとってはそれが務めとはいえ、振りまわされる当人には迷惑な話だ。
天下が変わり、惣領姫だった姫は井伊家に嫁ぐこととなり、源十郎の想いが報われることはなくなった。しかし。
「報われるとしたら？」
「は？」
「江戸にはおそらくもうお一人、鳥居家の姫がいる。当主の許嫁は江戸の姫だ。ならば、ここにいる姫は井伊家に嫁入りする必要はない」

ちょっと待て、と弥介は膝のうえに肘を立て、手のひらに額を乗せて考える。
「――仮にそうだとしてもさ、おまえ、一昨日に姫が許婚……？　と一緒に仲よさそうにしているところを見たって言ってなかったか？　姫があの男にご執心なら、どっちにしろ源十郎殿には手が届かないってことだろ。てか、あの人はそういうことで動く人じゃない」
「そうだな。俺もあの人が自分の損得で動くとは思わない。けれど姫があの男に想いを寄せて、ここに――三月にとどまることを望んだら、どうだ？」
「どうって……」
「帰るにしろ帰らないにしろ、姫は源十郎殿の手には入らない。だが源十郎殿には大切な姫だ。姫がここに残りたいと言うならば、姫の幸せのためにここに残るという選択もありえるんじゃないか？」
反論の言葉が見つからないのか、弥介は呆然と宗二を見つめる。
「――おまえだって、妹に想う相手がいたら身を引く覚悟くらいあるだろう」
その一言に、弥介の拳が飛んできた。宗二はとっさに顔を背けたが、かなりの衝撃があった。
「てめぇ！　人をバカにするのも大概に……っ!!」
そのまま弥介は胸倉に摑みかかってきて、宗二は夜着の上に押し倒される。
「弥介!?」
怒声を聞きつけたらしく、広間で飲んでいた者たちが飛び込んできた。

一行はみな弥介より年長だ。この年頃は一歳差でもあきらかに肉付きや骨格がちがう。年長者にふたり掛かりで押さえられては、弥介もどうしようもない。

騒ぎを知ってやってきたみなに囲まれ、宗二と弥介は廊下にふたりならんで正座させられた。

源十郎が不在のいま、次席にあたる青年がふたりの前に腰を下ろす。この一行の最年長、とはいえ二十歳を越えたばかりの、源十郎が元服以来なにかと面倒を見てもらっている相手だ。

「弥介。宗二。おまえらな、仲がいいにもほどがあるだろ」

いやそれはちがうだろと思ったが、口に出せる雰囲気ではない。

「宗、頬が腫れてるぞ。なにが原因だ。いつもの戯れ合いにしては度が過ぎているが」

宗二は、「いえ」と答えたきりなにも告げなかった。

弥介はいつものように言い訳するかとも思ったが、めずらしく口を重く閉ざしたままだ。

「まあ事情はあとで源十郎殿に聞いてもらう。戻ってこられるまでそこで頭を冷やしていろ」

話はそれだけだと言いおくと、みな広間にもどっていった。

酒の席に水をさしてしまったか、広間からは先ほどまでの騒がしさは聞こえてこない。

陽も落ちはじめて、暗い庭先を涼風が流れてゆく。すこし寒いなと宗二は思った。

その傍らで、弥介はこらえきれない怒りをにぎりしめて、膝の上で拳をふるわせていた。

第四章　慶長十年三月十四日夜　水合わせの儀

とっぷりと陽も暮れて、篝火が闇に覆われた庭を照らしだす。

直継の席からは、篝火がときおり大きく爆ぜているのが見てとれたが、その音は宴席の喧騒にさえぎられ、耳に届くことはなかった。

秀忠はいつもどおり穏やかな表情で舞や謡に興じていた。しかしすこし手をあげて背後の小姓を呼び、

「すぐにもどるよ」

側にひかえる直継にそう告げて、上座を立った。直継をはじめ、その場にいる者がみな手をつく中を、秀忠は小姓を引きつれて悠々と広間を出てゆく。

宴がはじまって、すでに一刻は経っている。手水にでもいったのだろう。いい機会とばかりに直継も席を立ち、涼を取りに廊下に出た。そして広間からすこし離れたところで立ち止まり、庭をながめやる。

宴席の熱にのまれて気づかなかったが、外は思いのほか冷えこんでいた。対面時の礼装から着替えて直垂半袴とはいえ、いつもの小袖より布地は厚い。昼の熱気は重い雲に吸いとられてしまったかのようだ。

今晩は雨。自然の力ではなく、たまの力を借りて降らせる雨だ。夜は死気が増すため、秀忠

が眠りについたのちに愛宕屋敷を雨の結界で閉ざす。

死気と生気が転じる暁を迎えればまずは安心だ。だがまだ宵の口、長い夜になりそうだった。

――彼女は、おとなしくしているだろうか。

不意に彼女の面が思い出された。おとなしい彼女というものも想像しがたいが、今日ばかりはおとなしくしていてもらわないと困る。

普段ならば、領内のことは自分が責任を負うことですべてに片がつく。すべてを負うということは、裏を返せばすべての賽が己の手中にあるということだ。その荷がいくら重かろうが、なにを振られるかわからないよりよほどいい――こう考えるとき、しみじみ感じる。自分はそのように育てられたのだと。

世の中のほとんどの者が賽を持たざる者だ。主に賽をゆだね、主の振った賽の目にしたがう。自分で賽を握りたいと思っても許されない。

だが自分は賽を握る者として育てられた。であればこそ、上に立つ自分は、定められた道から外れてはいけないのではないか。与えられるはずのないものを望んではいけないのではなかろうか？

『殿はもっとわがままになっていいんですよ』

――わがままなど。

言われずとも自分がわがままなことくらい知っている。

佐和山十八万石の領民をささえることすらおぼつかないというのに、さらに抱えきれないものを欲している自分はなんだというのか。

それに屋敷内に、あの者の気配がちらついていることも気になっていた。護衛をつけるとの報告は受けているが、その人選が癇にさわった。なぜよりにもよって――

「兄上」

不意に声をかけられる。「なんだ」と返した声音は、自分が想像していた以上に不機嫌なものになった。

声をかけた直孝も当惑したようだが、そなたのせいではないと訂正するのもちがう気がして、そのまま放っておく。

「体調がすぐれぬのですか。無理をしておられるように見受けられましたが」

「務めに障りはない」

話を切りたがっていることを察したか、直孝は感情を押し殺すように瞳を伏せた。

「……では、殿も連日の行程でお疲れのご様子、宴は早めに切り上げていただけますか」

「わかった。詳細は采女と調整しろ」

弟が自分に求めてきたのは形ばかりの了承だ。用を終えればすぐさま采女のもとに行くだろう。そう思いきや、直孝はまだその場に佇んでいた。

「ほかになにかあるのか」

「――兄上、先日の醒井の一件、おくつろぎ中のところに立ち入ってしまい、申し訳ございませんでした」

直孝は頭を下げる。顔には出していないつもりだったが、やはり勘づかれていたらしい。

先日、直孝は彼女とふたりでいるところに邪魔に入った。それだけなら、任務なのだからしかたないと流しただろう。しかし直孝は、こともあろうに彼女を侍女呼ばわりした。

彼女がその言を気にした様子はなかったが、数日前この場所で、彼女に侍女のように手をつかれたことは苦い思い出だ。無論、直孝は数日前の出来事など知らないのだから、完全に自分の八つ当たりだ。だが、こと彼女に関して湧きあがる苛立ちはなぜか自分でもままならなくて、気持ちを抑えられない自身が腹立たしくてさらに苛立つ。その悪循環に活路が見出せないいま、醒井の一件はなかったことにしたかった。

しかし、直孝の気は収まっていないらしく、なおも言を継いだ。

「お耳に入れたくないとお思いやもしれませんが、あえて申し上げます。ご領内とはいえ、腕の立つ者も連れずに外出など、不用心がすぎましょう。御身に万一のことあらば、いかがなされるおつもりです」

「――は？」

直孝が気にしていたのは、彼女のことではなく、醒井で苦言をさえぎられたことらしい。

直継は侍女呼ばわりに苛立って言葉をさえぎったつもりだったが、直孝は軽率な行動を改め

るつもりがないと受けとったらしかった。――根本的な思いちがいだ。
「江戸からの道中も、幾人も刺客が潜んでおりました。特に江州は山が多く、忍びの里も点在しています。用心しすぎてもまだ足りないくらいです」
直孝は暗殺に気をつけろというが、忍びの毒や暗器では自分は殺せない。普通の刀傷くらいなら〈力〉で癒せるのだ。それこそ数人がかりでめった刺しにするか、首を落とすくらいしなければ、息の根は止められない。自分を殺せるとすれば、よほど呪法に長けた者か怨念や怨霊の類、そして自分自身だけだ。
自分に宿る〈力〉のことを弟には一切話していないので、思いちがいも仕方がないとも思う。だが幕府の中枢にいれば、当家の血に宿る〈力〉のことや父のこと、いくら傷を負ってもすぐに次の戦に臨んでいたと聞くこともあっただろうに――それは自分の思いちがいだったらしい。
「忍び女を供連れにご領内をまわられるのは良いでしょう。ですが、あのような――」
そこまで言いかけて、直孝の言葉が止まった。
「――どうした」
「……は。あの方のことにございますが、鳥居家の姫というのはまことでしょうか」
思わぬ名を出されて、直継は弟の顔を見上げた。
――どこから話が漏れた。
この屋敷で事情を知るのは主馬と采女と守勝、そして奥勤めの者だけだ。守勝以外の者は直

孝と距離をおいているし、守勝もそう迂闊に内情を漏らさないだろう。

しかしその沈黙を直孝は肯定と受け取ったらしい。「大変失礼なことを」と頭を下げた。

「想い人の侍女とご城下におりておられたのかと思い、先ほど母上にご挨拶にうかがった際にも失礼を」

自分の知らぬところで接点があったようだ。たしかに今日は秀忠の接待で、意識を飛ばしている余裕がなかった。

彼女は迷い人だが、鳥居家の姫にはちがいない。直孝は許嫁の意味で訊ねたのだろうが、肯定しても否定しても偽りにはならない。

さてどう答えたものかと、表情を変えぬまま思案していると、

「――想い人？」

背後から割りこんだ声に、直継は一歩足をひいて向きなおり、片膝をついた。――秀忠だ。

秀忠にふたりの小姓、あわせて三人。それらが近づく気配に気づかなかったなど、どれほど動揺していたのだろう。

「兄弟の語らいに入りこんで悪いけど、私も義兄の名代として入れてもらおうかな。……いまの言は右近に意中の相手がいるということかな？」

秀忠の声音は叱責するものではない。かといって興味本位でもなく、弟のいたずらを見つけた兄が、さてどうしようかなと困惑しているようだ。

直継は否定せず、頭を下げたまま言葉を待つ。すると秀忠は「うーん、それは感心しないなぁ」と渋るように告げた。

「右近の相手は鳥居家の姫だったかな。譜代同士とはいえ、縁組みは家をつなぐ大切なものだよ。天下が治まる前は、同盟のために敵国に嫁ぐ姫も大勢いた。女は戦場には出ないけれども、彼女たちは戦の代償として嫁いでくるんだ。命をかけて嫁いでくる姫に、せめて夫が味方になってやらねば哀れだろう」

そう言って秀忠はため息をついた。

「私と於江も似たようなものだよ。関白の命で嫁いできてね、当時は父上と関白の仲は表向き良好だったが、江戸は敵地も同然だ。於江の両親も悲しい最期だったしね。故郷がこのような有様では於江も嘆こう」

秀忠の正室於江の方は、浅井長政とお市の方の間に生まれた娘だ。両親は浅井と織田の同盟のための政略結婚で、父は母の生家との戦で、母は生家の後継者争いで亡くなった。

佐和山城はその浅井家の支城だった。本城の小谷が母の生家に滅ぼされたとき、彼女はまだ幼く、この地はおろか父の記憶すらないはずだ。しかし江州はその後の彼女の育った場所でもある。想うところもあるだろう。

そしてふたりの間に生まれた娘は、幼くして豊臣家に嫁いでいる。その娘――千姫のことを思い出したのやもしれない。

「跡継ぎのことで、今後側室が必要になることもあるかもしれない。だが正室を迎える前に側室を置くのは感心しないな。特にこの縁談は両家の先代のご遺志でもあるしね」

戦で亡くなった先代のことを思うなら、波風を立てないほうがいい――そうつづけた秀忠に、声を挟んだのは直孝だった。

「――僭越ながら」

「ん、直孝、どうした？」

「その、想い人というのは私の思いちがいだったのです」

「思いちがい？」

「屋敷勤めの女人かと私が思いちがいをしておりましたが、その御相手というのは、本当は兄の許嫁の姫でして」

許嫁という言葉に、驚いた秀忠が目を見開く。

「この屋敷にいるのかい？　鳥居家の姫が？」

さすがにこの問いかけに答えぬわけにはいかず、直継は「は」と頭を下げた。

「想い人と思いちがいをするくらい親密な様子だったって？」

それは曲解しすぎだ。

しかし直継は、主家への遠慮と直孝の立場、その他もろもろふくめてかなりの間を逡巡に費やしたあと「――は」と答えた。

すると秀忠は直継の傍らにしゃがみこんだ。
「なんだ、そういうことなら言ってくれないと。直孝もはやく教えてくれていれば、忠吉と姉姫へのいい土産話になったのに」
土産話とはいったいなんだ――そう思って直継が面を上げると、いつも以上に相好をくずした秀忠の顔がそこにあった。
「うんうん、右近もようやくそういう気持ちが芽生えたか。嬉しいなぁ」
そして秀忠はいつにもまして目を細めると、ぽんと直継の肩に手を置いた。
「右近の意中の姫とやらに、ぜひ会ってみたいな」

あこが室内で書を読んでいると、午時以来ずっと顔を見せなかったしのが、「遅くなりまして……」と夕餉の膳をはこんできた。
「あら、もうそんな時間？」
陽が落ちるまえから雨の気配があった。はやめに障子を閉ざして灯りをつけていたせいか、夜になっていたことに気づかなかった。
「しのも食べてないんでしょう。お給仕はいいから、休んでちょうだい」

「いえ、そういうわけには」
「じゃあしのも一緒に食べていけば？」
そう誘うと、「めっそうもございません！」と即答された。たしかに、みなが忙しい時に、ひとりくつろいでいるわけにもいかないだろう。
「忙しいとは思うけど、無理はしないでね」
そう告げると、しのはひかえめに微笑んでうなずいたあと、わずかに眉をひそめて訊ねた。
「あの、源十郎さまの御膳ですが……いかがいたしましょうか」
「え、部屋に運んであげれば？　ちゃんと小一郎の分もあるんでしょう？」
采女の頼みで愛宕にいるのだから、膳の用意くらいはあるだろう。
「それはもちろんございますが……」
「小一郎がどこかに行っちゃったとか？」
小一郎は午時、あこの前にひざまずいたあと、すぐに部屋をあとにした。言い残していったのは、みなに聞いたが醒井の水はなかったということだけだ。
その後、あこは手水に立ったときにちらと小一郎の姿を探したものの、見当たらなかった。
「いえ、源十郎さまはずっと廊下に控えておいでです。夕餉をおすすめしても、結構とおっしゃるのみでして」
「ええ!?　廊下ってどこ!?」

「表と奥の渡りのあたりですわ」
しのがそう言うなり、あこは駆けだして障子をあけた。
部屋を出ると夜風の冷たさが身にしみた。愛宕屋敷は琵琶湖に面していることもあり、浜風陸風と、凪以外はいつも風が吹いている。風があるだけでぐっと冷え込む。
（そんなところにずっといたなんて！）
「小一郎！」
小一郎は表から奥へとつながる廊下の真ん中で、表に向きあうように正座していた。
あこの声にも姿勢をくずさず、ちらと視線をくれるばかりだ。
「……おまえ、こんなところでなにをしている」
「それはこっちの台詞よ！　小一郎、こんなところでなにやってるの！」
「これが俺の務めだ」
小一郎は一言で切り捨て、前に向きなおった。とりつく島もない。
「務めって、警護ならわたしの部屋でもできるでしょう!?」
「部屋に入られた時点で警護失格だ。本丸はおとなしく守られていればいい」
言葉を換えれば、だまって引っ込んでいろということだ。小一郎のいつになく厳しい言葉に、あこは怯んだ。
「不寝番なら慣れているしな」

「一晩中ここにいる気!?」
「あたり前だろう。なんのための警護だ」
「でも……！」
なおも言い募ろうとすると、小一郎が表にむかって膝を立てて右足を踏み出した。
（え、なに……？）
あこが小一郎の視線の先を見やると、表から肩衣姿の少年がやってきた。小姓のようだ。
「――なにか用か」
小一郎は左手を鞘にかけて問う。右手は柄にかかっていないが、いつでも抜ける位置にある。
小姓は渡りには足を踏み入れず、表の廊下で手をついた。
「主よりの伝言です。姫にお越しいただきたいとの由にございます」
「そのような話は聞いていない」
「内々の仰せです。高須さまもご一緒にと。お部屋には私が案内いたしますれば」
小一郎は不審さを隠せずにいる。だが小一郎の存在を知っているのはごく一部の者だけだ。
これは本当に直継が呼んでいると判断してもよさそうだ。
しかしあこが返答する前に、小一郎が口を開いた。
「姫、と言ったな」
「然様にございます」

「しばし待たれよ」
そう言い置くと、小一郎はあこを奥へとうながした。
小姓の目の届かない位置まできて、あこは小一郎をふり返る。
「右近殿が呼んでいるのよ。はやく行かないと……」
「姫に来るようにと言ったんだ。事情はわからないが、とりあえず着替えてこい」
（あ、そういうこと……）
午に庭に下りたときのまま着替えるのを忘れていた。いまの自分の恰好はどうみても侍女だ。
「急いで着替えてくるわ」
踵を返そうとしたあこに、小一郎は重く告げた。――懐刀を忘れるな、と。

あこは打掛を羽織り、身なりを整えてきた。言われるままに腰には懐刀を差している。
（言われなくてもいつも持っているけれど……）
あえて言ったのは、その覚悟で来いということだ。
表は男の世界、みな刀を差している。懐刀も刃物ではあるが、相手が長物を持っていれば相手にならない。それに男と女では膂力が絶対的にちがう。女の懐刀、その目的のほとんどは自害のためだ。
小姓の先導で屋敷の表をゆく。愛宕屋敷に来て半月、表に呼ばれたのは初めてだ。

大方の造りは侍女としてまぎれこんで知っている。表と奥は建材も造作もさほどちがいはないが、普段出入りできない場所というだけで緊張する。

小姓が案内したのは広間ではなく、表のなかでも奥に近い一室だった。

「仰せにより、おいでいただきましてございます」

小姓が障子を前にそう告げ、あこと小一郎も廊下に座って手をつく。

（あらたまって、いったいどうしたの……？）

直継が接待中に倒れでもしたのかと思ったが、それは杞憂に終わった。

障子が開けられ面を上げると、上座に直継が座していた。采女と直孝もいる。しかし直継がいるのは上座の中心ではない。いるべき場所にいないことにとまどいをおぼえた。

直継に代わり、座の中心にいたのは二十代半ばの青年だった。

青年の恰好は正装ではなく羽織姿で、金糸銀糸と念の入った錦があざやかだ。

着ている本人は見た目ごく普通の青年なのに、その衣装に飲まれていなかった。主馬の場合は着こなすといった感じだが、目の前の青年はそれをあたり前のように着ている。

あこが事情を解さぬまま、「はようはよう」と扇で招かれる。足を踏み入れると、背後の障子がするすると閉ざされた。まるでお忍びの会見のようだ。

（――というか）

当主の直継に代わって上座につくことのできる相手といえば。

（若さまなんじゃないのこの人!?）

二代将軍となる徳川秀忠――と思しき青年は、にこにこと満面の笑みを浮かべていた。

秀忠は二十七と聞いているから、目の前の青年と年の頃は合っている。外見は、タヌキとあだ名される家康の子にしては中肉中背、とりたてて細くもないがすっきりと引き締まった体つきだ。面立ちは温和で、包みこむようなやわらかさがあった。

武家の棟梁としての威厳――それを感じるかと言われれば疑問だが、やたら好戦的だったり狡猾だったりする人よりはよほどいい。徳川家の天下安寧のよき御旗となるだろう。

部屋は二十畳にはすこし足りないくらいの広さだった。あこはまずは入ったその場でふたたび手をついた。

（えっと、えっと、挨拶の口上は――!?）

礼儀作法はひととおり教わっている。だが当主よりも格上の人に目通りするなど想定外だ。どういう経緯でこのような状況になっているのだろう。驚きのあまり、考えがまとまらない。

しかしお忍びとあって、秀忠は扇でちょいちょいと「近う近う」と気安く呼んだ。

さて言われるままに行ってよいものか。あこが逡巡していると、秀忠はあこの背後に目を留めた。

「ああ高須の。君が一緒にきていたのか」

「は。当家の姫ともどもご拝顔の栄を賜り、恐悦至極に存じ奉ります」

秀忠に挨拶に訪れた武家の子弟は、優に千人を超す。大名家の跡取りでもない小一郎はその他大勢のうちの一人にすぎない。だが、秀忠はしっかりと言い当てた。上に立つ者として育てられた秀忠の特技なのかもしれない。一度二度会っただけの相手の顔をおぼえるなど、あこにはとうてい無理だ。

「堅いことはいいよ。こっちにおいで」

さすがに扇で指し示された位置までゆくわけにもいかず、部屋の中ほどよりやや前に腰を下ろした。それでも近すぎる。あこが大刀を佩いていたなら一太刀にできる位置だ。小一郎なら確実に届く。しかしその距離が許されること、それ自体が信頼の証でもあった。

「ああなるほど、この子が右近の、もとい、左京亮殿の姫か」

秀忠はよほどご満悦なのか、目を細めてあこを見る。目は細すぎて糸目にしか見えない。

ほ、本当に見えてるのかしら……？　などと不遜な考えが脳裏をよぎる。

「年は右近とおなじくらいかな。かわいい子じゃないか、右近」

おなじくらいという年か、かわいい子という見解か、どちらに対する返答かはわからないが、秀忠の傍らに座していた直継は「は」と軽く頭を下げた。

（正装の右近殿――）

薄藍色の直垂姿だ。侍烏帽子は外し、頭を上げるとともに長い髪がさらりと揺れた。

その優美な姿に目を奪われていると、秀忠は「ほら、許嫁が見とれてるよ」と茶化す。

あこはあわてて訂正しようとしたが、「いや、見ていたいのもよくわかるよ」と言葉をさえぎられた。

「右近の姉は私の義妹にあたるんだけどね。清洲で会ってきたけど、清らかというかたおやかというか、それはまあお美しい方でね」

秀忠は清洲の義妹に想いを馳せたか、遠くを見やった。

「先代の兵部殿も見目の良い方で、父みずから似合いの姫を探して嫁がせたというくらいだ。そんな家族の中で育って、美人なんて見慣れてるはずの右近にご執心の姫がいるっていうから、ちょっと見たくなってね」

そうか、こういう子が好みなんだね、と秀忠はうんうんとうなずく。

（その言葉、どこかで聞いたような……）

あのときは思わず裏の意味を探ってしまったが、秀忠の言葉には裏はなさそうだ。

だが、ご執心というのは世辞だとしても。

（こういう子ってどういう子!?）

あきらかに美人とは別に分類されているのはわかるのだが、その範疇がわからない。

今度主馬殿を問い詰めてやろうかしらなどと考えていると、秀忠が思わぬ名を出した。

「左京亮殿は別の宿場だろうけど、せっかくだから土佐殿を呼んできたらよかったなぁ」

（土佐って、おじさま!?）

ここにいる小一郎と江戸の小一郎は、一度二度会った程度ならごまかせるくらいに似ているのだろう。だが相手が叔父の成次ともなれば別だ。物心つく前からかわいがられていたし、陸まで連れてこられた日には、野性の勘で気づかれるにちがいない。

秀忠の口から、呼んでおいての一言が出ればもう覆せない。すかさず直継が言葉をはさんだ。

「土佐殿をお招きすれば、宴席にこの場のことが知れます」

「ああ、内々にってね。わかってるよ。私も説教されたくないしね」

宴席に知られぬうちにはやくもどらないとね。そう言って、秀忠はあこに視線をむけた。

「右近はこのとおり、せっかく容姿がいいのに素っ気ないというか愛想がないというか、まぁ昔からこんな感じでね。許嫁にまでこういう態度なんじゃないかって心配してたんだけど、さすがにちがったみたいだね」

（いえ、十分素っ気なかったですけど）

秀忠に人となりを評されて直継はむすっとして押し黙っているが、感情が見えているだけまだましだ。出会ったばかりのころの直継は、今よりよほど素っ気なく、愛想などひと欠片もなかった。

「でもこうして心開ける相手ができて、本当によかったと思うよ。それがこれから共に歩む相手、共に家を支えてゆける相手であったことがなおさらね。――君ももう知っていると思うけど、右近は譜代の長となる家を預かるだけでなく、いろいろ難しいものを抱えている。肉体的

にも精神的にもおおきな負担を強いているし、抱えるもので手一杯で君のことに気を配ってあげられないこともあるかもしれない。けれど根はすごくいい子だから、愛想を尽かさずに側にいてやってくれるとうれしいな」

――右近のこと、任せたよ。

秀忠の声音は穏やかに心に沁み入って、あこは飲まれるように「は、はいっ」と答えていた。

（え……今わたしなにを言ったの!?）

とんでもないことを口にしてしまった気がしたが、秀忠はその返答に満足げにうなずくと、「よろしく頼むよ」と言って、自身の前にあった漆塗りの杯を突きだした。

「杯を取らせる」

小姓が前に出て間に入ろうとしたが、秀忠は「いい」と言って下がらせた。

（え、えっと、もらっていいの……？）

思いもよらぬ栄誉だ。礼を述べておそる手を出すと、秀忠は直接あこの手に乗せた。

軽いはずの空杯が重く感じられる。見えないもの――杯の上に託されたなにかの重みだった。

「ほら、右近も」

感情を押し殺して控えていた直継は、かすかに驚いた様子を見せたが、秀忠に促されるままに二歩ほど進んで方向を変えて、あこの右隣に並んだ。

「ほら、照れずにむかい合って……と言いたいところだけど、まぁいろいろ言っちゃったし、

今日のところは勘弁してあげようか」

直継が恭しく杯をいただくと、秀忠は手元の銚子に手を伸ばす。

その瞬間、「殿」と直孝が言葉を挟んだ。

「なんだい、直孝」

「――酔い醒ましにございます」

銚子の中身は、酒ではなく水だと言っているのだ。

主から賜る水杯はあまり縁起のよいものではない。だが秀忠は「ああそうか」と破顔し、「ではこの場かぎり、これは酒だ。みなわかったな？」と、皆の前で銚子を振ってみせた。史記にある、権力者が献上した鹿を馬だと言い張ったことに臣下が逆らえなかった事例を踏まえて、笑い話として逆手に取った形だ。身内だけの場とはいえ、直孝は人前で主を諫め、秀忠は笑って容れた。鹿を馬だと追従した臣下との関係とはまったくちがうようだ。

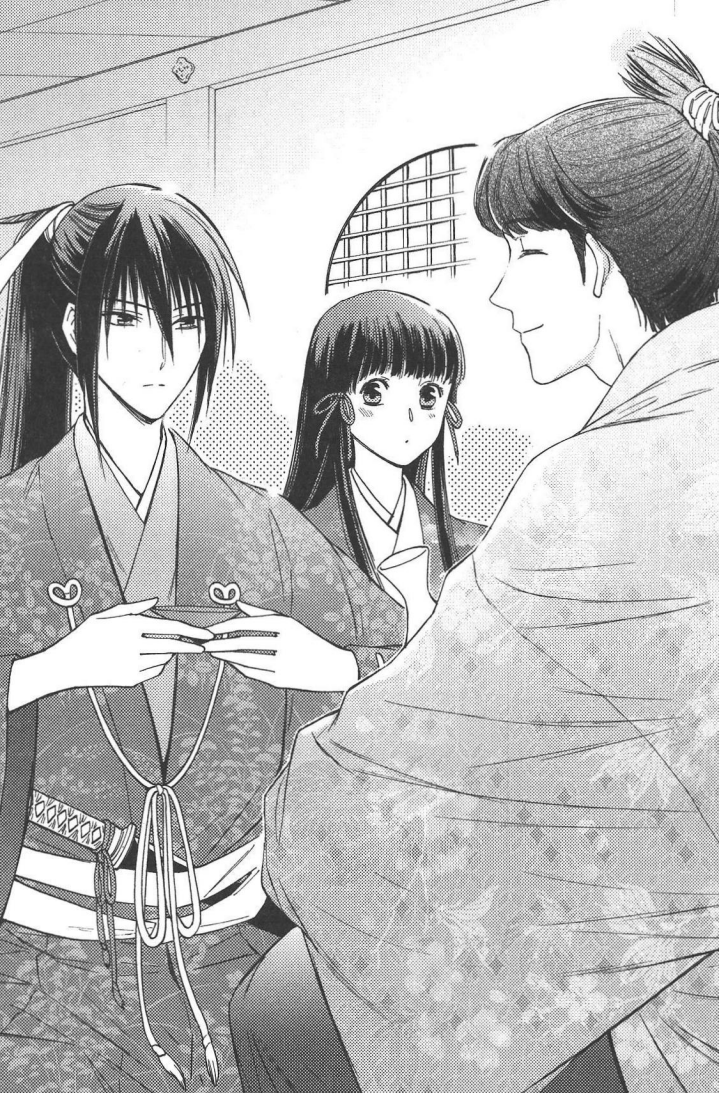
ふたりの杯にこの場限りの酒が注がれる。

（なんか婚礼っぽくない……？）

夕暮れ時に屋敷に輿入れして、花婿だけでなく、神前や両親に挨拶をするときに杯を交わす。酒は神への誓いの媒介、結びごとに杯はつきものだ。

（結びごと……）

一緒にいたいと引きあって、離れないようにつないでおく。酒は流れるもの、形とどめない



ものだからこそ、身体の中で心の形そのままに自身の一部となる。
自分の両親もその両親もその前もずっと、こういう形のないなにかが紡がれて自分につながっていて、いまは自分にその番がまわってきたのだ——そう思うと、今までただの部屋だったはずの場所が厳かな空気に包まれ、神がおりてきたような気がした。
酒ではないとわかっているのに、杯に口づけると熱いものを感じた。喉を流れると頬が火照り、心臓が速い鼓動を刻みはじめる。
(右近殿はどう思ってるの……?)
杯を空けて、ちらりと直継を見やる。しかし唇を離したばかりの直継の表情は硬かった。瞳は厳しく、畳の一点を見つめている。あこの視線に気づく様子もない。
(どうしたの? 気分でも悪いの?)
いや、ちがう。——直継は、今のこの状況を望んでいないのだ。
直継にしてみれば、主家筋の秀忠に命じられるままに戯れ事につき合っているにすぎない。この先のことを考えれば、鳥居家の姫が秀忠と会っているという現状がどのような影響を与えるかわからない。場合によっては、本当の許嫁に口裏合わせを頼むことになるかもしれない。厄介事はすくないに越したことはない。
直継はすでに、真実の世界と向きあって歩きはじめている。
(わたしは、嬉しかったんだけど、な……)

幻の世界で本物ではない許婚と、見立ての酒に真似事の杯。すべてが虚構だ。

けれども、好きな人と祝言を挙げる――それが現実では手に入れられない幻でも、たとえほんの真似事でも本当にうれしかったのに、感情が一転して、高鳴る鼓動が胸を打つごとに身体の底から悲しい想いが湧いてくる。――泣きそうだ。

（泣き上戸じゃあるまいし。って、そもそもお酒じゃないし）

けれども、紙を人に見立てて式神にしたり、人形を人の身代わりにしたりする。似たものに仮託して現実を呼び寄せるというなら、水が酒になっていてもおかしくないはずだ。感情が揺れるのは酒に酔ったせいだ、そういうことにしておきたい。

あこはひとり落ち込んでうつむいていたが、

「まぁ婚礼の水合わせだと思えばね、水もそう悪いものでもないだろう」

秀忠のその一言に不意に場の空気が変わった。ぴりっと緊張が走る。

（え？　どうかしたの？）

見上げれば直継の表情が先ほどまでとはちがう。秀忠を食い入るように見つめている。

おかしいのは直継だけではない。背後にいる小一郎もなにかに気付いた様子だ。

（なにかあったの？　それともさっきの言葉？　水合わせ――ってなに？）

しかし秀忠に訊くわけにもいかずにあこが呆然としていると、直孝が「殿、そろそろ……」とうながした。

「じゃあまた、機会があればゆっくり話を聞きたいな。君しか知らない右近の話とかね」
そう告げて座を立つ秀忠を頭を下げて見送る。そして直継も、すぐさま秀忠の後について部屋を出ていった。——立ち上がりざま、あこに「すまない」と言葉を落として。
（え……なにが？）
事情がわからないまま秀忠が去り、部屋に残されたのはあこと采女と小一郎の三人だった。
「高須殿、もしや——」
「おそらくは」
采女は顔色をなくし、厳しい面持ちの小一郎と視線を交わしている。今までふたりの間でどのような話し合いがなされていたものか、略された言葉の端からは読みとれない。
「場所は家人が知っております。私はすぐに宴席にもどらねばなりませんので」
そう告げた采女に、小一郎は「こちらは任せろ」とうなずく。
「ね……ねぇ、どうしたの？」
あこはひとり蚊帳の外に置かれて、ふたりに問いかける。こちらに向けられた采女の視線は、あきらかにあこを気遣っていた。
（え……どうして？）
くわしいことは道すがら話すが。そう前置きして、小一郎が告げた。
「水が、見つかった」

ただ一言。それだけの言葉を、あこはすぐに理解できなかった。
しかし、身体の中のなにかがどこかに吸い寄せられる——そんな気がした。

秀忠が広間にもどってきたのは、成次が宴の席をはずした直後のことだった。
成次が廊下で涼んでいると、秀忠と小姓ふたり、そして直継と直孝も共に帰ってきた。これで主賓がそろった形だ。膝をついて彼らを迎え入れながらも、成次はそのまま廊下に残った。
秀忠は道中、旅の疲れのせいか顔色がすぐれなかった。しかし身内同然の井伊家に着いて安堵したのだろう。宴席ではくつろいだ面持ちだったし、いまも顔色は悪くなかった。
——これも、井伊家に伝わるという〈力〉のせいかもしれないな。
佐和山に足を踏み入れたときはなにかに威圧される感じがしたが、屋敷の中は穏やかな空気がめぐっている。成次には霊に関する力はないが、陸が落ち着いているかどうかはわかる。
しかし、庭先で伏せていた陸が、不意に立ち上がった。なにかを嗅ぎとったのか、闇の先の一点を見つめている。
「陸、どうした？」
あからさまな警戒ではない。なにかに興味を惹かれた、その程度だ。

野犬か猪か、それともおなじ山犬でも見つけたか——佐和山はさほど高くないが、江州自体が高台にあり、丘の上にさらに山がそびえているようなものだ。山の獣も多い。

成次は草鞋を履いて庭に下り、陸に先導させる。陸は駆けだすでもなく、足を忍ばせるでもなく、並足でそれに近づいていった。

庭伝いに渡り廊下を越え、屋敷の奥にさしかかったときに成次も気配を感じた——人だ。

声音は抑えめだが、若い男女ふたりだとわかった。

「おまえは屋敷で待ってろ！」

「わたしの問題だもの！　おとなしく待っているだけなんてできないわ！」

逢い引きかとも思ったがそのような雰囲気でもない。たとえるなら、食材の調達が間に合わず侍女と家人が使いに走る、そんなあわただしさがある。女の不手際で調達が間に合わなかったものを男が代わりに取りにいこうとしているようだ。

しかし、そのようなことは客人を迎えた家ならばめずらしくもない。陸も放置するはずだ。

成次は陸の背に手を置いて追跡をやめさせて、屋敷の陰からふたりの様子を探る。

「夜の山道を行くんだぞ？　危ないだろうが！」

「わたしの番をしにきたんでしょ？　それを放っていく気？」

しかしこの声、どこかで聞いた覚えがある——だが成次が思い出せないうちに男が女の剣幕に負けたものか、ふたりは一緒に屋敷を出てゆこうとした。

裏口から出るふたりの面が、白塀にかかる篝火に照らされる。
——まさか。
成次は目を疑った。ふたりとも知っている——そして江州にいるはずのない人物だった。
姪のあこは江戸だ。ひとりならば他人の空似かとも思う。だがその隣にいたのは、筆頭家老の嫡子の源十郎だった。ふたりとも幼いころからよく知っている。見まちがえるはずがない。
山に出るという妖しかとも思う。しかし。
逡巡している間に源十郎が松明を持ち、ふたりは屋敷の門を出てゆく。
成次は陸の頭に手を乗せる。陸はそれだけで察し、ふたりを追って駆けだす。
灯りを持たないまま、成次は愛犬の後を追った。

松明を片手に夜道を行く。小一郎は逸る気持ちに押されるように歩を進める。
だがあこは小一郎とは歩幅がちがう。打掛は部屋に置いてきたものの、なかば小走りでないと小一郎に追いつけない。あこに歩調を合わせる、そのようなことにも気付かないほど小一郎は気が立っている様子だった。
「ねぇ小一郎、見つかったってどういうこと？　午にはなかったって言ってたのに」

ふたりが向かっているのは采女の邸だ。午にそう言ってからずっと小一郎は愛宕にいたのだから、なにか状況が変わったとも思えない。

だが、小一郎は固い声音を返した。

「あったんだ。水合わせのための水が。采女殿の邸に」

水合わせ——先ほど秀忠が言っていた言葉だ。

「水合わせって、なに？」

「ああ、まだ教わっていないのか……婚礼の儀式のひとつだ。両家の水を持ち寄って、両者を合わせて杯で飲む。こんなに遠隔だと日が経っているから、形ばかり口をつけるだけだがな」

水が合う、合わないといった言葉があるように、地方によって水がちがう。その両者を合わせることで、混じりあう両家のつながりを示すのだろう。

「江戸から持ってきた水を、佐和山に到着した日に采女殿に預けた」

「じゃあ……」

江戸屋敷から汲んできた水——すなわち、元の時にあった水だ。

（あっ……た……）

自分たちを元の世界に導くもの。それが見つかってしまった。

それまで霊水にこだわっていたが、元の時間にあった水が有効なのではという話になったのは昨日のことだ。昨日から采女は接待の準備にかかりきりで、その話は耳に入っていなかった

のだろう。だが采女は水を探していることは知っている。秀忠の口からその言葉が出たときの直継と小一郎の様子から、それが探しものの水だと察したにちがいない。

探しものが見つかった。なのに、なぜか心に隙間風が吹いている。そして小一郎も、帰る方法が見つかって喜んでいるという雰囲気ではない。

「……どうしたの小一郎。なんか怒ってない？」

すると小一郎は「あたり前だ！」と吐き捨てた。

「なんださっきの茶番は！」

あの方はなにをやってるんだと怒りの矛先は直継に向いている。本来なら責めるべきは直継ではなく、あこを呼びだした秀忠だろうが、ふたりの折り合いの悪さが響いているようだ。

「将軍拝命前といっても、若さまはもはや主君同然だもの。命じられたら従わざるをえないわ。右近殿だって好きでやっていたわけじゃ……」

「好きであんなことをされてたまるか！」

小一郎は怒りを音に変えて吐き捨てた。静まりかえった山道だけに、余計に大きく聞こえる。しかしあこも反射的に言い返していた。

「右近殿だって嫌がっていたわ！」

あの横顔。硬い表情。——自分ひとりがあの状況を喜んでいた。思い返すと胸が痛い。

すまない——直継が置いていった一言。あの場では理解できなかったが、ようやくわかった。

客人をもてなすために、もしくは家の体面のために、無関係な自分を付きあわせたことに対する謝罪。きっと自分が本当の許嫁ならばあの言葉はなかったはずだ。

「……右近殿もしかたなく、嫌々従っていただけよ」

すると小一郎はあこをふり返った。松明に照らされた黒の双眸が、静かに見下ろしている。

「――本当にそう思っているのか」

「え……？」

「本当にあの方が、ただ命じられるままに受けただけだと」

真摯な眼差しにたじろいで、あこはうつむいた。

「……そうとしか考えられないでしょ。小一郎の位置からはわからなかったかもしれないけれど、わたしはちゃんとこの目で見たもの」

「俺の位置からでもちゃんと見えていたぞ。あの方も――おまえも」

あこは息を飲む。見られていた。小一郎は斜め後ろに控えていたのだから、真正面を向いているときはそれほど見えていなかったはずだ。見られていたのは、おそらく直継を見ていたときだ。

あのとき、自分はどのような目で見ていたというのだろう。小一郎は自分の心を知っている。ならば、心の動きも手に取るようにわかったはずだ。

気恥ずかしさに耐えかねて、あこは小一郎から顔をそむけた。

「見ていたならわかるでしょ」
いまもきっと見抜かれている。夜闇の中でも、顔をそむけても、小一郎にはなにも隠せない。
しかし小一郎はややあってから、
「――やはりあの方には任せておけない」
そう苛立ち混じりにつぶやくと、ふたたび采女の邸に足を向けた。あこはあわてて袖をつかんで引きとめる。
「ちょっと待って小一郎！　それってどういう意味!?」
任せるってなにを。もう愛宕屋敷には置いておけない、そういう意味だろうか。
「さっきの会見だけじゃない。醒井の件にしたってそうだ」
「え、醒井？」
水を汲みに行ったとは伝えたが、詳しいことはなにひとつ知らないはずだ。しかし、小一郎は怒りを押し殺して告げた。
「おまえが想いを寄せていることを知りながら、どうして心を乱すようなことをする？」
――誰から聞いたの、とは聞けなかった。誰に聞かずとも小一郎にはわかっている。
共に醒井に行った姿は見ていなくとも、直継とおなじ時をすごして、心揺らしたことを見抜かれていた。
側にいた直継なら、なおさらよくわかっていたにちがいない。見抜かれて、それでも立ち入

ってこなかったのは——拒絶されたことになるのだろうか。

自分に対して手をついたあのときのように、間接的に拒絶していた。それを自分は、浮かれていて気づかなかっただけではないだろうか。

「あの方もおまえが本当の許嫁じゃないことはわかっている。だから——抱えきれない荷なら触れるなと、言っておいたのに」

(あ……それ、が……?)

小一郎が直継に刺した釘、だ。

小一郎は手を出すなといったわけではない。手を出すなら受け止めるだけの覚悟を持てと言われて、直継は答えた。客人として愛宕屋敷で預かると。

(わたしは客人で、あくまで一時の滞在人で……だから帰る方法を一緒に探してくれて……)

「右近殿だって精一杯がんばって……」

声が、ふるえる。

帰る方法は探していると、言っていたではないか。自分が想い惑うまでもなく、直継の中ではもう答えは出ていて、小一郎に明言していたのだ。

それをあれこれ都合よく解釈して、すこしでも側にいられたらなどと——近くで見ていた小一郎の目にはどう映っていたのだろう。

信頼しているから。そう言ってくれた想いを、自分は本人の目の前で踏みにじっていたので

はないだろうか。

「……がんばっているで許されるのは子どもだけだ」

その声は低く、さほど大きな音でもない。だが厳しい言葉だった。

直継だけでなく、自分もまた子どもだと――大人としての責務を果たしていないと、一言で断罪された。

「いくつであろうと元服を済ませれば大人だ。大人になれば大切なのはがんばった過程じゃない。結果だ。あの会見だって回避する方法はあったはずだ。それを自分が楽な方法を選んでおまえを利用した。謝罪ひとつでおまえは許すのかもしれない。だが、俺は許さない。絶対に」

――ここがいつであっても、どこであっても。

鳥居家の姫であることを忘れるなと言ったその意味は。

（遠まわしに覚悟をうながしていたの……？）

小一郎はあこから視線を外し、采女の邸に向きなおって告げた。

「采女殿の邸に、元の世界に帰るための水がある。――これでもう、終わりだ」

終焉を告げる声は、湿り気を帯びた夜闇に溶けさった。

第五章　慶長十年三月十四日夜　縁の絆

廊下で正座をはじめてもう何時になるだろう。

陽は雲に隠れたまま落ちて、もうその欠片も残っていない。月も流れる雨雲に見え隠れするばかりで、湿り気をおびた風が容赦なく体の熱をうばってゆく。

姫の遠出を見たことも、醒井に行ったことも、すべて夢だったのではないかと思う。しかし月が顔を見せるごとに、これが夢ではないと現実を突きつける。

満ちた月は雲居にありながらも、なんら惑うことなく堂々と天に浮かんでいた。

今まで気がつかなかったのは、道中ずっと雨つづきで月が雨雲に隠れていたためだ。江州に着いてからは晴れた夜もあったが、夜はたいてい酒宴だし、月を愛でる風流人がだれひとりいなかったせいもある。暦は部屋ごとにおいてあり、いまさら月を見て日を数える者もいない。

「俺、が……」

弥介が口を開いたきっかけはなんだったか、ぼんやりと月を眺めていた宗二にはわからなかった。

「許せなかったのは、俺のことじゃない……源十郎殿を侮辱したことだ」

「……侮辱したおぼえはないが」

「源十郎殿のことを疑っているだろうが！」

「疑うもなにも、ひとつの可能性を挙げたまでだ」

そう、いくつもある未来への選択肢のひとつ。そして彼の性格を考慮して、真実からそう遠くないであろう可能性だ。

幸せを祈るしかできない立場から、それをあたえられる立場になったなら——たとえ意中の相手が自分の手に入らないとしても、その方法に惹かれることに不思議はない。

「源十郎殿はいずれ筆頭家老になられる方だぞ!?　その務めを放棄するはずないだろう！」

「あの方が職責を果たされていることは認める。だが誰のために職務に忠実であろうとしていたか、そういう話だろう。——姫は、鳥居家中にとどまって羽柴の縁をひきずるより、鳥居家の姫として外に嫁いだほうがお幸せになる。その先代さまのご遺志を源十郎殿も理解していたから、気持ちに折り合いをつけていたんだろう。だが……」

時を渡ったことでその平衡は崩れた。定められた相手に嫁がずとも、姫が幸せになれる方法が見つかってしまった。

姫の縁談が決まって以来、ずっと心を支えてきたものがくつがえされたのだ。彼はいつこのことを知ったのだろう。その葛藤を周囲に気づかせなかっただけでも相当の精神力だと思う。

弥介も、自分の言に同意する部分があったのだろう。くそっ、と拳を廊下にたたきつけた。

「もし……万が一、だ。源十郎殿がその方法を選ばれたら、俺たちはどうなる？」

「源十郎殿のことだ。残すとしても姫ひとり、俺たちまで巻き込むことはされないだろう」

「じゃあ、姫を失ったら、源十郎殿は……？」

宗二は口にはしなかった。その先は言わずとも伝わった。

自分たちを帰す以上、源十郎も共に帰るだろう。そうでなければ責任を取る者がいなくなる。

元の世界にもどった彼に待っているのは、蟄居、廃嫡、そして切腹――

姫を失った不始末は命で償うしかない。無論、源十郎もそこまで覚悟の上のことだろう。

――ほんとご家老さまも容赦ないよなぁ。

期せずして弥介自身が言ったことだ。その忠誠は主家に対するものか、主家の姫に対するものなのか。今後鳥居家の重職を担う源十郎に、家老衆は一番にそれを問うてきたのだ。

ただ送り届けるだけの任のはずが、辛い選択肢を突きつけられることになるとはついていない――いや、彼はついているのかもしれない。心と共に命の選択まで迫られたなら、なにを選んでも後悔することはないだろうから。

「……俺たちにはなにもできないのか」

「連座は望まれないだろう。すべて御自身で背負われるはずだ」

加担すれば連座の可能性がある。だから相談もしなければ、手を貸せとも言わなかった。事を為すならば、すべて自分ひとりで片づけるはずだ。

「そしておそらく、姫のあのご様子では、姫自身も源十郎殿の立場に気づいていない」

「なんだって……？」

「源十郎殿は自分の負うべき責めを姫に知らせずに、残るかどうか選ばせるつもりだろう」
負い目をかけたいわけではない。ただ彼女が望むままに、自分のできる方法を自分が勝手に選びとる。幸か不幸か、彼はそれができる立場にある。
「そんな……じゃあ源十郎殿は……」
背後から声がかけられたのはそのときだった。
「――弥介？　宗二？　なにしているの？」

あこが采女の邸に着いてはじめに目にしたのは、廊下に並んで正座する家人ふたりだった。あこ自身は山を越えたために身体が熱っているが、夕涼みというには肌寒いはずだ。ふり返ったふたりは、驚きを隠せない顔であこを見る。さすがに陽が落ちてから訪ねてくるとは思っていなかったらしい。
「おまえら、またなにかやらかしたのか」
たしかに小一郎の言うとおり、涼んでいるだけなら正座はないだろう。またというあたりに小一郎の普段の苦労が見てとれる。
弥介と宗二はあことおなじ十六歳、一行の中ではもっとも若く、上の者にはかわいがられているが説教されることも多い。たいていは弥介が横着なことをやらかして、一緒にいた宗二が巻き添えを食らうかたちだ。

「源十郎殿……！」

帰りを待っていたとばかりに弥介は立ち上がろうとしたが、小一郎は「取り込み中だ。話は後でな」とさえぎった。

「いえ、ぜひ今お訊ねしたき儀が！」

「――弥介。姫の御前だ。控えろ」

小一郎の低い声音に弥介はたじろぐ。

小一郎は先ほどの会話を最後に、山を越えている間、終始無言だった。その間、小一郎もまたずっと考えこんでいたのだろう。腹の底にためこんだものが、さらに声を険しくしている。

しかし弥介はなにか意を決すると、裸足のまま庭に飛びおり、手をついた。

「ぜひ姫さまにお訊ねしたいことがございます！」

「……どうしたの、弥介」

弥介の真剣な眼差しに押され、あこは弥介の勝手を許した。

生真面目な宗二に対し、弥介はへらへらしていることが多いが、根は真正直な少年だ。

しかし、つづく言葉にあこの思考が止まった。

「姫さまはいまが三月であることをご存じなのですか!?」

（え……）

どうして弥介がそのことを知っているのか。廊下に座したままの宗二も、弥介の言に驚いた

様子はない。宗二もそのことを知っているということだ。
（だってみんなはこの邸から一歩も出てないって……）
采女の家人が口を滑らせたのか。しかし、昨日の午時にふたりに会ったときは気づいた様子はなかった。薪割りの最中で、いつもどおりに言葉を交わして――
（いつもどおりだった？　本当に？）
弥介は自分を見て、あからさまに驚いていなかったか。いやしかしそれは、自分がひとりで采女の邸を訪ねてくるとは思っていなかったためだろう。
弥介は面を上げ、睨みつけるように見つめている。返答をごまかすことを許さない目だ。
なんと返事したものか、考えをめぐらせるがまとまらない。息を飲んだあこに代わって小一郎が、「弥介」と短く制する。しかし弥介の言葉は止まらなかった。
「姫さまはそれをご承知の上で、愛宕屋敷で安穏とお暮らしだったのですか!?」
（安穏って……）
「控えろ弥介！」
小一郎は松明を投げ捨て、刀を抜きはらった。弥介に突きつけたその切っ先には、微塵も揺らぎはない。それを振り下ろす覚悟を見せつけられて、弥介は怯んだ。
家人たちが邸から出てきたのはそのときだ。
最初は、またふたりがなにかはじめたか？　といった気安さだったが、小一郎の姿と抜かれ

た刀を見てとるや、あわてて駆け寄ってきた。
「源十郎殿！　弥介がなにか無礼でも……姫!?」
家人たちは小一郎の背後にいたあこに気づき、次々に片膝をつく。宗二も廊下から庭に下り、土の上に膝をついた。
しかしあこの意識が家人たちに逸れたのを見てとると、弥介はなおも言を継いだ。
「姫さまが三月にお留まりになるなら、源十郎殿はどうなるとお思いですか！」
（どうなる……って……）
「姫さまを無事お連れするのが源十郎殿の務め、もし姫さまおひとりがこの世界にお留まりになれば、源十郎殿は……って宗！　離せよ！」
背後にいた宗二が弥介の口を押さえにかかる。弥介は振りはらおうともがき、宗二の細い身体は縁側に打ちつけられた。
「弥介、おまえ！」
家人たちは、気が狂れたかと弥介を押さえに飛びかかる。そして背後から弥介を押さえつけると、頬を地に押しつけて、後ろ手に縛りあげた。
年長者のひとりが、水を汲んでこいと指示をする。水をかけて目を覚まさせるつもりだ。
「俺は正気だ！」
「黙れっ！」

「みんな化かされているんだ……！」
砂を飲みながらも弥介は言い募り、縛りあげられたままの腕で天頂を指し示す。
指されるままに天を見上げ、あこは目を見張った。
「上？　ってなにも……」
天にはいつ降り出してもおかしくない雨雲が足早に流れてゆくだけだ。しかし。
「――え？」
しかしその合間、あことおなじように気づいた者がいた。
雲居に朧に映える月影――その形は。
「月、が……丸い……？」
「――そんな馬鹿な」
「もう半月のはずだろ？」
空を仰いだまま、家人たちがざわめきはじめる。
そこに弥介の叫び声が響きわたった。
「今日は三月、十四日だ……っ！」
その声に、みなが虚を突かれた。

現実の月を見て湧きあがる疑問、それに対する明解な答え。それを告げたのが、気の狂れた弥介だということに家人たちはとまどい、たがいの顔を見合わせている。

いまの弥介はどこかおかしい、けれども言うことは正しい。なにを信じればいいのかわからない。みな幻に包まれたかのように沈黙している。

あこは胸の奥がぞわぞわとさざめくのを感じた。――嫌な気配だ。

そのとき刀を納める音がした。玉鋼の澄んだ音が、澱んだ空気を一掃する。

みなが我に返り、そして察した。小一郎は事情を知っているのだと。

「――源十郎殿、どういうことか、説明していただこうか」

家人を代表して年長の青年が訊ねる。家老名代となって立場は逆転したが、小一郎が元服以来世話になっている朋輩だ。

隠しとおせないと覚悟したか、小一郎はひとつ息をついてから、口を開いた。

「弥介の言うとおり、今は三月だ」

その言葉にざわめきが起きる。だが小一郎は語調を乱すことなく、淡々と言葉を継いだ。

「俺たちは本来とはちがう時の中にいる。ここは元の世界と似ているが、おなじという確証はない。この訪問前に井伊家からなんらの示唆もなかったということは、俺たちの時の流れでは時迷いは起きていない。ここは別世界だと思ってくれてもいい。迷いこんだのはおそらく醒井宿から愛宕屋敷までの道中、なぜ迷いこんだのか理由はわからない。こちらの家には事情を話

して滞在の了承をとってある。元の時間に帰る方法は検討中だ」
持てる情報をほぼすべてあきらかにした形だ。
すぐに事情を飲みこめない家人たちは「どういうことだ？」と背後でささやきあっている。
だが問うた青年はすぐさま把握したものか、訊きなおすことはしなかった。
「なぜ、それをすぐに話さなかった」
「俺が知ったのもつい先日だ。こちらの家は、どうやらこういった類に慣れているらしい」
「ではなぜ知った時点で話さなかった」
「俺たちは招かれざる客だ。こちらの家にも都合がある。俺たちの対応に手を回せる時機を調整していた」
小一郎は澱みなく返す。しかし青年は小一郎に一歩近寄ると、声を落とした。
「……この方が原因なのではないのか」
誰がと尋ねるまでもなかった。家人たちの視線がいっせいにあこに注がれる。
この天災娘が、と先日小一郎は言っていた。しかしそのようなかわいらしいものではない。
得体のしれないなにかを見る目だ。
道中、あんなに親しく接していたのに、いま彼らの瞳の奥には恐怖の感情が渦巻いている。
一度は払拭されたはずの澱んだ空気が、またゆっくりとめぐりはじめる。
「この方が引き起こしたことなんだろう。だからおまえは」

「姫は関係ない」

小一郎は真っ向から否定する。だが青年はあこに対する恐怖ゆえにそう言っていたのではない。小一郎の返答は、青年の怒りの火を点しただけだった。

「神隠しに巻きこまれたというなら、真っ先に疑うべきだろう。現に姫はいままでも――」

「その話なら後にしていただこう。姫の御前だ」

(だめ、小一郎)

青年はみなに話さなかった理由を訊き、小一郎は不安を募らせている家人の気持ちを逸らすための答えを返している。青年はその食いちがいと、そして小一郎があえてそのように答えている理由に気づいている。――あこをかばっているからだ、と。

(もういいから。話して。本当のことを)

自分が子どもだったから――家の当主としての立場、鳥居家の姫としての立場、それらの認識が甘かったから、決断を下せなかっただけだと。

小一郎はなにも悪くない。しかしそれを、今ここであこの口から話すことはできない。あこをかばっていた小一郎までもが立場をなくすことになる。

あくまで退かない小一郎に、青年は小一郎の胸倉をつかみあげた。

「己が務めを忘れたか源十郎……!」

青年は小一郎を呼びつけにした。

家老名代。その肩書きだけで従ってくれるような従順な者ばかりではない。小一郎が年若くして認められていたのは、その任に対して責務を果たしていたためだ。小一郎がその名にふさわしくふるまい、導いてきたからこそ、年長者も小一郎を立てて従っていた。

しかしその責務に反するならば、小一郎はただの年下の家人にすぎない。

「おまえの務めは姫を嫁ぎ先に送りとどけることだ！　一番にすべきことは元の世界に帰る方法を探すことだろう！」

しかし、青年の怒気にも小一郎は揺らがなかった。おなじ高さにある目を、真正面から見つめる。

「この旅のすべての権限は俺にある。家老名代の職を返上するその時までは従ってもらう」

「また逃げだした姫を宥めるより先に、己がすべきことがあるだろう!?　姫がどれだけ嫌がろうが天変地異を呼ぼうが、嫁ぎ先に送りとどけるのがおまえの任務だ！」

（え……？）

小一郎の任務ならば、あこも当然知っていた。しかし青年のそれは、無事に送りとどけて笑って別れるという意味ではなかった。あこが嫁ぎ先に行くのが嫌だと泣こうがわめこうが、それを無理にでも連れていくのがおまえの務めだと。

（小一郎はそんなことは一言も……）

ちがう。そのような素振りを自分に一切見せなかっただけだ。

――昔から、おまえがごねると天災人災祟りもろもろ起きることが多いんだよ。嫌なことには厄災を起こしてまでも反抗すると、みなが知っていることだと言っていた。それは自分になにを起こされようとも任務を全うしろと、そう告げられていたからだ。

「情に溺れたか源十郎！　その方はもうおまえの許嫁でもなんでもないんだぞ!?　姫の気持ちを優先させて自分を犠牲にするつもりか……!?」

（犠牲……？）

あこがその意味を理解するより早く、家人たちはその意を察した。

家人たちはみな息をのみ、驚き、恐怖、不安――そんな感情が一気に膨れ上がる。

（いけない……）

この空気がなにを生みだすか、あこは知っている。張り詰めたそれがはじけたとき、生み出されるのは黒い嵐――人を感情のままに突き動かすもの、だ。

緊迫した空気が満ち、絹糸を限界まで引き伸ばしたような張り詰めた音が聞こえる。

あこが頭痛をおぼえて頭をかかえると、耳の奥から声がきこえた。――逃げろ、と。

（え？）

幻聴だろうか。あこは視線を上げたが、小一郎がふり向くことはない。小一郎は無言で青年を睨みつけたまま、微塵も揺るがない。

しかし、みなの視線から隠すように立ちはだかる背中が言っている。はやく逃げろと。



この不安の空気を生んでいるのは、厄災を呼ぶあこへの恐怖の念、そして小一郎に対して生まれた不信感だ。犠牲という意味がわからなかったが、家人たちには伝わっている。小一郎がなにかを犠牲にし、任に背いてまでなにかをするつもりだと、気づかれてしまった。

ここにいては危ない。――自分も、小一郎も。

小一郎が先に逃げるなどありえない。まずは自分が安全な場所に行かなければ。

あこは一歩、後ろに下がる。そして身をひるがえすと駆け出した。

「姫さま……っ！」

背後から追いすがる弥介の声。

その一言に、なにかをつなぎとめていた糸が、切れた。

湧きおこった恐怖の念が黒い靄となって、勢いをまして背後から襲いかかってくる。あこはその念に押され、足をもつれさせて転んだ。

突風のようなそれは転んだあこの頭上を駆けぬけて、門に衝突する。

開け広げられた門。なにもないはずの場所にそれはぶつかり、なにかがひび割れた音がした。

薄い玻璃を、磨きあげた御影石の上に落としたような音。

その高音とともに、割れた欠片が頭上から舞い落ちる。――それはやわらかな霧雨だった。

（どうして、雨が……）

いや、雨ではない。水で織り上げた結界の欠片だ。

あたたかな霧雨に恐怖の念は溶け去った。だが、それも一瞬。
霧雨もまた夜闇に溶け、次の瞬間には、結界に阻まれていた瘴気が屋敷内に入りこんできた。
焔や実体なき影が、あこの頭上を飛び交う。
「なんだこれは……!?」
触れてはならない。家人たちはそれがなにかわからないながらも本能で察したのだろう。カラスやむささびのように飛び交うそれらから身をかわす。
「これも……!?」
姫の引き起こしたことか。そんな声にならない意思を感じる。
(わたしのせいじゃないわ!)
しかし、そう言ったところでなにになるだろう。押さえるすべも、救う手立てもなにもないというのに。
(いえ……本当にわたしのせいなの……?)
自分に惹かれてものがやってきたというなら、自分がこの場から離れれば。
あこは湿り気をおびた庭土をつかんで身を起こすと、門にむかって駆けだした。
——桂皮の香りがする。
宗二は朦朧とした頭でそんなことを思い、すぐさま否定した。

そんなはずはない。薬は懐の中だし、桂自体はこの国に自生しているものではない。縁側に頭を打ちつけて、どこかがおかしくなったのかもしれない。

宗二が瞼を開くと、なにかがきらきらと舞っていた。雨かと思った。しかし夜に降る雨にしては、それは眩い光を放っている。

――光……？

そのとき脳裏でなにかが明滅して、いつかの記憶をよみがえらせた。

あれはどこだったか――ああ、醒井だ。

あのとき桂皮の香りとともに見たのは、手巾を取るなり流れ落ちた髪。それは太陽の光を宿したかのような白金の髪だった。顔立ちはこの国の人のものだというのに、髪の色だけがすっかり異国に染まったような――陽の光と同化したような色合いをしていた。

そんなめずらしい風体をどうして忘れたりしたのだろう。

……忘れた？　否、忘れろと薄色の目が命じた。

どくんとひとつ心臓が跳ねる。それを機になにかが変わった。不意に早鐘を打ちはじめた胸に手を当てようとしたが、右手は動かなかった。身体が動かない。

あのとき自分の右手を握った男の手は熱く、目と手を介してその陽光を体内に埋め込まれたような気がした。

外見に目を奪われた一瞬を突いて、空になった意識の隙間にすりこまれたもの。

――あれが、すべてを惑わすもの……諸悪の根源だ。
そのとき宗二のすぐ目の前を、ふっと黒い影が飛んでいった。見わたせば、黒い影や人魂のような焔が仲間を襲っている。その向こうには、示されたあれが腰をついている。
――あれを逃がしてはいけない。
なにが決心させたのか、彼女は身をひるがえして門にむかって駆けだした。
宗二の身体がはじかれたように立ち上がり、身を低くして後を追う。
身体が勝手に動いていた。握りしめられた右手だけが熱く感じる。
――もし逃げるようなことあらば、追って、この手で。

――斬りかかれ。

「宗!?」
弥介の声に真っ先に反応したのは小一郎だった。
次いであこがふり返ると、宗二が追ってきていた。その手は刀の柄にかけられている。
（うそ……！）
小一郎は胸倉をつかんでいた青年の腕を払いのけ、あこと宗二の間に立ちはだかる。
もはや抜ける距離ではなかった。抜けば宗二を斬り捨てることになる。

小一郎は剣先を見て、体捌きで宗二の体の内に左腕を入れる。刃の上から二の腕を振り下ろし、剣先がぶれたところを右手で宗二の手首をつかむ。

そのまま固定できればよかった。しかし一瞬早く宗二の剣先が小一郎の身に食いこんだ。肉を食む音。宗二は自身がなにをしたのか理解できないまま、呆然としている。

心が虚ろになった宗二をめがけて、焔が飛んでくる。小一郎は歯を食いしばって痛みをこらえ、宗二を肩で突き飛ばした。宗二はそのまま後ろに倒れ、結果的に焔からのがれた。

宗二の手を離れた刀が、小一郎の体から落ちた。——刃は、朱色を帯びていた。

「小一郎……！」

あこは転げるように小一郎に駆け寄る。

膝をついた小一郎の脇腹からは、朱がにじみはじめていた。柳色の衣をみるみる染めてゆく。

小一郎は脇腹を押さえたまま横に倒れそうになるところを、あこはすんでのところで支えた。

「……おまえは……無事、か」

「わたしは大丈夫！　無事じゃないのは小一郎の方でしょう!?」

「なら、いい……」

「よくないわよ！　傷が……！」

「ああ、これくらい舐めときゃ――」
言いかけて、小一郎は痛みに顔をしかめた。
「いってぇ……」
「舐められるわけないでしょそんなところ！　痛くてあたり前よ！　すぐに薬師を――」
「そんな顔……するな」
「小一郎？」
あこは小一郎の顔を覗きこむ。小一郎はあこを見上げて二、三度瞬きをくり返して、そしてすこし笑った。――なにかを諦めるように。
「悪い……ちょっと、眠い……」
痛いと言っておきながら、やけにその表情が穏やかなことが不安をかきたてた。
斬られた左脇腹、その血に濡れた手が、あこの顔に伸びる。
――なんでもないから。
そう言って、いつものように頭を撫でてくれるのかと思った。しかしその手は頭までとどかず、あこの頬をなぞっただけで、地に落ちた。
抱きかかえた小一郎の頭が、急に重みを増す。
「小一郎……？」
呼びかけてみるが、返答はない。意識を失った小一郎の頭を抱きしめる。――なぜかとても

冷たかった。

血が、脈に押されて流れでてゆく。身体を抱えた手のひらに、湧き出たばかりの血が溜まってゆく。

その血は熱い。小一郎の体内の熱を奪い去るかのように、熱い血が外に流れつづける。

頬に残るぬくもり、あれは指先の熱ではなく、血の熱だ。

血がこのまま熱をともなって出つづけたなら。

(小一郎はもっと冷たくなって、それで……)

寝顔は穏やかだが、いつもより色みがない。息が細い。このまま息が絶えれば。

(絶えれば……?)

「やだ……ねぇ、小一郎、ねぇって……」

この顔をどこかで見たことがある。あれは佐和山城だ。

采女が覚悟を決めたとき——死に臨んだときとおなじ、穏やかな表情だった。

「いやぁぁぁぁ——————!!」

声にならない叫び声が、周囲にこだました。

それまでそよいでいた風が、不意に重みを増した。
直継が中庭を見やると、向かいにいた男が「井伊殿?」と問いかけた。
宴は直孝の進言どおり早めに切りあげ、秀忠はいま、今日二度めの湯を使っている。入浴の合間を見て、直継は幕府の役人と明日の打ち合わせをしている最中だった。
「井伊殿、なにかご不明な点でも?」
男は打ち合わせの内容に不備があったと思ったのだろう。
庭に不審な影はない。屋敷内になにかが現れたわけではない。しかしたしかに風がちがう。
重々しい死の気配が混じっている。
次いで直継を襲ったのは眩暈だった。血が逆流するかのようだ。いままで穏やかにまわっていたはずの山の気が、生気から死気へと急速に転じている。
——結界、が。
近くに控えていた采女も察したのだろう。直継に駆けよる。
直継は身体の支えをなくし、畳に手をつこうとして、座の傍らにあった銚子を倒した。
「井伊殿!?」
男もあわてて駆け寄ろうとするが、眩い光にさえぎられた。次に視界がもどったときには、その場から直継と采女の姿は消えていた。

ふたりが飛んだ先は嵐だった。

否、吹き荒れる嵐のように、夜闇の中を幾多もの霊や焔が飛び交っている。

飛び交うそれらに触れまいと、家人たちは頭を抱え、飛び退き、逃げまどう。死気には触れないのが正解だ。触れるだけで生気を吸われる。場合によってはとり憑かれて魂ごと攫われる。邸のただならぬ様子に、山に住まう獣が警戒の声を立てあっている。ほどちかくからも山犬の遠吠えが聞こえた。この状況が異常だと判断してくれるのは助かる。獣の眼るしずかな夜のほうが正常ならば、大地は本来あるべき姿にもどろうとするからだ。

「姫！　――高須殿!?」

采女の声にふり返ると、嵐の中心に彼女がいた。庭先でしゃがみこみ、男の身体を抱きかかえている。

男は意識が落ちていた。腕は力なく垂れ、その手のひらは朱に濡れている。

彼女の頬にも血の跡がある。怪我を負ったのかと心臓が跳ねるが、それは男の血らしかった。

「うわ……っ！」

すぐ近くから声がする。数歩先に、後ろ手に縛られた少年が膝をついていた。逃げようとして転んだらしい。逃げそびれた獲物を狙い、焔が襲いかかる。

直継は駆けより、空に指をすべらせて障壁を張る。だが焔の勢いは止まらず、少年の前に立った直継めがけて飛び込んできた。

――喰いつかれた。

左肩に痛みが走る。だがあえてその力に背かず、直継は焔を体内に取りこんだ。焔は直継を乗っ取ろうと深みに入る。しかしそれは身体に宿る神力によって、一瞬にして灼き尽くされた。肩から湧きあがる浄化の光。それと同時に、ずんと身体が重みを帯びる。喰われた箇所から血が噴き出し、直継は片膝をついた。

「お、おい、大丈夫か……？」

大丈夫なわけあるか。

だがそう口にする前に、直継は腰に佩いた刀を抜きはらった。ひえっと少年は逃げるように背を向ける。直継は少年の腕を戒めていた手巾を斬り落とした。

これでもう自力で逃げられるはずだ。

少年は不意に自由になった両手を見て、己の誤解に気づいたらしい。謝罪か礼かを言いかけたが、直継は少年にかまうことなく、そのまま刃を手首に滑らせ、血を吸わせて地に立てた。

この刀は一族の刀工が打ったものだ。刀身には火の神が、自身の血には水の神が宿っている。朱を帯びた刀が鳴動する。放たれた神気に打たれて、焔たちの動きが止まる。すかさず直継は懐から紙の人形を取り出すと、それらに自身の血をふくませて邸の隅に飛ばした。

式神が一体生まれるごとに力を削られる。自身の力を人形に移しているのだから当然だ。

――父であれば。この程度、あたり前のように為していただろうに。

直継は四体の式神を飛ばし、地に刺した刀に手を伸ばす。刀を中心に、四隅の式神にむかって光が走る。次いで式神同士が光でつながれ、白銀の微光を放つ結界を織り上げる。

結界に閉じ込められた焔たちは、まばゆい光に灼かれて消え去った。

光が収まるとともに力が抜け落ち、直継は刀に寄りかかるようにして地に手をつく。

「右近さま！」

「来るな！」

駆け寄ろうとした采女を制する。自分の為すべきことを先にしろ——そう口にするより、来るなと一言告げるほうが早かった。余分な声を発する体力すら残っていなかった。

采女は状況を察すると、口を引き結び、男の手当てを優先させた。

家人たちは、あやかしが消え去った空を呆然と見上げていた。次いで、直継を遠巻きに見はじめる。恐ろしいものでも見るかのような——このような視線は慣れている。

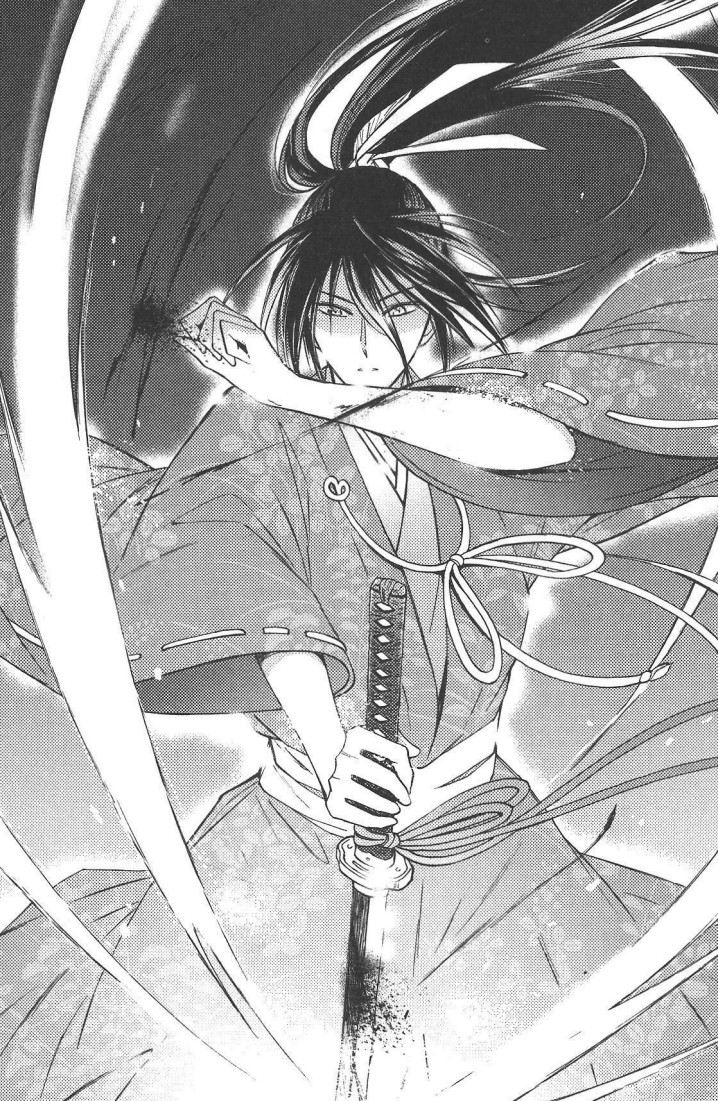
自分の存在、そして先ほどの状況を異常だと思ってくれたほうがいい。先ほどの状況をあたりまえだと思えば、心ごと死界へと連れ去られかねない。

「……おい……？」

直継が細く、しかし荒れた息をくりかえしていると、少年が心配そうに覗きこんできた。

大丈夫か？　と手を伸ばされる。その手を直継は反射的に払いのけていた。

少年の目が驚愕に見ひらかれる。



「い、いや、俺はなにもしないって……」

俺にはなにもできないし、と少年が言葉をかさねて弁解する。

直継の拒絶。手を伸ばした自分への恐怖からくるものだと少年は気づいていた。気づかれるほど衰弱した自分に、直継は歯噛みする。

力が尽きかけている状態で、無防備な自分にむけられた手。力を持たぬ普通の人間なら、差し出された手を取るのがあたり前だ。人は他人の手を、相手の思惑ひとつで首を絞められるやもしれない手を取りながら生きている。疑いつつも借りなければ生きていけないからだ。

しかし力を持って生まれた自分には、その経験が絶対的に欠けている。

いつもならば、他者にどう思われようとも、他者がなにを企もうとも、この身を守る力が自身に宿っている。しかしそれが使えないいま、初めて人の手が怖いと思った。

――怖くないから。

そう言って手を取った彼女。

怖くないはずがない。先ほど鳥居家の家人たちに向けられた目こそが現実だ。

それでも自分の手をとって、ぬくもりをくれた彼女。

直継は重い首をまわして、一筋の光を探す。――見つけた。

彼女は泣いていた。采女に諭されて男を地に横たえたものの、男の手を握ったまま離そうとしない。

そのときひとつの記憶が脳裏をよぎった。

――広がる朱、それにすがる姿。

急速に心を冷やされる。脳のどこかが警鐘を鳴らしている。このまま凍りつけと。

ここは雪の降り積もった庭で、だから体だけでなく心まで冷えてきて。

ふりはらわれた寒椿の花はとても紅く、その色は噴きだす血にも似ていて。

ずっとあの場所にいれば――抜けだそうとせず、ずっと佇んでいればよかったのだろうか。

「部屋に運びこめ！　急げ！」

男の怒声によって、思惟の淵から呼びもどされる。

この場にいる誰よりも低い声音、大人の声だった。

なぜ土佐殿が……？　その疑問を呈する間もなく、成次は家人たちに次々に指示を出す。家人たちはその命にはじかれたように動きだした。

指示にしたがって板戸が外される。にわか仕立ての担架に乗せられ、男は邸の中へと運びこまれた。

――ああ。手当てを、しなければ。

凍らせた心が、すべきことをはじきだす。

今の自分にそれが可能だろうか。しかし、できるできないではない。相手がさんざん神経を逆なでしてくれた男だということは、もはや意識になかった。

彼女のためでもなく、誰のためでもなく、それは己がなすべきことだった。

❀❀❀

——どうやってここまできたのか覚えていない。

頭が重くて顔を上げられなかった。うつむいた視界に入るのは、畳の目だけだ。

熱が失われて、重みを増した小一郎の体がそのまま土に——暗い底に引きずりこまれるような気がして、このまま手を離せば二度と会えない予感がして、絶対に離さないって思っていたのに、だれかに力ずくで引き離されて、運ばれていった。

小一郎は隣室にいる。それはなんとなくわかっていた。

けれど、あんなに血が出ていたのに、痛いって言っていたのに、うめき声ひとつしない。なにもかもが静まりかえっている。自分の耳がおかしくなったのだと思いたかった。

瞬きもできないまま、涙が鼻梁を伝い、畳に落ちる。

——どうして。小一郎が。

人がいなくなることに、理由があるとはかぎらない。戦に行ったって、生きて帰る者もいれば死ぬ者もいる。きっと人のあずかりしらないどこかで、なにかが、いたずらに運命をもてあそんでいるのだ。そう思わなければ、つむじ風のように一瞬でとおりすぎてゆく運命を受け入

れられはしない。

――なにも、できないの？

仏堂で祈ったって祖父は帰ってこなかった。なにもできず、ただ運命の時を待つだけはもう嫌だ、そう思った。けれども、だからといって自分になにができるというのだろう。

そのとき、思わず腰に手が伸びていた。指先に錦が触れる。

懐刀を忘れるな。――小一郎は知っていたのだろうか。これが今の自分の心の支えとなってくれることを。

刀を差し、いつも覚悟していたから、あんなに穏やかな表情でいられたのだろうか。

――いやだ。

小一郎は今までいつも一緒で、背中で導いて、ときどきふり返ってはよくがんばったなと頭を撫でてくれた。それがあたり前で、もう家族みたいなもので、これからもずっとそれは変わらないと思っていたのに。

――いなくなるなんて、いやだ。

――だれか、だれか、助けて。

祖父のときに、もう信じないと思ったのにそれでもすがっている。祈るしかできないなら、なんだって信じるから。

――どうか神さま、小一郎を救って。

直継は意識を失った男を寝所に運びこませると、采女以外の立ち入りを禁じた。

采女が傷口の周囲の血を拭く。左脇腹の切断面は綺麗なものだった。刀の手入れが行き届いていたのだろう。傷もさほど深くないし、綺麗な傷口は治りが早い。

意識が落ちたのは一時の急激な失血のためだ。失血も命にかかわることだが、急ぎ止めることさえできれば問題はない。血の道を整えることは慣れている。

直継は神水に指を浸し、傷口よりわずかに上、中空をなぞった。

血は体内をめぐるもの。あるべきものにあるべきところに帰れと告げる。大地がそうであるように、人にも本来あるべき姿にもどろうとする力がある。自分はその手助けをするだけだ。

光が生まれ、体内にしみ込んでゆく。

すると、鍛えられた身体が脈打つごとに湧き水のようにあふれていた血が止まった。傷口をすべてふさぐほどの神力は、今のこの者には逆に負担になるだろう。あとは時が癒してくれる。

傷の手当ては采女にまかせた。戦を経験しているだけあって、采女の手際はいい。

傷口を拭き、衣類のみならず敷布もあらためて、流れ出た血の気配を消す。あとは血のしみ

込んだ布と水桶、そして血臭ただよう部屋の空気を外に出せばいい。血に連なるものを断つことで、血が早く止まる。似たものが呼び合う縁を断ち切るのだ。

男の呼吸は安定し、顔に血色がもどりはじめていた。もう大丈夫だろう。

采女が片づけ終えるのを見とどけて、直継は立ち上がる。と、不意に立ちくらみをおぼえた。

「右近さま！」

采女が支えようとしたが、直継は気遣い無用とばかりにふりきって襖をあける。

すると、隣室にいた彼女が、わき目もふらずに部屋に飛び込んできた。

かたわらを流れゆく黒髪。

彼女は男の枕元に転がるように駆け寄り、名前を呼びつづけていた。そんな彼女のかたわらに采女が寄り、彼女の頬の血をぬぐって、大事ございませんと伝えるが、その言葉も耳に入っているのかどうか。

直継は目を逸らすと、身体をひきずるようにして別室に移った。

あの寝所は、生気にあふれたもので満たされている方がいい。

座っていることも億劫で、柱にもたれかかってぼんやりとしていると、血を洗い落とした采女がもどってきた。

「右近さま、肩にお怪我を――」

采女がかすかに眉をひそめる。気づかなかった己の迂闊さを責めているようでもあった。

先ほど焔に食い付かれたときの傷だ。衣に血がにじんでいるのを見てとったのだろう。

「……いい」

内から裂けた傷は、太刀傷とはまたちがった不快感があるが、これくらいの痛みなら慣れている。——そう、大量の出血も、畏怖の視線も、極度の疲労も、心を凍らせることも、すべてもう慣れている。

自分には絶対的に力が足りない。父から遺されたものを守るには、身を削るしか方法がない。力を持って生まれても、酷使すれば主馬のように失ってしまうこともある。この地を浄化するか、その前に自分の力が尽きるか、先の見えぬ綱渡りをしているようなものだ。しかし父の後を継いだ以上、みずから綱を下りることは許されない。後を託せる者もいない。

しかし、いまの自分は、いったいなにを守りたかったのか、そんなことすら考えが回らなくなっていた。

あの者を救ったのは義務や責務——すべきことだから救ったまでだ。

その心の根底には彼女がいたはずなのに、あの場に彼女がいたはずなのに、なにも感じない。心が、動かない。

「右近さま、お疲れでございましょうが、愛宕の様子も気にかかります」

そろそろ愛宕にもどらねば。采女は言外にそう告げている。

いまの状態で道を開くのはきびしいが、馬で山を越えるのは論外だ。愛宕屋敷にはたまがい

る。道を開きさえすれば引き寄せてくれるだろう。
「私はあとを片付けてから愛宕にもどりますれば」
采女は一晩この邸に置いておきたいところだ。しかし井伊家の一門としても実務上も、采女を接待の務めからはずすことはできない。
「高須殿を動かすのは難しゅうございますが、容体は安定しております。土佐さまにも私のほうからご説明をいたします。ただ、姫は愛宕でお預かりになったほうがよろしいかと」
自分も采女も愛宕屋敷に戻る。彼女は三成から狙われている身だ。結界の弱まったこの邸にひとり残してゆくには危険が大きすぎる。
直継はその方針に肯定して、柱から身を起こした。
身体が重い。肉体的にも精神的にも疲労の色が濃い。
しかしそれも今夜一晩のことだ。夜が明ければ——そこでまた思考が止まった。
夜が明ければ秀忠は佐和山を発ち、そして——
「右近さま？」
采女の声に直継は我を取りもどし、部屋をあとにして寝所へとおもむいた。
彼女は、眠りつづける男の手を取り、みずからの命を注ぎこむように両手で握りしめていた。
その真剣な面持ちからして、声をかけただけでは聞こえないだろう。
もう大丈夫だ。そろそろ愛宕に帰らなければ——肩に手をかけて、そう告げるはずだった。

——小一郎。

その声に、伸ばしかけた指が止まった。

直継は肩に触れることなく拳をにぎりしめ、背中をむける。

「——あとは任せる」

そう言い置いて、それが聞き届けられたかどうかもたしかめず、姿を消した。

無理に界を渡ったのが祟ったか、直継は愛宕屋敷の自室にたどりつくなり激しく咳き込んだ。幸い吐血はない。片膝をついてその上に腕を乗せ、袖口で口元をおおい、呼吸を整える。着替えなければと思うが身体がままならず、膝の上に体重をあずける。

衣には死気。染みついた死の匂いがさきほどの血臭を思い起こさせた。それと同時に、死気がこちらに付いてきたなら、もう大丈夫だろうとも思った。

死の気配はより近いほうに寄る。あの場にいた誰よりも、自分が一番近いと判断されたのだ。

——これでいい。これであの者は無事朝をむかえ、もはや彼女が泣くこともないだろう。

血の縁を断ち切った清浄な場。そこに飛び込んできた彼女。

流れゆく黒髪。
握りしめる手。
名を呼ぶ声。
それらすべてを鮮明に思い出せる。だが記憶に付随しているはずの感情がない。自分の目は、ただ目の前の光景をあるがままに映しとることしかできなかった。なにも感じとってはいけない、そう頭が判断し、感情を遮断したのだ。
その引き金は、彼女が横たえたあの者の手を離そうとしなかったあのときだ。
思いだしたのは父の最期の瞬間――父の亡骸にすがって泣く母の姿だった。
母が父のことをどれほど想っていたか。父を見上げる母は、自分には向けられたことのないような優しい顔をしていた。
自分を見るときの彼女の目にも、似た優しさを感じていた。きっと触れても拒絶されない、そんな予感はあったし、実際頬に触れても拒まれなかった。
しかしあの光景に、それが思いちがいだったことを突きつけられた。
声をかけようと手を伸ばしたとき、それを拒んだのは、あの者と彼女との縁の絆だった。
彼女を愛宕屋敷であずかって半月、こちらの世界に馴染むとともに元の世界との縁が薄れゆく彼女を見て、このままこの世界にとどめることも可能だと思った。自分が本来の縁談を白紙にもどして、彼女の居場所を調えることができれば、すべて収まるのだと。

しかし、彼女とあの者の絆――十年以上も積みかさねたそれは、この半月の思い出などたやすく消し去るものだった。

彼女は羽柴の名を負い目に感じて泣いていた。鳥居家の一族としてふさわしくありたい、認められる自分でありたいと望むのは、愛しんで育てられたからだ。辛いこともあっただろう。しかしたしかに愛された記憶が、彼女をそのように駆り立てるのだ。その彼女が、故郷を捨てられるはずがない。

夜が明ければ、彼女はあの者たちとともに元の世界に帰る。

この世に留めたい、そう思っていた自分が滑稽だった。自分が帰す、帰さない、帰したくないと思い悩むまでもなく、もうすでに彼女は元の世界を選んでいたというのに。

彼女はずっと男の手を握りしめていた。あの手が差し伸べられるのは自分だけではなかった。あのとき――半月前に彼女を引きとめたとき、彼女は心に傷を負った自分を放っておけなかったのだろう。ただそれだけのことだ。傷ついたものを放っておけない。まっすぐな性分の彼女らしいことだ。癒され、救われたなら、もう彼女がここにとどまる理由はなにもない。

――もし、彼女が唯一欲しいと伸ばす手が、自分に向けられたものだったなら。

そして秀忠に答えたあの言葉が、真実の心から出たものだったなら。

いや、と首を振る。もはや考えてもしかたのないことだ。

しかし、ただひとつ――その手は、自分に向けられるものであってほしかった。

『頭の中でどれだけ考えたって無理ですよ』

主馬はすべてわかった上でそう言っていたのだろうか。近くにあるようで、本当は遠かった彼女の心を。

『まずは触れてみて、お心に聞いてみるのがいいんじゃないですかね？』

手を伸ばしてみて、初めて、知った。

触れようにも、触れることすらできなかった。

母のように扇で弾かれたわけではない。背中がそう言っていたわけでもない。

しかし見えない障壁が、ふたりをつなぐ縁の絆が、それ以上自分を近づけさせなかった。

――指先が、痛かった。

秀忠が湯殿から出ると、汗を冷ますにはやや肌寒かった。

小姓がふたりがかりで秀忠の身を拭き布で包み、その温かさにほっと息をつく。小谷は雪深い地だと妻が言っていた。佐和山もおなじ元浅井の領地、似たような気候なのだろう。

小姓は寝衣の白小袖を着せ、身の回りの物を差しだす。その中には薄藍色の御守りがあった。

――兄弟で語らう時間は取れただろうか。

明日にはもう出立だが、宴を早めに切りあげた分、わずかなりとも時間ができたはずだ。

秀忠は直継だけでなく直孝の兄のつもりでもいるが、主君と家臣という立場上、直孝が壁をくずすことはない。直孝の実の兄は井伊家の当主、兄弟が会うことが適うようになったときには直継はすでにその立場にあった。

たがいの幼少期を知らないふたりがいまから親しくなるのは難しいかもしれない。だが母はちがうとはいえ、この世にたったふたりきりの兄弟だ。

御守りについて語ったときの直孝の固い声音を思い出しながら、秀忠はそれを手に取った。いまは難しくとも、いつか本心から語らえる日が来ればいい——そう願いながら。

刀は小姓にあずけたままふと外を見やると、格子窓から桜が舞う様子が見て取れた。

秀忠は板戸を開けるように指示をする。小姓たちは返答にためらったが、「いいから」と秀忠がうながすと、半間だけ板戸を開いた。

——見事な山桜だった。浜から吹く風に乗って、花びらが舞っている。

この木はここに生まれてもうどれくらいになるのだろう。佐和山城の麓のこの屋敷で、浅井、織田、豊臣と、次々に支配者が移り変わるのを見ていたのだろうか。

つい数年前まで佐和山は豊臣家の支配下にあった。城主は、あの戦を引き起こした張本人だ。

（石田、三成——）

その名が脳裏をよぎったとき、一陣の風が吹き抜けた。

秀忠はとっさにふり返る。が、そこにはなにもいない。小姓が板戸の向かいの障子をあけたために、風がとおり抜けたらしい。理由がわかればなにも臆することではない。

だが跳ねた鼓動がもどらない。肌が粟立つ。

この空気を知っている。先日の明け方の——あのときの空気だ。

——昨日はなんともなかったのに、なぜ。

顔を戻した先にいるものを、秀忠は正確に感じとっていた。

桜の木の下に白装束の男がいた。京の河原に引きたてられたときの姿そのままに。

「治部少……」

秀忠は懐に収めた御守りに手を伸ばすが、間に合わない。それを右手に強く握りしめたまま、その場に膝をつく。

「殿！　殿!?」

小姓たちの声、人を呼ぶ声、廊下を走る足音。それらが乱れた呼吸の合間から、断片的に耳に入ってくる。

「殿!?」

そのひときわ鋭い声は直孝のものだ。鍛えられた肺から紡ぎだされる声。

やはり兄の元には行かなかったのか——それを最後の記憶に、秀忠は意識を手ばなした。

どれほどの間そうしていたのか。息を整えているうちに、眠りに落ちていたのだろうか。

屋敷内をあわただしく走る足音が聞こえて、直継は我に返った。——いや、足音ではない。大粒の雨が屋根をたたく音だ。

最初は足音のように聞こえていたそれも、すぐに滝が岩を打つような音へと変わった。たしかに雨を降らせる手はずになっていた。しかし秀忠の眠りを妨げるような大雨ではない。

——いったい、なにがあった。

直継は部屋を出て、廊下から庭を見やる。

強い雨足に、白塀に沿って焚かれた篝火はすべて消えていた。そうでなくても雨で視界が閉ざされている。この雨の中では、日中であっても伸ばした手の先すら見えないだろう。

これほどの雨を降らせるには相当な力が必要なはずだ。ちかくの雨雲を呼ぶだけでなく、琵琶湖から雲を湧き起こさせている。

そういえばたまの気配を感じない。……そう考えてようやく気がついた。たまだけではない。屋敷の様子が探れなくなっている。

感覚が霞におおわれたようにぼんやりとしている。疲労のせいだろうか。

――若様は？
脳裏にその名が閃く。
呆けている場合ではなかった。自分にはするべきことがあったというのに。
直継が秀忠の部屋に駆けだそうとしたところ、廊下をやってくる者たちがあった。先導するのは井伊家の近侍二名、あとの十名ばかりは見おぼえがない。おそらく幕府の者だろう。
「いらっしゃったのですか」
直継の姿を認めると、近侍と幕府方の先頭にいた者が膝をついた。後ろの者は距離をおきつつも立ったままだ。
ただならぬ様子に、耳の奥で警鐘が鳴りひびく。
「――なにがあった」
「若様がお倒れになりました」
――秀忠が、倒れた？　この屋敷内で？
「なにゆえ……」
「俄かに苦しまれてお倒れになりました。……おそれながら井伊殿、いままでどちらにおいでしたか」
言葉こそ恭しいが、引き連れた者たちがその意図を語っている。
この非常時に姿を消していた自分を、なにがあろうと連れてゆく。反抗すれば引き捕らえて

でも連行するつもりだ。それは城主に対する行動ではない。

倒れたというのは、目眩や疲労のためではないのか。まさか毒か、刺客か——霊の仕業か。

——いったい、なにが起きた。

「ご同行願えますでしょうか」

雨に閉ざされた屋敷内に、有無を言わせぬ声が低く響いた。

厚い夜着を幾重にもかさねられ、小一郎は昏々と眠りつづけている。

寝所の隅には火鉢が置かれ、念入りに暖を取っているおかげか、顔には色みがもどってきた。呼吸も脈も安定し、手のひらにもぬくもりがある。

あれほど血が流れていたのに、これほどの短時間で出血が止まるとは思えない。きっと直継が力を貸してくれたのだろう——そこまで考えがまわってようやくあこは、この場に直継の姿がないことに気がついた。

(右近殿は……?)

最後に直継を見たのはいつだったか。小一郎と引きはなされたとき、たしかに庭にいたはずなのに。それから……それから?

「……ねぇ、右近殿は？」
傍らに座す采女に訊ねる。采女はずっと無言でひかえていた。
「右近さまならば、愛宕におもどりになりました」
「え……あ、そうね、お務めの最中だものね」
別室で倒れているわけではないと知って安堵する。おぼろな記憶によれば、直継はずいぶん疲弊しているように見えた。
「采女殿は行かなくていいの？」
采女をみやると、秀忠と謁見したときとは衣が変わっている。小一郎の手当てで血がついたためだろうか。しかしいつ着替えたのだろう。そのようなことにも気づかなかった。
まだ朝の気配はない。だが、記憶がかなり飛んでいる。自分が取り乱しているうちにどれほどの時が経っているのだろう。
「私もそろそろまいらねばなりませんが、この邸では姫の身をお守りしきれません。どうか私とご一緒に愛宕屋敷へ――」
「その前に、ご説明いただこうか」
あこはその低い声音に息を飲む。
ふり返ると、寝所からつづく部屋に入ってきたのは、三十代半ばの痩身の男だった。
陽に灼けた肌、しっとりとした髪は色濃く、長い前髪が頬に沿う――あこもよく知った顔だ。

（おじ……さま……）

しかし男の目は、数カ月ぶりに会う姪を見るものではない。痩身の割に低い声音もいつもより深みを増している。

きっとその鋭い表情そのままに、庭には神経をとがらせた陸が控えている。主が一声命じれば容赦なく飛びかかるだろう。とうてい人の足で逃げられるものではない。

男――鳥居成次は、寝所には立ち入らず、つづきの間に腰を下ろして胡坐を組んだ。

「どういうことか、お話しいただけますかな。采女殿」

そう言いつつも、視線はこちらに向けられている。

獲物を逃さない鋭い眼光が、あこを射抜いた。

第六章　慶長十年三月十四日深更　罠

突然の訪い人にあこは凍りつき、それとは対照的に采女はその場でゆっくりと膝をむけた。秀忠の随身とはいえ、叔父の成次は鳥居家から別家をたてることを許された一大名だ。井伊家の一門にすぎない采女は下座にさがるべきだろうが、寝所から動かなかった。礼を失していることに采女が気づいていないはずがない。しかしあこと小一郎を守る責務を優先させた。成次もそれを咎めなかった。

「そこに見知った顔があるのですが、それは当家の者にございますか。采女殿」

成次の問いに采女は動じることなく、しずかに口を開く。

「いいえ、ちがいます」

「ではその者はなんと名乗ってそこにいるのです」

「名乗りは関係ございません。この方たちは我が主の認めた当家の客人にございますれば」

客人である以上、身柄を鳥居家の采配にはゆだねない、そう明言したのだ。

勝手をするならば井伊家を敵にまわしたと思えと脅しても同然だ。采女の口調は穏やかながら、内容は容赦がない。

「では彼女にお訊ねするとしましょう。いかなる縁あってこちらにおられるのです」

「え……あの……」

素直にすべてを話してよいものか。しかしここで采女にすがるわけにもいかない。

あこが成次の視線を受けながら言葉を探していると、「客人への詮索はご容赦のほどを」と采女が割って入った。

「ご用件ならば、私が承りますれば」

「では采女殿、先ほどの家人に話を聞いたところ、みな当家の者だと名乗っております。ですが、当家の者がこちらにいるはずがございませぬ」

恐慌状態の鳥居家の家人たちを収めたのは成次だったらしい。成次はこちらに来る前に、家人たちから事情を聴取していたのだろう。

当主の実弟である成次に、鳥居家の家人が逆らえるはずもない。成次は事情を聞いて、もうあらかたの状況は飲みこんでいる。その上で、あこを断罪にきたのだ。

「御家のご当主の許嫁と名乗っていると聞きおよびましたが、鳥居本家から姫を送りだした事実はございません」

騙りの偽者だと、成次は真正面から突きつけてきた。

「その虚言を容れて客人として迎えられたのではないかと、危惧する次第にございます」

「虚言とは異なことを。御家ゆかりの方々ゆえにお迎えしたわけではございません」

「では当家の名とは関係がないと？」

「然様にございます」

家人たちは鳥居家の一行だと名乗っている。しかし采女は鳥居家とは無縁の客人として迎えたという。鳥居家とは無縁なのだから騙りかどうかは関係がない。ではなんの縁あっての客人なのだと成次は訊きたいところだろうが、訊いたところで当家の都合でと答えるだけだろう。

采女は矛を持たず、家の名ひとつを盾にとり、穏やかな面をくずさない。成次は完全に守りに入った采女をどう攻略したものかと攻めあぐねている。

非礼にあたらぬ範囲で追及をかわすさまは、とても十代の青年のものとは思えない。

味方にしているうちは気遣いのできるいい人だと思っていた。だが、気遣いができるということは人の思考と感情を読むのに長けているということだ。こうしてみると兄の主馬同様、敵に回したくない類の人だったらしい。先代直政が目をかけて養子に迎えただけのことはある。

しかしそこに割って入る声があった。

失礼つかまつります、と廊下から声がする。家人は廊下に控えたまま入る様子はなかった。

「客人がいらしている最中です」

後にしろと采女は言外に命じる。

「は。なれど」

客人の前で明かしていいものか考えていたが、やがて家人は意を決して口を開いた。

「愛宕から、ご公儀の方々が」

ご公儀――つまり幕府の者だ。

采女が務めの最中に邸にもどっていることは、幕府方は知らないはずだ。直継の口から洩れたのだとすれば、人をやるより式神を飛ばして自ら呼びつけたほうが早い。

なにかがおかしい——采女もそのことを察したのだろう。

井伊家が幕府に臣従している以上、公儀の使者はなにをおいても優先する。采女は成次に中座の非礼を詫びて、寝所を後にした。

あこは成次と共に部屋にとり残される形になったが、成次も公儀の使者に不審なものを感じているらしい。成次の意識は、あこの詮索よりも使者への疑問に向いている。

声をなくした室内に、小一郎の穏やかな呼吸だけが時の流れを刻んでいた。

やがて表座敷に踏み入る足音が聞こえてきた。その数は一人や二人ではない。十人以上で押し入ってきた形だ。不穏な空気を察して成次は廊下を見やったが、この部屋からでは表座敷の様子はうかがいしれない。

ほどなくその大勢の足音は立ち去り、代わりに動揺を隠しきれない足音がひとつ、部屋に近づいてきた。とても采女のものとは思えない。

顔を見せたのはやはり采女ではなく、邸の家人だった。

「おそれながら申し上げます。当家の主は、ご公儀の方々と共に愛宕屋敷に参りました」

「采女殿が？」

成次が問い返す。正規の方法で呼びつけられたなら、客人である成次に采女みずから詫びて

ゆくはず。参りましたと言ったものの、あのあわただしさから察するに、強制連行だったにちがいない。あきらかな異常事態だ。

（どうして采女殿が……）

「愛宕でなにがあった」

成次が問うと、家人はさらに頭を低くした。邸に仕える者として、見聞きしたものを口にすることはできないのだろう。

その事情は成次も察したらしく、「私は鳥居土佐守成次、権大納言秀忠公の随身だ」と身の上を明かした。他言の責めは自分が負うと言ったのだ。

「公儀の者として事情を聞かせてもらおう」

すると家人は平伏しながらも、おそるおそる口を開いた。

「――権大納言さま、ご重篤との由」

「なに……!?」

驚きのあまり、成次は身を浮かす。

「主、右近大夫ともども、愛宕屋敷にて控えるべしとの仰せにて」

思いもよらない報せに、成次は言葉をなくした。

また詳細がわかりましたらお伝えにまいります。そう言い残して、家人は下がった。

（……若さまが……重篤……？）

先ほど秀忠と会ってから、まだ一刻と経っていない。あのときはにこやかに笑っていた人が、どうして急に重篤など。

（急に……？）

その言葉に肌が粟立った。導かれる答えは——暗殺。

傷害か毒か、いずれにせよ接待役の井伊家の責めが問われる事態だ。城主の直継と実務上の責任者の采女が捕らえられるのも無理もない。家人は控えるといったが、事実上の監禁だ。

（どうして、こんな……）

鳥居家家人の諍い、宗二の暴挙、結界の崩壊、あやかしの侵入、秀忠への刺客、小一郎の負傷、采女の連行、直継の監禁——すべてが目まぐるしくて、考えが追いつかない。

（いったい、なにがあったの）

落ちついてと言い聞かせるものの、胸の奥がふるえる。

偶然にしてはかさなりすぎた凶事。見えない糸に絡まれて、いつしか身動きがとれなくなっている。その蜘蛛の正体は、そしてその狙いはなんなのか。

あこがうつむいて震えていると、だん、と踏み込んでくる足音があった。

「すべてそなたたちの仕業か、化生！」

金属が摺れる音がして、成次が刀を抜きはらう。

「ちがいます、わたしは化生なんかじゃ……！」



「では何者だ!?」

刀が振りかざされる。あこは身を転がして反射的に避けていた。しかし狭い寝所の中、そう逃げ場はない。寝所を出ようにも隣室には薄灰色のものがいる。陸だ。普段は邸内に上がりこむことはないのに、主の激昂を察して入ってきたのだろう。

「わたしは鳥居家の娘です！」

「私の姪は江戸にいる！」

「わたしはあなたの姪じゃないかもしれない、けれどもたしかに鳥居忠政の娘なんです！」

「まだ言うか……ッ！」

あこの目の前に、刀を突きつけられる。

鋭い切っ先に、心が吸い取られるかと思った。目が釘付けになったまま瞬きもできない。弁解しようにも、口を開こうにも唇がふるえるばかりで、喉がせまって声にならない。言葉が通じない、聞こうともしない相手に、どうすれば信じてもらえるのだろう。

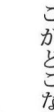
この刃先が喉元に食い込めば、命の灯はすぐさま消えうせる。灯——そう、刀を手にするからは、死は常に隣りあわせだ。

（死……？）

先ほど、死に向き合った小一郎の顔。死が側にあるのは小一郎だけではない。幕府に捕らえられた直継と采女は、秀忠に万一のことがあったときにはまちがいなく。

（……殺され、る……？）

そのとき、ふ、とあこの身体から力が抜け落ちた。



——温かいな。そう小一郎は思った。

身体は冷え切っているのに、なぜか左手だけが温かい。

冬の澄んだ空の下にもかかわらず、ここがどこなのかはわからない。周囲には真白の雪原が広がるばかりだ。

そしてしんと静まりかえった雪原なのに、どこか騒々しい。とおくの家で騒いでいるようだ。その騒々しい空気は、江戸からの道中を思い出させた。手のかかる悪ガキが騒ぎを起こす毎日だったが、なぜか楽しかった——と思うとともに、小一郎はこれが夢なのだと知った。

江戸を発ったのは四月、いまはもう雪の季節ではない。

——ではここはどこで、いまは何月なのか。

それはもう幾度も自身に問うたことだ。時渡りのことを知り、元の世界とこの世界の関係を考えて、何度も問いかけた。そして気づいてしまった。

——どこともいつとも知れないこの世界。ここにとどまるかぎり、彼女は解放されるのだと。

羽柴の娘でもなく、鳥居家の姫でもなく、井伊家当主の許嫁でもなく。ここは、今まで名に翻弄されつづけた彼女が、何者でもない彼女自身としていられる場所だ。

もしずっと客人として置いてもらうことが叶うなら？　彼女がここがいいと言うのなら？

自分は彼女をこの世界に置いてゆくことができる。それだけの力が今の自分にはある。

主家の姫と筆頭家老の嫡子――一番近くにいるようで、しかしそれは生まれながらに与えられた枠組みの関係でしかなかった。自分はその枠組みの中の人間で、そこから自分が出ることも、彼女を解放してやることもできなかった。

苦しむ彼女を救おうにも自分はまだ子どもで、はやく大人になりたかった。けれども、時は自分が大人になるまで待っていてはくれなかった。当主が遺した彼女の縁談――自分では彼女を幸せにできないと真正面から突きつけられた。

それから元服し、大人になったつもりが、子どものときとなにも変わっていない。相変わらず枠に囚われて、彼女の心を殺してでも嫁がせるのがいまの自分の務めだ。

大人になるということは、力を得ることではなかった。なにかを得る代わりになにかを失う、その決断をできるようになったということだ。

なぜ迷いこんだのか。どうすれば元の世界にもどれるのか――自分はそんなことよりも、迷いこんだここで自分ができることはなにかを考えてしまった。

彼女が幸せになる方法――それは彼女を、あたえられた務めから解放することだ。自分がそ

の責めを負いさえすれば、得られるものはあまりに大きい。

だから自分は言った。負えないなら触れるな、と。裏を返せば、負う気があるなら任せるということだ。あの者にその覚悟があるなら任せてもいい――いや、彼女の幸せがあの者の手にしかないというなら、任せるしかなかった。

だが、愛宕屋敷に住まう彼女は、姫という立場でなくてもいいといった。この時の中では自分は姫ではないのだから――そう言って、その立場をみずから放棄していた。

彼女には身分という枠をなくしたときに失うもの、姫として生まれた彼女はその大きさが見えていない。

姫として嫁げば、嫁ぎ先でも鳥居家の娘として遇されるし、生家に戻ることもできる。だが、迷い人としてこの時間にとどまるなら、彼女に残されるのはあの者の心ひとつ、もし関係をそこねればもはや帰る場所はない。

彼女は生家に居場所がなかったが、その日の寝る場所や食事がなかったわけではない。身分をなくすということは、住まうべき場所も食事もすべてをなくすということだ。

毎日あたり前のように朝餉夕餉が運ばれて、衣の準備も風呂の準備もされて、休むべき床も敷かれる。そのあたり前が、姫ではない者にとってはあたり前ではないのだということに彼女は気づいているだろうか？

自分は彼女の心を信じている。だが一生を決める判断をさせるにはあまりに幼い。己の毎日

の暮らしを支えているものが見えていない。

そしてあの者も、彼女とおない年なのだ。本人の資質もあって年齢以上に世の中が見えているように思う。だがそれでも弥介や宗二とおない年だ。聡いといっても限りがある。

好きだから側にいたい、それだけでは世の中は済まされない。人ひとりを背負うことの意味、あの者はそれをわかっているだろうか。

秀忠公との思いがけない会見で、期せずしてあの者の顔をまた見ることになった。そして杯を受けるときの表情から、悟った。——まだ迷っているのだと。

子ども特有の、根拠なくあふれる自信から背負うと言われるよりよほどいい。あの者が年齢以上に世の中が見えているのは認める。だが、見えているがゆえに背負いきれないことも気づいていた。彼女をあの場に連れ出さざるを得なかったこと、そのことで己を責めていた。

彼女はあの者はがんばっていると言った。たしかに十六という年を考えれば、努力していると思う。だがいくらがんばったところで、結果が伴わないならば、彼女をこれ以上任せるつもりはない。

彼女の本当の許婚がどんな相手かはわからない。しかし習いにしたがって嫁げば、彼女がいらぬ苦労を負うこともない。

嫁ぎ先で幸せになるもいい。帰ってくるもいい。ただ、彼女がまだ幼いころのように、己の出自で苦しむことなく、明るく笑っていてくれるなら、それでよかった。

家人たちの暴走は、みずからの甘さが招いた罰だ。彼らは家老名代高須源十郎に従っているのであって、自分自身の望みを叶えるためにつき合っているわけではない。

情に溺れたかと言われたが、そのとおりだ。もし望みが叶うなら責務を捨てるつもりだった。

そんな自分だから父は、最初にその覚悟を問うたのだろう。彼女がいなくなったあとも鳥居家の家臣として生きるか、彼女のためにいま死ぬか——彼らに話しそびれた時間は、自分の迷いの時間でもある。

——ああ、だから温かいのか。

自分の咎から身を斬られ、手が血に濡れているから。

しかし手のひらをみても、そこにあるはずの朱がなかった。自身の血より温かななにかが、手のひらを包みこんでいる。

斬られたはずの傷口も、痛みは残っているが、命に障るものではない。

これはなんなのか——その思惟は、彼女の叫び声によって断ち切られた。

あこの身体から力が抜け落ちる。それは心が抜けたせいだけではない。

後ろに手をひかれたのだと気づいたのは、寝所の夜着のなかに倒れこんでからだった。

そこには、横たわっているはずの者がいなかった。

（小一郎……？）

あこの手をひいた小一郎が、それまであこがいた場所に入れ替わっていた。

いつ意識がもどったのか、小一郎は片膝で身を起こし、左手には枕元にあった刀を握りしめている。右手はいつでも抜ける位置だ。

呼吸が荒い。先ほど斬られたばかりなのだからあたり前だ。身を起こしているだけで精一杯のはずだが、そこには成次と刺しちがえる覚悟があった。

睨みあったまま、ひとつ、ふたつ——真白な小袖に朱がにじみはじめる。

「だめ……」

熱が、命が、また抜け出ようとしている。命が失われるのは一瞬だ。ほんの一太刀で、それで今まで生きてつないできたすべてが断ち切られる——小一郎がいなくなる。

（そんなのはいや！）

「やめて！　小一郎！」

あこは身を起こして小一郎にしがみつく。気力だけで支えていた小一郎の身が傾いだ。

小一郎に覆いかぶさり、背中から成次の刀が振り下ろされることを覚悟する。

——しかし痛みは襲ってこなかった。

こわごわふりかえると、成次が刃を納めるところだった。

「変わらぬな、まったく……」

成次はそう漏らすと、しかたないとばかりにため息をつく。
「――迷い人だというのは、まことか」
「え……？」
「家人たちがそう言っていた。こちらへの輿入れの最中に時に迷いこんだのだと。大方の話はすでに聞かせてもらった」
身を起こすあこを小一郎は引きとめようとしたが、大丈夫と目で語り、成次に向きなおった。きっと今なら話を聞いてもらえる。
「はい。わたしは鳥居左京亮忠政の娘、五月に許婚の右近殿の元へむかう最中に、二月に迷いこんでしまいました。それからここにお世話になり、半月になります」
成次は真意を見抜こうと陸とともにあこを凝視していたが、やがて口を開いた。
「五月の婚礼は、こたびのご上洛で延期になったはずだが」
その問いには、小一郎が居ずまいを正して代わりに答える。
「これ以上の延期は外聞があろうと、婚礼に先だって江州に」
「おまえは寝ていろ」
「そういうわけにはまいりません」
成次が刀を納めたとはいえ、まだ危険が去ったわけではない。
小一郎が成次から目を離さずにいると、成次は「しかたない」と二振りの刀を腰からはずし、

鞘ごと小一郎に突きだした。
「怪我人はこれでも抱いて寝ておけ」
一瞬虚をつかれた小一郎だったが、「……は」とそれらを恭しくあずかった。
そして成次は「場を移そう」とあこを隣室に誘う。あこは、おそらく聞き入れないだろうと思いながら、小一郎の手を取って告げた。
「小一郎は休んでいて。命は右近殿が救ってくれたけど、傷はまだふさがっていないから」
しかしおまえ、と小一郎は言いかけたが、あこの落ちついた目を見てうなずいた。
「……なにかあれば、すぐに行く」
わかったわと笑みを見せて、あこは寝所を出て襖を閉ざした。そして邸の家人を呼んで、傷の開いた小一郎の手当てを頼む。
先ほど握った小一郎の手は熱かった。怪我のせいで高熱が出ているのかもしれない。いま小一郎の手をわずらわせるわけにはいかない。
(わたしが、なんとかしなきゃ)
隣室にゆくと、そこいたのは成次ひとりだった。陸はまた庭に下りたらしい。
成次は大名だが分家の者、あこは本家の姫だ。どちらが上座につくこともなく、真正面から向きあった。寝所の隣の部屋なので、小一郎にも声はとどいているはずだ。
「すまなかったな。怖かったか」

抜刀の非礼を詫びた成次に、あこは「いえ」と返した。
たしかに、いまも鼓動がはやい。しかしそれは自身に突きつけられた切っ先への恐怖ではなく、秀忠に、そして直継にしのびよる死への恐れだ。
秀忠は直継を弟のようにかわいがっていた。自分のせいで直継に累が及ぶことはきっと望んでいない。
（絶対に死なせたりしない）
これが仕組まれたことだとしても、救いだしてみせる。そのためにいま必要なのは叔父を説得することだ。あこは腹に力をこめて、体内でうずく恐れを追いはらった。
「おっしゃるとおりわたしたちは迷い人です。そうなったのはわたしのせいかもしれません」
「なに？」
「昔からあったんだそうです。わたしが嫌がってないかを引き起こすことが――わたしがまた、怖がって、逃げたくて、ひき起こしたのかもしれません」
実家を出る前は、嫁にいけば家から出られる、そのことが心を支えていた。はやく鳥居家を出て、あたらしい家に行くことを望んでいた。けれども行く先の井伊家は譜代筆頭の家、行った先にも居場所がなかったら？　羽柴の娘と拒絶されたら？　そう怖がっていたことも事実だ。
けれど、もう大丈夫――現実を受け入れられる。
「そして秀忠さまの一件も、間接的にはわたしのせいかもしれません。……わたしが、怨霊を

呼び覚ましてしまったから」

偶然というにはかさなりすぎた凶事。婚礼が三度めに延期となったとき、なんと言われたか。なにかが祟っている——そう言われはしなかったか。

祟りと聞いて思いだすのはひとつの名だ。再会を約したまま、姿を見せぬ男。

自分が時を渡ったことでこの地に封じられていた石田三成を解放してしまった。そして彼が仕組んだことだとすれば、これらの一件も自分の引き起こしたことと言える。

「怨霊？　佐和山に棲まうという鬼のことか？」

佐和山は赤鬼を喰らった鬼の棲み処——直政が亡くなって以来、まことしやかにささやかれている噂だ。

しかし成次はあくまで噂にすぎないと思っているのだろう。あこの言に眉を寄せたため、あこは三成にさらわれた一件を話した。

成次は聞き終えても半信半疑といった体だった。にわかに納得するのはむずかしいだろうが、成次は井伊家の〈力〉を知っている。

信じがたいが否定できない、そんな狭間で揺れていたが、やがて成次は歎息を漏らした。

「……まあたしかに、彼奴ならばあたえられた機を無駄にはすまいな」

「あの人のことをご存じなんですか？」

豊臣の天下のときに成次は、京に住まう父元忠や兄忠政に代わって江戸や領地にいることが

多かった。一方、生前の三成がいたのはもっぱら上方だ。接点があったとは思えない。

「関ヶ原の戦のあと、捕らえた彼奴の身柄を上様からあずけられてな。みずからの信念を貫き、敗すれど屈せず、敵ながらあっぱれな心映え――といいたいところだが、正直、あの才覚は二度と敵に回したくなかった」

敗軍の将となってもどうやらあの矜持は折れなかったらしい。首を落とされるまでそうだったというのだから筋金入りだ。

「しかし、若様のご重篤が怨霊と化した彼奴の仕業ならば、きっとご無事だ。若様の手元にはこちらの家の御守りがある。万一のことはあるまい」

「御守り……？」

「先日、掃部殿が江州に使者に立ったとき、右近殿からもらってきたものらしい。毎晩うなされていた若様が、それを受け取ってからというもの悪しき夢は見なくなったようだ」

「え……右近殿から？　嘘……」

そんなはずはない。先日醒井で会ったときは報告だけで立ち去ったし、その前に佐和山に来ていたときも直孝は直継に会っていない。

直継からでなく、他に力を持つ者からもらったのだろうか。

力の持ち主といえば、直継の他には采女しか知らない。だが直孝は采女にも会っていない。当主みずからが祓いに出ているくらいだ。ほかに力がある者がいれば側に置いているだろう。

（じゃあ誰が掃部殿に……？）

他言無用――その声音が耳の奥によみがえる。

初めてその言葉の意味に気づき、戦慄が走った。

（まさか秀忠さまの件は、あの人じゃなくて、掃部殿が仕組んだこと……？）

しのは、直孝が跡目を狙っていると言っていた。この不祥事で直継が更迭されれば、跡を継ぐのは直孝だ。

しかし、将軍宣下のための上洛に不祥事など、御家取りつぶしにもなりかねない事態だ。邪魔な兄を排斥できても、継ぐべき家がなくなれば元も子もない。

（……でも、元から継ぐ気などなかったのだとしたら？）

父に認められぬまま市井で暮らし、元服して一門に迎えられても家の者からは白眼視され、家から締めだされるように江戸で秀忠に仕えて。家からつけられた養育役を斬り、養子の口を探すものの直継に断られ、家という冷たい檻の中で飼い殺されて。

直孝がそんな境遇を恨んでいるのだとすれば、こうは思わないだろうか。――家ごと潰れてしまえばいい、と。

公儀も、井伊家の一門である直孝が、実家で事に及ぶとは思うまい。そこに隙が生じる。

一生一度、復讐の千載一遇の機会と――暗いささやきが聞こえなかっただろうか。

いやそんな人ではない、と考える自分もいる。直孝はただ周囲の誤解を解かなかったために、

なにかにつけて悪しざまに言われているだけだ。しかし、自分を受け入れようとしない場所、そこへの復讐の念がなかったといえるだろうか。

自分の場合は、実家に居場所はなくとも、嫁ぎ先という逃げ道があった。しかし男は一生、家の名に縛られる。逃げ道はない。ならばいっそ壊してしまえと――そのささやきを無視できるだろうか。

（なにがどうなっているの）

なにが正しいことなのかわからない。しかし、わかるのはひとつ、直孝が主君である秀忠に偽りを告げていたということだ。

（なんのために……？）

「嘘？　嘘とはどういうことだ」

「わたしはこの半月の間に、掃部殿が二度江州にいらしたのを見かけました。ですが掃部殿が右近殿にお会いしたのは一度だけ、そのとき御守りなんてもらっていません。その前後にお会いしたとも聞いていません」

成次は息を飲んだ。そして記憶を探り、愕然としている。

「ではあの言葉は偽りであったと……？」

成次は色をなくし、すぐさま立ち上がった。

「愛宕にもどる」

「わたしも行きます」
あこも共に立ち上がる。なぜ秀忠に偽りを告げたのか、行って、たしかめなければ。
しかし、成次は一言で斬り捨てた。
「君には関係のないことだ」
「でも！」
言い募ろうとするあこを、成次は深い黒の瞳でまっすぐに見つめた。
「君も知っているかもしれないが、私は陸たちを連れてよく山に入る。そこで時迷い人に会ったことがある」
「え……？」
「その後、山でふたたびその者と再会したが、その者は私のことを知らぬと言った。彼は私の顔など見忘れただけかもしれない。だが山で迷ったこと自体も覚えていないと言っていた。その者は記憶を失ってしまったのかもしれないし、本当に私と会っていないのかもしれない。一度会ったきりの相手だ、私が見まちがえただけかもしれない。おなじように見える彼が、別の人間だったという可能性もある」
その言葉にあこは息をなくした。
「ひとつ言えるのは、ここは君がいるべき世界ではないということだ。仮に君が怨霊を呼び覚ましてしまったのだとしても、君が危険を冒すことはない。君は元の世界に帰りなさい」

成次の声を聞きながら、あこはうつむいて、きつく指をにぎりしめた。
「……いいえ、わたしは帰るわけにはいきません。右近殿を助けないといけないもの」
「当主に、惹かれたか」
とっさに言葉を紡げずにいると、成次は目を眇めた。
「ならばはっきり言おう。いま愛宕にいる当主、彼の許嫁は君ではない。私の姪だ」
突きつけられた現実に、あこは息を飲む。
「これから彼に嫁ぐ姪のためにも、君にはこれ以上、当主と関わってほしくない」
――側にいるべきは、自分じゃない。わかっている――わかっている。
婚礼を怖がって天災を起こして、いまもまた江戸の許嫁から目をそらして。自分の進むべき道から逃げないと言いながら、今もまた傷ついてしまうのは、現実から目を逸らしているからだ。自分はなにも変わっていない。
（けれど、本当の許婚じゃなくたって）
「――右近殿を、お慕いしています」
言葉にしてはじめて、想いが形になった。心の中にたしかなものが宿った気がした。
（右近殿を好きになったのは、許婚だからじゃないもの）
初めから報われるはずのない想いだった。それでもその心はたしかにここにある。
「この世界の姫に、あなたの姪に取って代わろうっていうんじゃないんです。ただ、右近殿は

わたしに元の世界で生きてゆく力を——勇気をくれました」

この世界は自分とは無関係だから、すぐに別れる人だから——そうして割りきって生きていれば、いまこうして傷つくこともなかった。けれどももっと大事なことに気づけないまま元の世界に帰って、これからも怖いことから逃げながら生きていったにちがいない。

羽柴の娘——一生ついてまわるその出自。徳川の世の下で、自分の居場所なんてどこにもないと思っていた。けれども、受け入れてくれる場所もあるのだと教えてくれた。

そして彼は、言葉の力も教えてくれた。

——ひとりで抱えるな。

これから自分が歩んでゆく先に、彼はいない。けれども離れていても、もう二度と会えなくても、その言葉を抱いてゆける。自分がひとりではないのだと信じることができる。

「わたしはもらうばかり、守られるばかりで、右近殿にまだなにも返せていません。なのにいま危険にさらされている右近殿を見捨てて帰ることなんてできません」

自分は元の世界に帰る日のことを思って、口にしないで行こうと思った。でもいまは彼にこの想いを伝えたい。

重荷かもしれないし、邪魔かもしれない。受け入れられないと言われてもしかたがない。

必要がないならすぐに忘れ去ってくれてもかまわない。それでも、その想いの欠片の一部でも、彼のなにかしらの救いになるかもしれないなら。

ただもらうばかりでなく、自分がここにきた意味もあったのかもしれない。そう思えるから。
「右近殿を無事救いだしたらちゃんと元の世界に帰ります。帰って鳥居家の娘としての責務を果たします。だから――」
どうか、お力を貸してください。
あこは畳に膝をついて手をつくと、深々と頭を下げた。
それからどれほど間があったのか――ほう、とため息が落ちてきた。
「……変わらないな」
言って成次はしゃがみこむと、あこの肩に褐色に灼けた手を乗せて、顔を上げさせた。
「まっすぐなところが私の姪ととてもよく似ている。許婚を助けたいというところも。姪よりも君の方がよほどしっかりしているみたいだが」
姪――江戸の姫。直継の本当の許嫁。彼と並び、将来をともに歩んでゆく女人。
どのような姫なのか知りたい。けれども知りたくない。知ったらきっと想像してしまう――
そしてまた、よからぬ想いが湧く。
あこが目を伏せると、成次は想いを察したのだろう。すまないと言って手を離した。
「……君の気持ちを考えない発言だったな」
「いえ――右近殿を支えてあげてくれる方でよかったです」
それは嘘ではない。直継には幸せになってほしい。心からそう祈っている。

けれどもそれを口にはしたくない。痛みを感じるのは自分のわがままだ。

成次はそんな自分をじっと見つめていたが、やがて立ちあがった。

「なにか手を打つにしても、まずは愛宕屋敷の状況を知らなければはじまらないな。若様の容体が気になる。私はいったん愛宕屋敷へもどる。状況がわかれば人か陸を走らせよう。家人たちには邸を出ないように言ってある。宗二の様子も今は落ちついている。問題はないだろう。君は源十郎が無茶をしないように見張っていてくれ――と聞いているんだろう、源十郎」

成次が続きの間への襖を引くと、小一郎は血のついたままの白小袖姿で控えていた。朱の染みがさほど広がっていないことが救いだ。

「私が命じても聞かんのだろうが言っておく。あまり主に心配をかけるな」

成次は小一郎の差しだした刀を腰に差すと、そう言い残して部屋を後にした。

小一郎は、成次があらためて呼んだ家人から手当てを受けるために、寝所に籠もった。

ひとり残された部屋で、緊張の糸が切れたあこは、魂が抜け落ちたように天井を仰いだ。

（……なにを言ったの、わたし）

その場の勢いで言ったわけではない。もうすでに出ていた答えだ。それを自分が直視していなかっただけのこと。

しかし言葉にしてみると、それはあまりに重かった。

――これでもう、終わりだ。

（そう、これで終わりにするの）

終わりにするためにも伝えたい。自分という人間がたしかにここにいたことを。

この半月のことなど、直継はすぐに忘れてしまうかもしれない。けれども伝えた想いと、もらったその返答は、自分の中で一生、生きつづけるだろうから。

（ちゃんと、お別れしないとね）

直継を救い出して、想いと別れを伝える。こんな陥れられたような形で終わりにはさせない。

あこは夜の庭に下りて、天を見上げた。暗雲が垂れこめ、いつ降り出してもおかしくない。

月は見えない。暁も遠い。けれども思い出したのは、江戸屋敷で見た夜空だ。

伏見に残った祖父と家康に従った父の武運を祈りつづけ、夜中にふと思い立って見上げた空。

あの日の空はどこまでも黒く、どこまでもつづき、祈りはどこまでも届くような気がした。

あこは腰から懐刀の錦を抜く。祖父がくれたものだ。

いま愛宕屋敷にいる直継は、祖父が遺してくれた許婚ではないけれど。

――わたしの大切な人なんです。

――どうか守って、あの人を。

あこは錦を両手で握りしめて、天に祈りをささげた。

「ああ、ちゃんと手当てしてもらったのか」

闇に浮かび上がる佐和山城――その一室に入り、三成を一目見るなり吉継は告げた。

肩から胸にかけて巻かれた包帯が、三成の胸元から覗いている。

巻かれる前に、そんな大仰な、と意見したのだが、左近に受け入れられることはなく、今まで怪我を放置していた仕置き分もあわせて、必要以上にぐるぐると巻かれてしまった。

無論、包帯といっても生身のように傷をふさぐためのものではない。霊力の回復を補助するものだ。包帯に織りこんだ左近の力が、じわじわと体内に沁み入ってくる。

三成はむっとして「過保護にも程がある」と漏らしたが、吉継は「いや？」と答えた。

「主は元々、資質や体格に恵まれたほうではない。前線に出るのはやめたほうがいい」

まぁ左近殿にそこまでされれば言われずともわかろうが、と吉継は容赦なく刺してくる。

病弱なのはそなたのほうこそ――そう言い返そうと思ったが、向かいに座す吉継は、髪や眼の色こそ薄いものの、その姿は霊力に満ちあふれている。

元々霊の類に近い血だったのだろう。生前はその血が災いして難病を負うことになったが、人の肉を捨て去ったいま、吉継は本来の姿を取りもどしたようだ。光をはらんだ長髪が、薄物の羽織にゆるやかに流れている。

「恵まれたそなたにしては、ずいぶん出し惜しみをしたものだと思うが？」
出し惜しみ？　と問い返す吉継に、三成は扇をもてあそびながら言を継ぐ。
「仕掛けたのはふたつだけか？」
挑発に乗るかと思いきや、吉継の返す言葉は淡々としたものだった。
「それで十分だろう」
そう告げて、吉継はやわらかな笑みをこぼす。
「派手に動けば戦と知れる。準備万端ととのえられた城を攻めるほど愚かなものはない。戦は結果的に城が落ちればいい――それが敵自身の手によってでもな。馬鹿正直に軍をぶつけあって大将首を取るだけが戦じゃない」
太閤はかつて、吉継に百万の軍を預けて戦をさせてみたいと戯れに言ったことがある。しかし吉継の手に百万の兵はいらない。吉継には環境を味方につける策がある。
関ヶ原の戦の際も、吉継が三成に与すると、越前の武将の多くが三成方についた。周到に根回しした上で会津にむかったはずの家康も、吉継の影響ばかりは誤算だったはずだ。
当時の吉継は余命いくばくもなかった。家康も吉継の才を認めつつも、いま敵にさえ回らなければいずれ消えゆく命、その程度の認識だったのだろう。
「大将が一騎打ちなどもってのほかだ。真正面から挑んでいては、それこそ命がいくつあっても足りない」

三年前の直政の件を揶揄され、三成は疎ましげな視線を向けた。しかし、吉継は色の薄い眼を細めたまま、微笑を浮かべているだけだ。その余裕がさらに三成を逆なでした。

だが、吉継の仕掛けどおりに事態は転がっている。

愛宕屋敷には直孝の来訪、采女邸には鳥居家家人の不安の隙をついて呪をかけ、結界の厚い二箇所を内側から弱めた。

直孝が復讐になにかをするかもしれないという疑心、源十郎が姫のために責務を放棄するかもしれないという疑心、そして井伊家が徳川家に刃を向けるやもしれないという疑心――それらが絡み合って、佐和山はいまも疑心に踊っている。

疑心は人が誰しも飼っている〈鬼〉だ。人の心に潜んでいる鬼を吉継はつつきだしたのだ。

「衰弱しきっているとはいえ相手は水神の末裔だからな。こちらが直接手を出せば返り討ちに遭う危険がある。それに兵部殿がなにを仕組んでいるやもしれん。あの者の処分は幕府に任せればいい」

水神の加護を受けた井伊家当主の命を取るのは至難の業だ。ならば直接手を下さずに、陥れればいい。幕府の命とあらば、みずから腹を切らざるをえない。

譜代筆頭井伊家の粛清。その事実は各地の大名の疑心を掻きたて、徳川に従うことへの不安が湧き起こるだろう。不安の空気はさらなる不安を呼ぶ。そこに三成がつけこむ隙ができる。疑心という名の鬼が徳川家を内から食らい、利害で編み上げた天下はみずから生んだ毒で病み、

斃れるのだ。
「次はどう攻める？」
吉継の策は、離間の計を用いた長期戦だ。そこに敵の姿はないほうがいい。仮想敵とさだめられれば、逆に団結されるおそれがある。
「主は攻めるより先に身体を癒すことを考えろ」
「無策なのか？」
「京の結界を超えるために必要なことだ」
なるほどな、と三成は首肯した。主だった大名はみな京にいる。秀忠の将軍宣下祝賀のために参じさせたことが、逆に徳川家にとって仇となるというわけだ。
「それと、ひとつ生じた手ちがいをどうするかが先だな」
秀忠の昏睡――それは三成の狙ったところではない。
秀忠を傀儡とし、井伊家当主にはみずから命を絶たせるように清洲で呪をかけたはずが、どこかで手ちがいが生じた。吉継の言に落度を責める響きはなかったが、三成はむっとして言い返した。
「手ちがいはあったが、結果はおなじだ」
秀忠が倒れた以上、幕府が井伊家当主を釈放するはずがなく、当主がいなければ秀忠の呪は解けない。もしこのまま秀忠が命を落とせば、幕府は井伊家を処断する。予定より早いが、諸

国大名への疑心の呼び水となることは変わりがない。
「だが、まだ駒は残っている。もうすこし貪らせてもらうとしよう」
その言葉に、三成は盤上の駒に想いを馳せた。
「――ああなるほど。まだあれの使い道があるか」
「うまくいけば、もう一匹釣れるかもしれない。めずらしく主が執心というではないか」
「執心？　……ああ、あれか。執心したおぼえもないが」
「ではなぜ真っ先に狙わない？　主は敵であれ味方であれ、不安要素は真っ先に取り除く性分だろう」
「たかが迷い人ひとり、盤上の駒ではなかろう？」
「それはどうかな。使い道によっては一気にひっくりかえせるかもしれない。過程のない攻略は好みではないが、駒は押さえておかないとな」
吉継は手ちがいで生じたその事態すらも利用するという。まったくもって容赦がない。邪気を感じさせない笑みが、さらに凶悪に見える。
――さて、雲が晴れたときにはどうなっているものかな。
愛宕屋敷は水神の雨の結界にかたく閉ざされ、入りこむ余地はない。しかし鬼はいまも確実に、屋敷内でうごめいている。
「……そういえば」

まだだったな。そう言って、三成は手元にあった杯を吉継に突き出す。
吉継はそれを凝視していたが、やがて「ああ、そうか」と表情をゆるめた。
——次の杯は戦のあとに。
そう約したまま、五年の月日が経っていた。
「まだ終わってはいないが？」
はぐらかす吉継に三成は苦い顔をする。からかっていることが見え透いているだけに、なおさら性質が悪い。
「だが、今年も良い花が咲いているな」
吉継は庭先の桜を見やる。
最後に会ったのは秋だった。その前の春はいつだったか。
思い出すのは京の桜だ。醍醐の桜、その花もさることながら、それは見事な観桜の宴だった。
あの方が存命であったころの天下太平の日々。武士が押さえつけるのではなく、商人も民百姓も笑って暮らせる世——それは正しく引き継がれるべきだ。
その想いは言葉にせずともわかっている。
ふたりはたがいに酌をすると、咲き誇る桜を前に杯を交わした。

あとがき

こんにちは、魔法使い見習いＬＶ３の九月文です。

今回も「すばやさ」しか上がらなかったので、「メタルなんとかになれば？」と転職を勧められました。が、せっかく足が速くなったので城めぐり（必然的に山登り）をしていました。

子どもの頃、遠足といえば安土山か観音寺山で、体力のない私は遠足が大嫌いでした。山好きさんが「そこに山があるから」というのが信じられませんでしたが、最近は平気で登ります。「そこに城があったから」。……愛の力は偉大です。城好き・石垣好きの方、同志募集中です。

本編も3冊めに入り、やっと教科書に載っている人が出てきました。側にいるのは彦根城在住の白い猫がらみの人です。そういった裏話的なものをあとがきで書こうと思うのですが、読みたい人っているのかなぁと自主規制中です。興味があるという方はお知らせくださいませ。

さてイラスト担当の久織さま、２巻の小一郎の腰に惚れました。武道の基本はやっぱり足腰ですね。それと雑誌の直継の揺れる前髪にときめきました。担当さま、いつも率直なタイトル案をありがとうございます。私は言葉遊びが好きなので、ついこね回してしまうみたいです。

結びに、こうして読んでくださっている皆さまに感謝を。またお会いできることを祈りつつ。

九月文

〈主な参考文献〉

「国史大系」黒板勝美、国史大系編修会・編（吉川弘文館）
「新修彦根市史」彦根市史編集委員会・編（彦根市）
「山形市史」山形市市史編さん委員会、山形市市史編集委員会・編（山形市）
「安中市史」安中市市史刊行委員会・編（安中市）
「侍中由緒帳」彦根城博物館・編（彦根市教育委員会）
「井伊軍志」中村達夫・著（彦根藩史料研究普及会）
「水戸鈴木家の歴史」鈴木重一・編（鈴木重一）
「鳥居元忠」和田兼三郎・編著（鈴木正夫）
「石田三成の生涯」白川亨・著（新人物往来社）

BEANS BUNKO

「佐和山物語 結びの水と誓いの儀式」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「九月文」先生・「久織ちまき」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

佐和山物語（さわやまものがたり） 結びの水と誓いの儀式（むすびのみずとちかいのぎしき）

九月文（くつきあや）

角川ビーンズ文庫 BB68-3 15930

平成21年10月1日 初版発行

発行者——井上伸一郎
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元——株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所——暁印刷 製本所——BBC
装幀者——micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-454503-1 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Aya KUTSUKI 2009 Printed in Japan

9784044545031

ISBN978-4-04-454503-1
C0193 ¥457E

定価：本体457円（税別）

1920193004571

BEANS BUNKO

佐和山物語
結びの水と誓いの儀式

九月 文

戦国の記憶鮮やかなりし時代。お嫁入りの途中、時を遡ってしまった大名家の姫・あこは、元の時間に戻る方法を探し、許婚の直継と初めての遠出に!! けれど元の時間に戻ることは、片想いの直継との別れを意味する。切なく甘い時間の中、佐和山には次期将軍・徳川秀忠の御成りという一大事が!! しかも秀忠の希望で、あこは直継と結婚の儀をすることになり!? 石田三成と、盟友・大谷吉継の罠も発動!!